和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第27集

太田・黒田遺跡　第45次発掘調査概報

２００１

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

和歌山市は、和歌山県の北西端に位置します。本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注ぐ紀ノ川は、肥沃な和歌山平野を形成し、この平野部を中心として様々な人々が生活を営み、数多くの遺跡が残されています。

今回、調査を行いました太田・黒田遺跡は、弥生時代前期に始まる県内最大規模の弥生時代集落跡としてよく知られています。また現在ではその面影も残されておりませんが、中世に雑賀衆の城として太田城が存在したところでもございます。この太田城は、中世の戦乱期に秀吉軍に水攻めを受けたことが伝承されています。

調査の結果、弥生時代前期の２条の環濠が検出され、太田・黒田遺跡が環濠集落であったことが初めて確認されました。このほか、多数の遺構や銅鏃などの貴重な遺物を検出し、新たな知見を得ることができました。

ここに報告する調査成果が、広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成13年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団
理事長　喜　多　誠　一

例　言

1. 本書は、剤盛堂薬品株式会社が和歌山市太田515－１番地に計画した事務所ビル建設に伴う発掘調査の概要報告書である。

2. 調査は、剤盛堂薬品株式会社の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約300㎡を2000年10月２日から2001年１月10日までの期間で実施した。

3. 発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	山口喜一郎	理事長	喜多誠一
文化財室長	榎本直樹	総務室長	藤田光彦
文化財班長	小原保誠	主　事	山口美二（調査庶務担当）
学芸員	益田雅司	学芸員	井馬好英（発掘調査担当）
		学芸員	川口修実（　〃　）

4. 本概報掲載の遺跡・遺構及び遺物写真撮影は調査担当者が分担して行った。

5. 本書の執筆は発掘調査担当の井馬、川口が分担し、編集は井馬が行った。なお、各執筆分担の文責は目次に示した。

6. 写真図版の遺物に付した数字番号は、実測図番号に対応する。

7. 今回の調査において出土した人骨の鑑定は、大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学の安部みき子氏のご協力を頂き、玉稿を賜りました。記して感謝の意を表します。

8. 概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益なご教示・ご指導を賜ったことに感謝申し上げます。

本文目次

1．調査の契機と経過 ……（井馬好英） ……1
2．位置と環境 ……（川口修実） ……2
3．太田・黒田遺跡の既往の調査 ……（井馬） ……4
4．調査の方法と経過 ……（川口） ……6
（1）調査の方法 …… 6
（2）調査の概要 …… 6
5．遺構 ……（川口） ……8
（1）第4遺構面検出の遺構 …… 8
（2）第3遺構面検出の遺構 ……11
（3）第1・2遺構面検出の遺構 ……16
6．遺物 ……18
（1）遺構出土の弥生土器 ……（川口） ……19
（2）その他の弥生土器 ……（井馬） ……30
（3）古墳時代の土器 ……（〃） ……32
（4）平安時代の土器 ……（川口） ……36
（5）鎌倉時代の土器 ……（〃） ……36
（6）室町時代の土器 ……（〃） ……39
（7）輸入陶磁器 ……（〃） ……40
（8）瓦 ……（〃） ……40
（9）土製品 ……（井馬） ……41
(10) 石器 ……（川口） ……42
(11) 石製品 ……（〃） ……45
(12) 金属製品 ……（〃） ……46
(13) 木製品 ……（〃） ……46
(14) 自然遺物 ……（〃） ……46
7．まとめ ……48
（1）遺構の変遷について ……（井馬） ……48
（2）弥生時代前期の環濠について ……（〃） ……50
（3）環濠出土の弥生土器 ……（川口） ……52
（4）弥生絵画土器について ……（井馬） ……54
8．自然科学分析
（1）太田・黒田遺跡出土の人骨 ……（安部みき子） ……55
報告書抄録 ……58

図版目次

図版１　調査地近景（南東から）、調査前の状況（東から）
図版２　第４遺構面全景（南から）、第４遺構面全景（東から）
図版３　SD－11・12（南東から）、SD－11（北西から）
図版４　SD－11杭断割状況（北西から）、SD－11土層堆積状況（南東から）
図版５　SD－12（南東から）、SD－12・13土層堆積状況（南東から）
図版６　第３遺構面全景（右が北）、第３遺構面全景（東から）
図版７　SD－10（北東から）、SD－２（北西から）
図版８　SD－５（南東から）、SD－５土層堆積状況（南から）
図版９　SK－35遺物出土状況（南から）、SK－35（南から）
図版10　SD－６（東から）、SD－６土層堆積状況（東から）
図版11　SK－32遺物出土状況（西から）、SK－32（東から）
図版12　SE－１（西から）、SE－２断割状況（北から）
図版13　SK－36（南西から）、SK－36（東から）
図版14　第１遺構面全景（南西から）、SV－１（東から）
図版15　北壁土層堆積状況（南から）、南壁土層堆積状況（北から）
図版16　SD－11・12出土遺物
図版17　SD－11・12・10出土遺物
図版18　SD－10・２・５出土遺物
図版19　SD－５出土遺物
図版20　SD－５出土遺物
図版21　SD－５・SK－42出土遺物
図版22　その他の弥生土器
図版23　SK－35・21出土遺物
図版24　SK－39他出土遺物
図版25　SK－32他出土遺物
図版26　SE－１他出土遺物、輸入陶磁器
図版27　瓦、土製品
図版28　石器
図版29　石製品、金属製品、木製品
図版30　SK－36出土人骨

1．調査の契機と経過

今回の調査は、和歌山市太田515－1番地において事務所ビルが建設されることになり、この建設用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である太田・黒田遺跡（遺跡番号327）及び太田城跡（遺跡番号356）の範囲内であったため、この工事に先立つ発掘調査を第45次調査として実施することとなった。

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流域南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点であり、数多くの遺跡が分布する地域に所在する。この遺跡ではこれまでに44次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代前期の竪穴住居、中期の竪穴住居や井戸など多数の遺構を検出し、これら遺構に伴う多量の遺物が出土しており、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模をほこる集落跡であることが知られている。また、弥生時代以降では古墳時代から江戸時代にかけての遺構、遺物が多数検出され、特に室町時代には羽柴秀吉に水攻めされた太田城跡の推定地が重複するなど、複合遺跡としても周知されている（第２図）。

調査対象地は、太田・黒田遺跡のほぼ中央部に位置し、さらに太田城跡推定範囲の中央部にあたる。今回の調査では、第26次調査で検出された弥生時代前期の大溝の延長部の推定地にあたることから、この大溝を含めた弥生時代前期遺構の検出と太田城跡推定範囲の中央部に位置することから太田城に関係する遺構の検出が重点課題に挙げられた。

調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施した。

現地における調査は、まず平成12年10月２日に調査区に沿ってアスファルトの切断を行い、翌日から２日間をかけて機械掘削を行った。人力掘削は、10月６日から開始し、平成13年１月10日までの約２ヶ月間を要した。写真撮影は、第１遺構面の全景写真を10月13日に、ラジコンヘリコプターによる第２遺構面の航空写真測量と空中写真撮影を11月24日に、第３遺構面の全景写真を12月18日にそれぞれ行い、平成13年１月10日にすべての作業を終了した。また調査期間中の平成12年12月23日には現地説明会を開催し、参加者は約350名であった（写真１・２）。

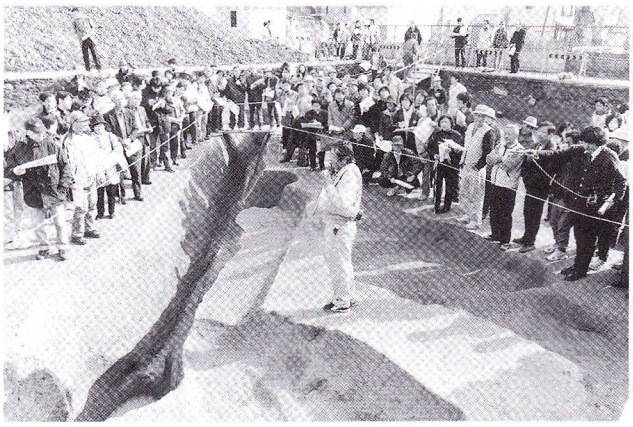


写真１　現地説明会風景

写真２　遺物展示状況

2．位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面する。本市は和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に位置している。今回報告を行う太田・黒田遺跡（１）は、和歌山平野の中央部、紀ノ川南岸の微高地上に立地する遺跡である（第１図）。

次に周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡では紀ノ川南岸の丘陵裾部に鳴神貝塚（９）や吉礼貝塚などが位置する。鳴神貝塚は近畿地方で最初に発見された貝塚として著名であり、縄文時代晩期の土坑墓からは耳栓をし、伸展葬の状態で埋葬された人骨が検出されている。吉礼貝塚からは縄文時代前期前半から後期の遺物が出土しており、紀ノ川流域における縄文時代の遺跡では最古のものである。これらの貝塚から出土する貝類は、海水系のものが多数あり、海岸線が岩橋山塊西側にまで及んでいたことを示している。

当遺跡周辺は紀ノ川の堆積作用による陸化が最も早く進行した地域である。弥生時代には紀ノ川南岸の平野部において、太田・黒田遺跡、秋月遺跡（４）などの遺跡が知られる。太田・黒田遺跡は中期を中心とした県内最大規模の集落跡であり、多量の弥生土器の他、直柄広鍬や銅鐸など注目される遺物が出土している。秋月遺跡は近年における当財団の調査によって、前期に埋没する自然流路１条と、その北側微高地において前期後葉の土坑が検出された。このことから、秋月遺跡においても太田・黒田遺跡同様に前期段階から集落が営まれていたことが明確となった。また太田・黒田遺跡との狭間であった地域においても、財団法人和歌山県文化財センターの調査が行われた。そこでは弥生時代中期の溝や土坑が検出され、多数の弥生土器が出土したことから、太田・黒田遺跡の範囲がさらに南側に拡大する可能性が考えられる。また、中期には紀ノ川北岸においても北田井遺跡、宇田森遺跡などの集落が出現する。後期には遺構・遺物の出土は極めて少なく、代わって丘陵部に高地性集落が出現し、当遺跡周辺でも古墳時代前期まで集落の形成は見られなくなる。

古墳時代の集落も引き続き、平野部を中心に立地しており、友田町遺跡（３）、大日山Ⅰ遺跡(13) や鳴神遺跡群からは多数の竪穴住居、掘立柱建物などの遺構が検出されている。これら岩橋山塊西部の遺跡では、音浦遺跡（８）、大日山Ⅰ遺跡、鳴神Ⅴ遺跡（６）、鳴神Ⅱ遺跡（10）から現代の用水路と流路方向を同じくする溝が検出されている。その中には旧河道を再掘削しているものもあり、この地一帯が水路として重要な地域であったことが知られる。またこれらの遺跡からは、滑石製模造品や手捏ね土器等の祭祀遺物が出土していて、河川や用水に関わる祭祀が行われていたとも考えられている。古墳の築造は、前期末には花山丘陵上に花山古墳群（12）が造営されるが、平野部に位置する秋月遺跡、鳴神Ⅴ遺跡でも、庄内式新段階から布留式古段階にかけての前方後円墳、方墳が集落の近傍で検出されており、それに先行するものとして注目できる。その後、中期後半から後期にかけて岩橋山塊には岩橋千塚古墳群（14）が形成され、連綿と古墳の造営が続けられた。一方では中・後期の方墳が秋月遺跡、鳴神Ⅳ（５）・Ⅴ遺跡において築造されており、鳴神Ⅴ遺跡では土坑墓や箱式石棺墓が確認され、平野部においても墓域が展開したことが知られる。

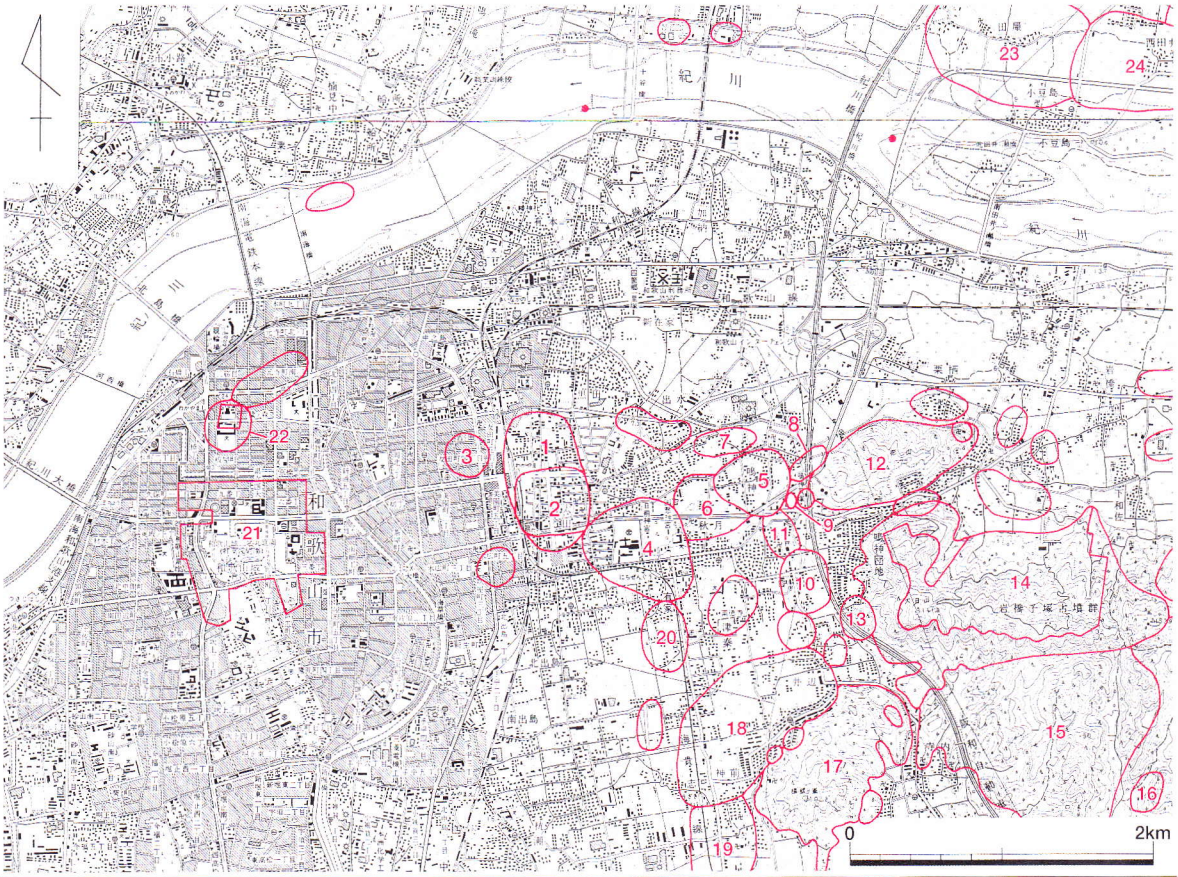
歴史時代以降は、秋月の地に鎮座する日前・国懸宮が『日本書記』にその名が見え、その起源説

話が記されている。またこの地域南方一帯は、県内最大規模の条里地割が良好に残っており、河南条里と呼称される。当地域周辺は、和歌山市域においても紀ノ川北岸の南海道沿いとともに奈良・平安時代の遺跡が集中する地域であり、太田・黒田遺跡、秋月遺跡、大日山Ⅰ遺跡、鳴神Ⅴ遺跡が知られる。当遺跡では大型の井戸が2基検出され、7世紀前半の井戸底からは斎串等が、8世紀後半の井戸からも和同開珎42枚、万年通宝4枚などが出土しており、井戸祭祀に関わるものとして注目される。鳴神Ⅴ遺跡では段構成土と呼ばれる土壇状遺構から、平安時代中期の多量の遺物が出土している。特に緑釉・灰釉陶器、初期貿易陶磁器、陶硯、土馬などの特記すべき遺物がみられる。

鎌倉時代には、鳴神Ⅴ遺跡において溝、河道、石組井戸群、土坑墓などが検出されているが、前代までに比して大要が明らかな遺跡は少ない。

室町時代には、当遺跡において大型の濠状遺構、溝が確認されている。濠状遺構は、幅約10m、深さ3m以上、長さは約130m分が確認されていて、ともに16世紀後半に埋没している。これらは廃絶時期が共通することから、雑賀衆の太田城跡（2）に関わるものと推定されている。

江戸時代の遺跡としては、和歌山城跡（21）とその城下町があげられる。鷺ノ森遺跡（22）は、三の丸北側の町屋に相当し、調査の結果江戸時代の遺構面が3面以上検出され、道路、排水施設、鍛冶炉、礎石建物、井戸、便所、蔵、水琴窟等多くの遺構・遺物が出土している。また鍛冶作業は江戸前期に盛行し、中期には衰退するなど、城下町の変遷が明らかにできる遺跡として重要である。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	**太田・黒田遺跡**	弥生～江戸	7	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	13	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	19	神前遺跡	弥生～江戸
2	**太田城跡**	安土・桃山	8	音浦遺跡	古墳	14	岩橋千塚古墳群	古墳	20	津秦遺跡	弥生
3	友田町遺跡	弥生～平安	9	鳴神貝塚	縄文～弥生	15	寺内古墳群	古墳	21	和歌山城跡	江戸
4	秋月遺跡	弥生～平安	10	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	16	吉礼砂羅谷窯跡	古墳～奈良	22	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸
5	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	11	鳴神Ⅲ遺跡		17	井辺前山古墳群	古墳	23	田屋遺跡	弥生～古墳
6	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～鎌倉	12	花山古墳群	古墳	18	井辺遺跡	弥生	24	西田井遺跡	弥生～室町

第1図　太田・黒田遺跡周辺の遺跡分布図

3．太田・黒田遺跡の既往の調査

本遺跡の調査は、昭和43（1968）年に始まり、今回で45次を数えるに至っている。既往の調査については、まず第１～25次調査の概略が『太田・黒田遺跡 第26次発掘調査概報』に、第26～32次調査の概略が『太田・黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報』に、また第35～42次調査の概略が『太田・黒田遺跡 第43次発掘調査概報』にそれぞれ記載がある。よって、ここでは第44次調査及び今次（第45次調査）と同年度に調査を行った第46次調査地点についても概略を記述する。また、南東側に隣接する秋月遺跡の範囲に含まれた地点において財団法人和歌山県文化財センターの調査（秋月遺跡：県Ⅶ調査）が行われており、この調査において検出された遺構のうち太田・黒田遺跡に関係するとみられるものの概略についてもふれておく（第２図）。

第44次調査　1999（平成11）年３月に和歌山市教育委員会が集合住宅建設に伴う調査を行った。調査地は和歌山市太田294－1番地であり、これまでの調査範囲のなかでは最も南側に位置する。調査面積は、43㎡である。検出した遺構は、弥生時代中期の溝１条と中世以降とみられる土坑２基である。弥生時代中期の溝は東西方向にのびる水路とみられ、幅1.0～1.2m、深さ60㎝、検出長約７mである。溝内部から台形土器が出土した。

第46次調査　2000（平成12）年11月から12月にかけて財団法人和歌山市文化体育振興事業団が個人住宅建築に伴う調査を行った。調査地は和歌山市太田514－2番地で、第45次調査地の東側隣接地にあたる。調査面積は、90㎡である。この調査では弥生時代の遺構面を３面検出し、その最も古い時期の遺構面から前期の土坑２基を検出したほか、その直上面において中期初頭の竪穴住居１棟や土坑などを、さらに直上面において中期中頃の土器棺１基、井戸１基などを検出した。弥生時代以降では、この同一面において古墳時代前期の竪穴住居１棟や井戸３基などを検出したほか、鎌倉時代までの遺構を多数検出し、さらにその直上面において鎌倉時代の溝を踏襲した室町時代の溝１条などを検出した。遺物では、平安時代とみられる須恵器円面硯が１点出土したほか、弥生時代から江戸時代にかけての多量の遺物が出土している。

秋月遺跡県Ⅶ:平成９年度調査　秋月遺跡の調査地点では最も西部に位置し、所在地は和歌山市太田に含まれる。元来遺跡範囲には含まれておらず、太田・黒田遺跡と秋月遺跡との狭間であった地域にあたる。調査面積は、300㎡である。この調査では、弥生時代から江戸時代にかけての数多くの遺構が検出されている。弥生時代では、中期中葉から後葉にかけての溝や土坑があり、多数の弥生土器が出土している。また７世紀後半から８世紀にかけての掘立柱建物などのほか、鎌倉時代から室町時代にかけての溝や堀状の遺構などがある。このなかで弥生時代のものは中期の範疇におさまるものであり、それまで秋月遺跡では弥生時代中期段階の遺構の検出例がほとんどなく、北西側に隣接する太田・黒田遺跡に関連する遺構の可能性が高いものと考えられる。

【参考文献】

『太田・黒田遺跡 第26次発掘調査概報』　（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年
『太田・黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報』　（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年
『太田・黒田遺跡 第43次発掘調査概報』　（財）和歌山市文化体育振興事業団　1998年
『秋月遺跡 発掘調査概報』　（財）和歌山県文化財センター　1997年

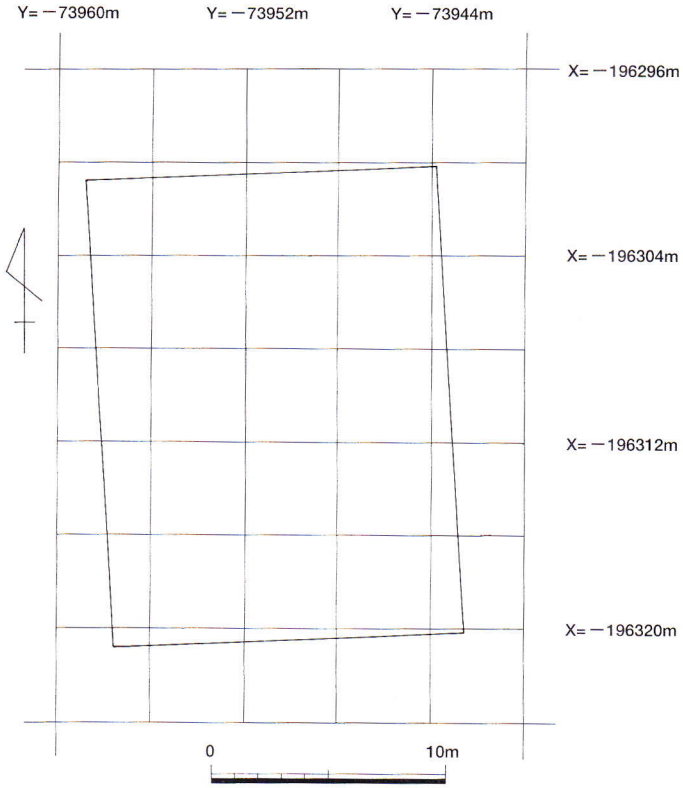
第２図　既往の発掘調査区域（黒塗部分は主たる調査地、斜線部分は調査対象地を示す。）

4．調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査は、工事計画範囲内の建物基礎部分にあたる地点において、南北20m、東西15mの調査区を設定し実施した。調査面積は、約300㎡である。

調査の方法は、まず調査地がアスファルト舗装された駐車場であったため、調査区周囲をアスファルトカッターによって切断を行った。重機による掘削は、近現代の整地土、旧耕作土（第１層）までとし、第２層以下の遺物包含層と遺構の掘削については、人力掘削によって行った。遺物の取り上げについては、調査区内外に国土座標の整数値に合った杭を設置し、４ｍメッシュの地区を設け、その単位ごとに取り上げを行った（第３図）。溝や土坑等の遺構掘削については、土層観察用のベルトを遺構に直交するライン上に設定し、写真撮影を行い、２層以上の堆積を確認したものについては実測図等の記録保存を行った。



第３図　調査地区割図

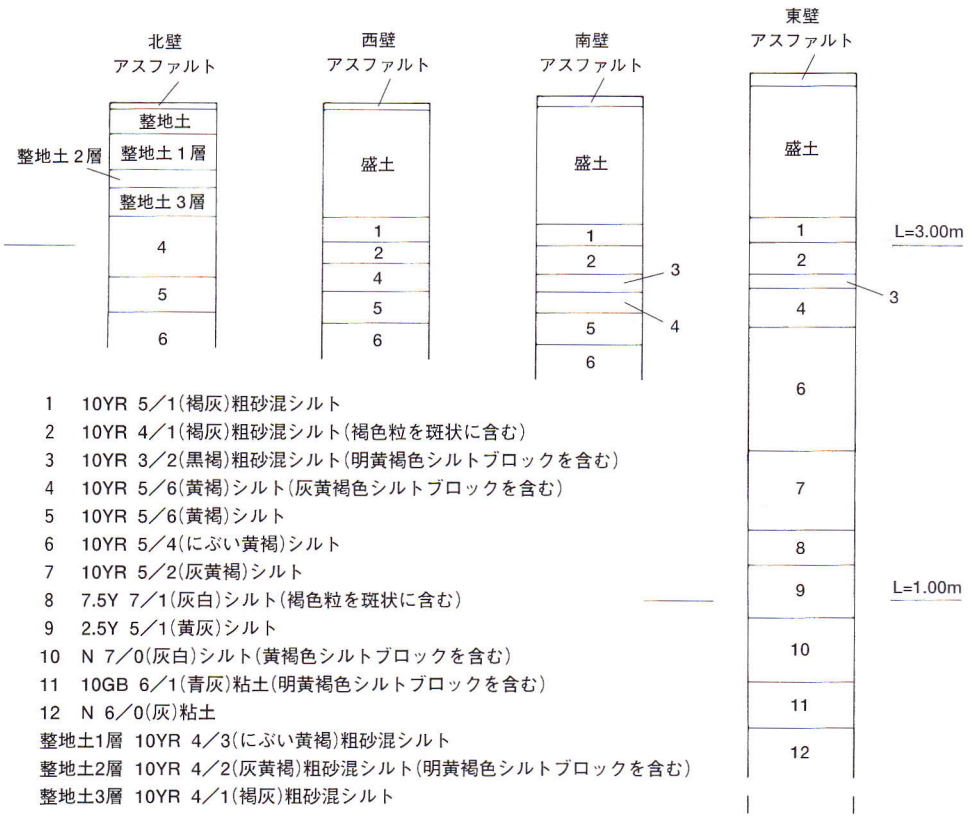
図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸を基準とした値を使用し、このラインを基準として実測を行ったが、第２遺構面の遺構全体図についてはラジコン・ヘリコプターによる航空写真測量を行い、縮尺1/40で作成した。また壁面土層断面図や遺構平面図及び土層断面図については1/20の縮尺を用いた実測を行い、重要な遺構及び遺物出土状況図は1/10の縮尺、人骨が出土した室町時代の土葬墓（SK－36）については1/5の縮尺をそれぞれ用いた。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、遺跡の水準は、国家水準点（T.P.値）を基準とした。

（2）調査の概要

当調査地の基本層序は、第４図に示した通りであるが、表土下から第２層までの状況については、調査区北端で検出した石垣を境として層序は異なっている。調査地の現況は、アスファルトにより舗装された駐車場で、まず西・南・東壁についてはこのアスファルト下に山土を用いた近現代の盛土が60～70cmの厚さをもって堆積している。この盛土下には、旧耕作土である褐灰色粗砂混シルト（第１層）が約20cmの厚さで堆積する。第２層は、第１層に類似する褐灰色系の粗砂混シルトであり、約15cmの厚さで堆積する。この第２層には肥前系の陶器・磁器などが含まれ、鉄分の沈着が認

められることから江戸時代の水田耕土であると考えられる。次に石垣の内側にあたる北壁については、アスファルト下に近現代の整地土が堆積する。その下層は第１・２層が確認できず、石垣に伴う整地土が３単位確認でき（整地土１～３層）、それぞれ約10～20cmの厚さで堆積している。第３層は、調査区全体には見られず、微低地にあたる調査区中央部から南東部にかけて堆積する土層である。この第３層は、黒褐色の粗砂混シルトで、明黄褐色系のシルトをブロックとして多量に含むが、包含する遺物の年代から室町時代以降の遺物包含層であると考えられる。第４層は黄褐色系のシルトであり、灰黄褐色のシルトをブロックとして多量に含む。この第４層は、微高地側である調査区北側では約40cm、微低地部にあたる南側では約20cmの厚さを測る。第４層は、土層内に含まれる遺物の年代から弥生時代中期初頭の遺物包含層であると考えられる。第５層は、黄褐色系のシルトで約20cmの厚さを測る土層である。この第５層は、土層内に包含される遺物の年代から弥生時代前期後半の遺物包含層であると考えられる。第６層以下は井戸の断ち割り調査時に、東壁において確認した層序であり、標高０mまで掘削を行った。その結果、第６層以下標高約0.5mまではシルト層を５単位確認し、それぞれ20～70cmの厚さで堆積している（第６～10層）。第10層より下層では、灰色系の粘土層が約30cm以上の厚さで堆積している（第11・12層）。また第12層より下層の堆積状況については、安全対策が困難であったため明確にできなかったが、標高約－1.6mでは灰色系の砂層になることを確認した。本調査では第６層以下においては遺物を確認しておらず、無遺物層であると考えられる。

遺構については第２・３・４・５層上面において４面の遺構面を確認した。第１遺構面では、江戸時代末期以降の石垣、土坑を、第２遺構面では江戸時代の溝状遺構を、第３遺構面では弥生時代中期から室町時代にわたる遺構を、第４遺構面では弥生時代前期の環濠やピットをそれぞれ検出した。



1　10YR 5／1(褐灰)粗砂混シルト
2　10YR 4／1(褐灰)粗砂混シルト(褐色粒を斑状に含む)
3　10YR 3／2(黒褐)粗砂混シルト(明黄褐色シルトブロックを含む)
4　10YR 5／6(黄褐)シルト(灰黄褐色シルトブロックを含む)
5　10YR 5／6(黄褐)シルト
6　10YR 5／4(にぶい黄褐)シルト
7　10YR 5／2(灰黄褐)シルト
8　7.5Y 7／1(灰白)シルト(褐色粒を斑状に含む)
9　2.5Y 5／1(黄灰)シルト
10　N 7／0(灰白)シルト(黄褐色シルトブロックを含む)
11　10GB 6／1(青灰)粘土(明黄褐色シルトブロックを含む)
12　N 6／0(灰)粘土
整地土1層　10YR 4／3(にぶい黄褐)粗砂混シルト
整地土2層　10YR 4／2(灰黄褐)粗砂混シルト(明黄褐色シルトブロックを含む)
整地土3層　10YR 4／1(褐灰)粗砂混シルト

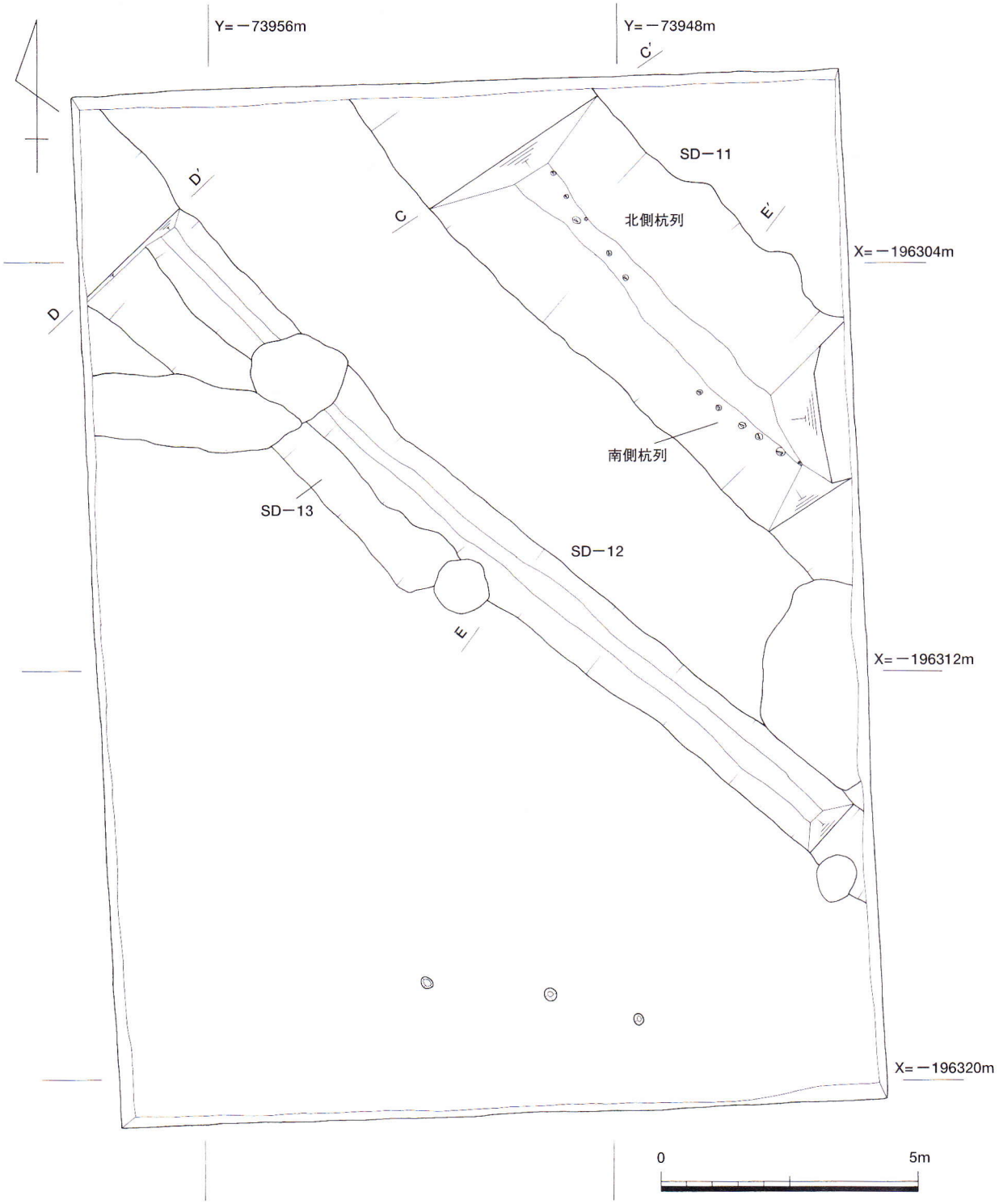
第４図　調査地土層柱状模式図

5．遺構

本調査では遺構面を4面確認し、各遺構面において弥生時代から江戸時代かけての遺構を検出した。以下、各遺構面ごとに記述をすすめ、主要なものについては詳述する。

（1）第4遺構面検出の遺構（第5図、図版2）

第4遺構面は、第4層掘削後の第5層上面において検出したものであり、弥生時代前期の環濠



第5図　第4遺構面遺構全体平面図

(SD－11・12)、溝状遺構（SD－13）やピットを検出した。遺構面の標高は2.6～2.8mを測る。

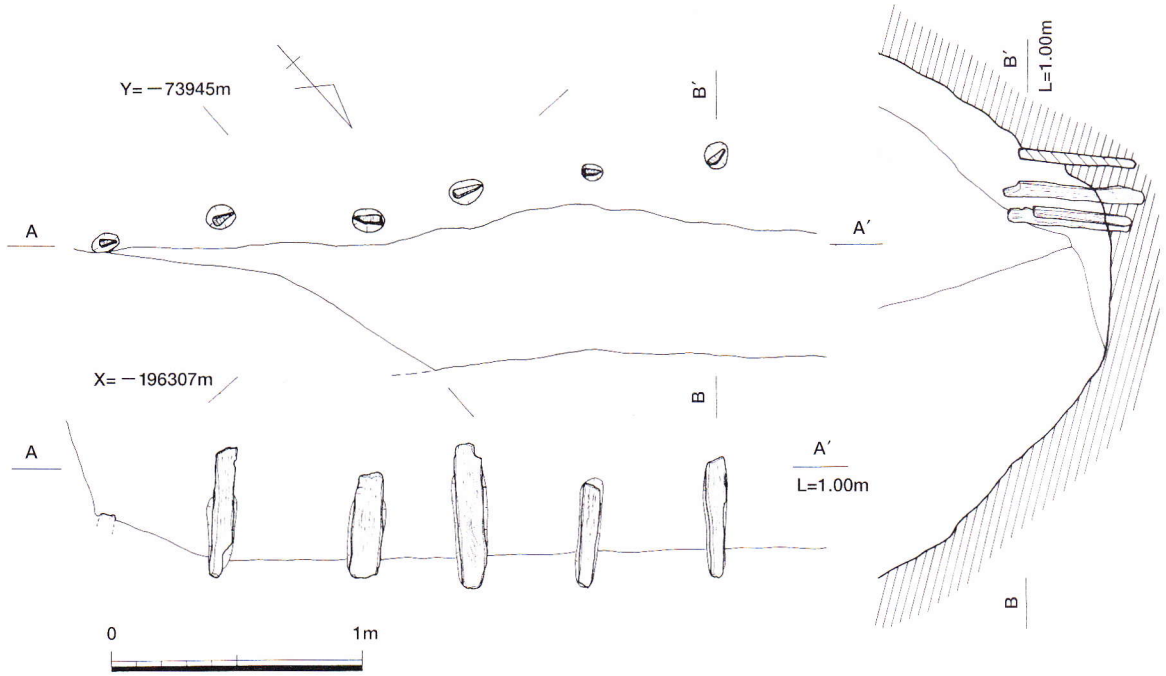
［SD－11・12］（第６・７図、図版３～５）

SD－11・12は、弥生時代前期の環濠である。

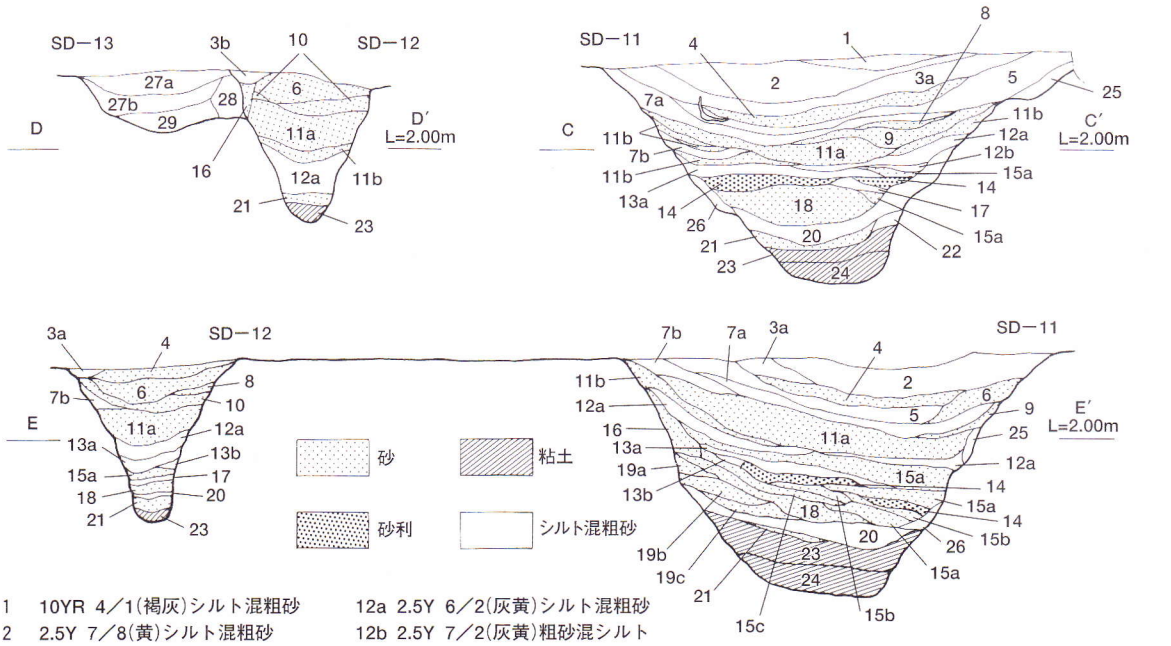
SD－11は、調査区の北壁中央から南東方向へ延びる内環濠で、主軸はN－48°－Wである。遺構の規模は、検出長13.8m、幅3.6～3.9m、底面の幅0.6m、深さ1.9～2.0mを測り、溝の断面形は逆台形を呈する。溝底面の標高は北側では0.9m、南側では0.7mを測ることから、流路方向は北西から南東方向であると考えられる。また南側では約2.6mの範囲において、約50cm等間で打ち込まれた６本の杭列を検出した（第６図）。杭は西壁際の底面のみに確認でき、溝の勾配に沿ってやや内傾させて打ち込まれている。杭の形状は、側面の一方を尖らせた断面形が三角形を呈するものである。杭は良好なものでは長さ67cm遺存しており、幅８～12cm、厚さは最も厚いところで3.0～4.0cmを測る。杭の下端は特に加工した痕跡は認められず、ほぼ平坦であり、溝の底面から９～15cm打ち込まれていた。さらに北側においても南側の杭列から2.6mの間隔を空け、南側と同じく約50cm等間で打ち込まれた５本の杭列を検出した。杭の形状や埋設の状況は南側と同じであるが、杭は北端では東壁際に、それより南側では溝中央や西壁際に打ち込まれていた。以上の杭列は、上部構造は不明であるが、矢板のような護岸施設である可能性が考えられる。

SD－12は調査区北西隅から南東方向へ延び、SD－11と幅3.0～3.6mの間隔をもって並行して掘削された外環濠である。遺構の主軸は、SD－11とほぼ等しくN－46°－Wである。遺構の規模は、検出長20.7m、幅1.2～1.4m、底面の幅0.2m、深さ1.2～1.4mを測り、溝の断面形は「V」字状を呈する。溝底面の標高は北側では1.4m、南側では1.3mを測り、流路方向はSD－11と同じく北西から南東方向であると考えられる。

この２条の環濠の覆土は、最下層に自然堆積による粘土層が堆積する他は、幾層にも粗砂と礫層が堆積しており、再掘削と幾度かの洪水を繰り返しながら埋没したと考えられる。土層の堆積状況は、概ねレンズ状の堆積であるが、SD－11の南側では西側から東側に傾斜する堆積状況が認めら



第６図　SD－11南側杭列遺構平面図及び立面図



1 10YR 4／1(褐灰)シルト混粗砂
2 2.5Y 7／8(黄)シルト混粗砂
3a 2.5Y 6／8(明黄褐)シルト混粗砂
3b 10YR 4／2(灰黄褐)シルト混粗砂
4 10YR 4／6(褐)粗砂
5 2.5Y 6／6(明黄褐)粗砂
6 2.5Y 6／4(にぶい黄)粗砂
7a 2.5Y 6／1(黄灰)シルト混粗砂
7b 10YR 5／6(黄褐)シルト混粗砂
8 2.5Y 5／1(黄灰)粗砂
9 2.5Y 6／1(黄灰)粗砂
10 10YR 4／3(にぶい黄褐)粗砂
11a 2.5Y 6／4(にぶい黄)粗砂
11b 2.5Y 6／1(黄灰)粗砂
12a 2.5Y 6／2(灰黄)シルト混粗砂
12b 2.5Y 7／2(灰黄)粗砂混シルト
13a 2.5Y 6／4(にぶい黄)シルト混粗砂
13b 10YR 4／2(灰黄褐)シルト
14 2.5Y 4／2(暗灰黄)粗砂混礫
15a 2.5Y 5／3(黄褐)細砂
15b 2.5Y 5／2(暗灰黄)細砂
15c 10YR 4／3(にぶい黄褐)粗砂
16 2.5Y 7／6(明黄褐)細砂
17 2.5Y 6／1(黄灰)シルト混粗砂
18 2.5Y 4／3(オリーブ褐)粗砂
19a 2.5Y 6／1(黄灰)細砂
19b 2.5Y 6／2(灰黄)細砂
19c N 6／0(灰)細砂
20 2.5Y 6／2(灰黄)シルト混粗砂
21 2.5Y 6／4(にぶい黄)粗砂
22 5Y 6／2(灰オリーブ)粗砂混シルト
23 5Y 5／1(灰)粘土
24 5Y 5／2(灰オリーブ)粘土
25 7.5YR 4／1(褐灰)シルト
26 10YR 4／1(褐灰)シルト
27a 10YR 4／3(にぶい黄褐)シルト混粗砂
27b 10YR 4／4(褐)シルト混粗砂
28 10YR 5／3(にぶい黄褐)シルト
29 10YR 5／3(にぶい黄褐)シルト混粗砂

0 2m

第７図　SD−11〜13土層断面図

れる。堆積土層は、最下層には灰色系の粘土層が、SD－11では約40cm、SD－12では10〜16cmの厚みをもって堆積している。その上層約1.2mは、粗砂層を主体にその間層としてシルト混粗砂層（第７図第12a・12b・13a・17・20・22層）が堆積するが、その中位においてSD－11では１cm大の礫層（第７図第14層）の堆積が認められ、再掘削の単位の一つとみなすことができる。SD－12においても、20〜30cmの厚みをもつ灰黄色のシルト混粗砂層（第７図第12a・13a・13b・17・20層）の堆積がみられ、同様に再掘削の単位としてとらえることができる。そして最上層は、SD－12が粗砂層によって最終埋没するが、SD－11は窪地として落ち込んでいたものが、第３遺構面を形成する第４層の黄褐色系のシルト混粗砂層（第７図第１・２・３a層）によって最終的に埋没したものと考えられる。

環濠からの出土遺物は、SD－11の最上層及び最下層から弥生土器が少量、最下層から木杭・不明部材などの木製品、自然木・種子などの自然遺物が一定量出土した。また最下層出土の遺物の年代から、弥生時代前期後半には機能していたことが明らかであり、SD－12の最上層遺物や、SD－11の最終埋没層である第４層に包含される遺物の年代観から、弥生時代中期初頭には最終的に埋没したものと考えられる。

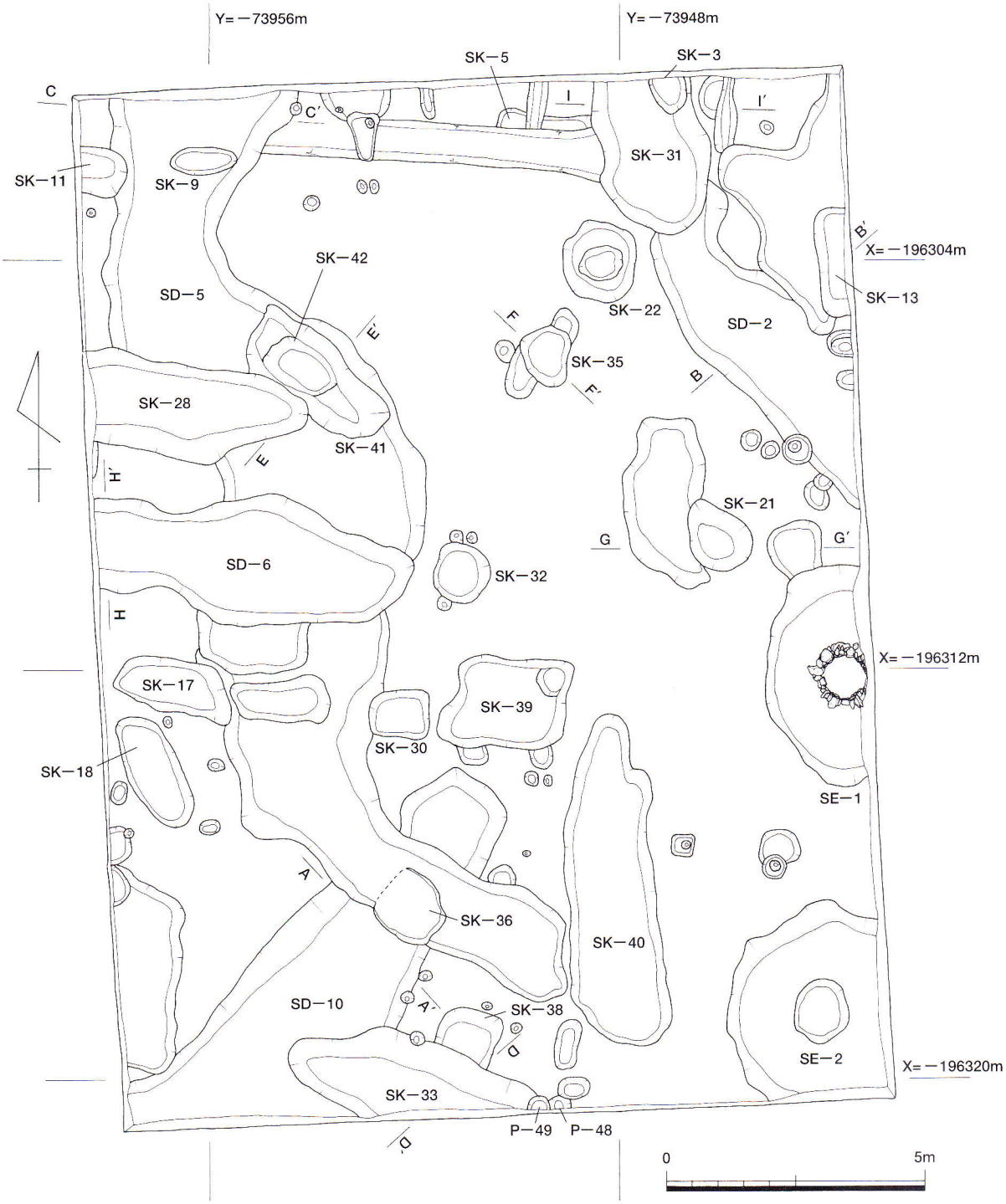
［SD－13］（第７図、図版５下）

SD－13は、SD－12に並行して掘削されたものであるが、土層観察の結果SD－12に先行する溝状

遺構であることを確認した。検出長は8.7mを測り、そのまま南東方向へは延びず、調査区の中央部で途切れるものである。また、検出幅は1.2m以上、検出面からの深さは0.5mを測る。遺構の覆土は4単位に分けられ、全体的に黄褐色系の色調をもつシルト混粗砂層である。覆土内から弥生時代前期後半の遺物が出土した。

（2）第3遺構面検出の遺構（第8図、図版6）

第3遺構面は、第2・3層掘削後、第4層上面において検出したもので、弥生時代中期から室町



第8図　第3遺構面遺構全体平面図

時代にかけての遺構を検出した。遺構面の標高は、2.8～3.1mを測る。以下、時代ごとに検出遺構の概要及び主要な遺構の説明を行う。

【弥生時代の遺構】

弥生時代の遺構は、中期の溝（SD－10・２・５）及び土坑（SK－33・38・42）などを検出した。この中でSK－38は、土器類の他、サヌカイト製石鏃の未製品が出土し、遺構の切り合い関係からSK－33より後出する時期の遺構と考えられる。

[SD－10]（第９図、図版７上）

SD－10は調査区の南西部で検出した北東から南西方向へ延びるものである。検出長8.0m、幅2.0～3.5m、検出面からの深さ46cmを測り、さらに調査区南壁外へ延びる。遺構の覆土は３単位に分けられ、上位２層は黄褐色系のシルト質で、最下層は褐灰色系の砂質が強い土層である。覆土上層において弥生時代中期初頭の土器が多量に出土した。

[SD－２]（第９図、図版７下）

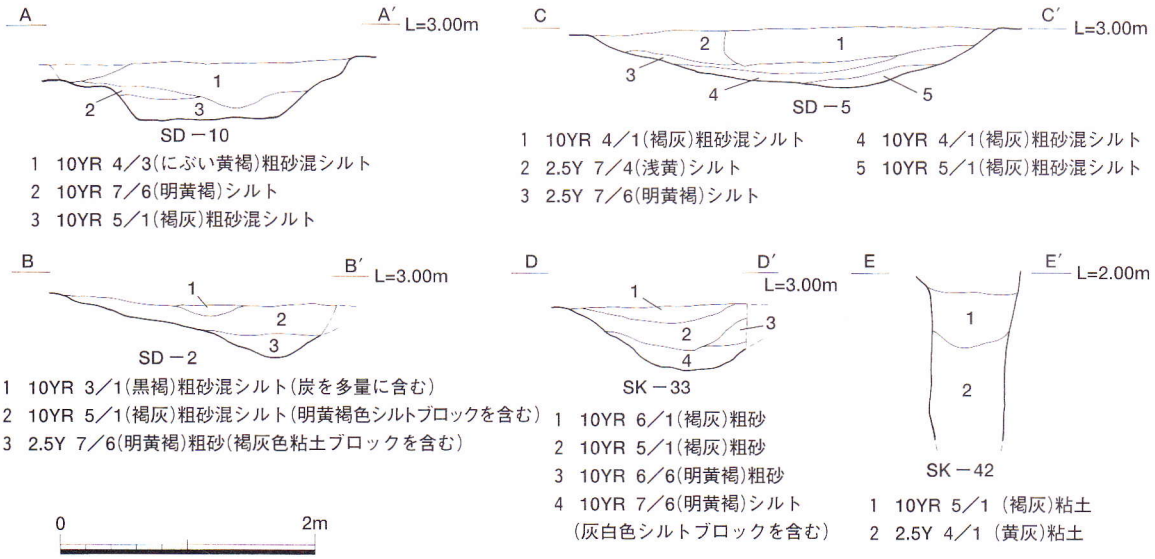
SD－２は調査区北東部で検出した北西から南東の方向性をもつものである。調査区東壁外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、検出長7.0m、幅2.0m、検出面からの深さ44cmを測る。遺構の覆土は３単位に分けられ、下層ほど砂質が強い土層で、最上層には炭が多量に含まれていた。覆土の上層から弥生時代中期前半の土器が出土した。

[SD－５]（第９図、図版８）

SD－５は、調査区北西部から蛇行しながら南東方向に延び、調査区南側で途切れるものである。検出長20.0m、幅2.7～3.2mを測り、南側では2.0mと幅を狭めており、検出面からの深さは40cmを測る。遺構の覆土は褐灰色系のシルト層が大きく３単位に分けられ、その上層と下層の間層として黄色のシルト層が堆積する。この間層を境として、上層は土層堆積状況の観察から、再掘削の可能性が考えられる。覆土内から弥生時代中期中葉から後葉の遺物が多量に出土した。

[SK－33]（第９図）

SK－33は、SD－10埋没後に掘削されたもので、検出長3.9m、幅1.2～1.5m、検出面からの深さは



第９図　SD－10・２・５及びSK－33・42土層断面図

50cmを測る。遺構の覆土は大きく4単位に分けられるが、全体的に褐色系の粗砂である。覆土内から、弥生時代中期前半の遺物が出土した。

[SK－42]（第9図）

SK－42はSD－5内において検出したもので、上部は鎌倉時代の土坑（SK－41）によって削平されている。遺構の規模は東西1.0m、南北1.4mを測り、検出面から2.0mの掘削を行ったが、底面は検出できなかった。覆土は褐灰色系の粘土が2単位以上堆積しており、弥生時代中期後半の遺物が一定量出土した。遺構の形状から井戸の可能性が考えられる。

【古墳時代の遺構】

古墳時代の遺構は、前期の土坑（SK－35・21）、中期の土坑（SK－39）、後期の土坑（SK－13・30）、末期から飛鳥時代の溝（SD－6）などを検出した。この中でSK－35・21は井戸と考えられ、覆土上層から完形の土器をはじめとする一括資料が出土した。

[SK－35]（第10図、図版9）

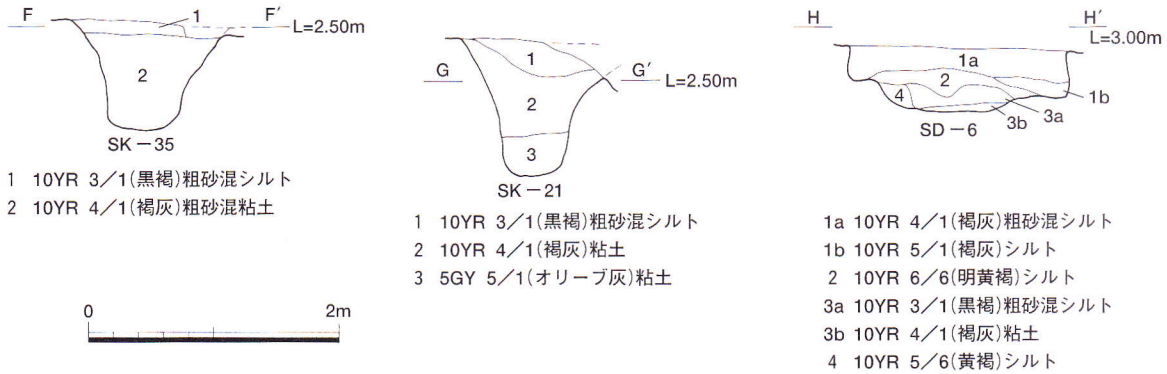
SK－35は調査区の中央部、やや北寄りで検出したものである。遺構の規模・形状は、直径約90cmの不正円形を呈し、検出面からの深さは80cmを測る。遺構の覆土は2単位に分けられ、上層は黒褐色の粗砂混シルト、下層は褐灰色の粘土が堆積する。遺物は覆土上層から一定量出土したが、検出面から約20cm下で完形の土師器壺・甕が出土した。庄内式併行期の井戸であると考えられる。

[SK－21]（第10図）

SK－21は、SK－35の南東4.0mで検出したものである。遺構の規模・形状は、直径約70cmの不正円形を呈し、検出面からの深さは1.1mを測る。遺構の覆土は3単位に分けられ、上層は黒褐色の粗砂混シルト、下層は灰色系の粘土が2層堆積する。遺物は覆土上層から多量に出土したが、SK－35同様に検出面から約20cm下で完形の土師器甕が出土した。庄内式併行期の井戸である可能性が高いが、出土遺物の年代からSK－35よりやや後出する遺構であると考えられる。

[SD－6]（第10図、図版10）

SD－6は調査区の中央部西側で検出したものである。遺構は調査区西壁外へ延びるため、全体の規模・形状は不明であるが、検出長6.0m、幅1.7m、検出面からの深さ50cmを測る。遺構の覆土は3単位に分けられ、上層は褐色系のシルト層が、最下層は褐灰色の粘土層が堆積する。また最下層からは、須恵器杯身を含む古墳時代末期から飛鳥時代の遺物が出土した。



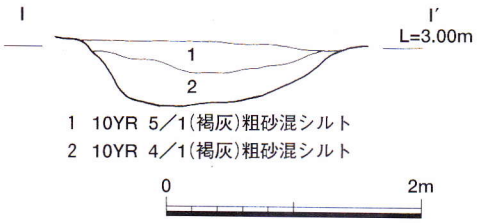
第10図　SK－35・21及びSD－6土層断面図

【鎌倉時代の遺構】

鎌倉時代の遺構は、土坑（SK－11・18・22・28・31・32・40・41）やピット（P－48）などを検出した。この中でSK－22・32は、遺構の形状から井戸の可能性がある。

［SK－31］（第11図）

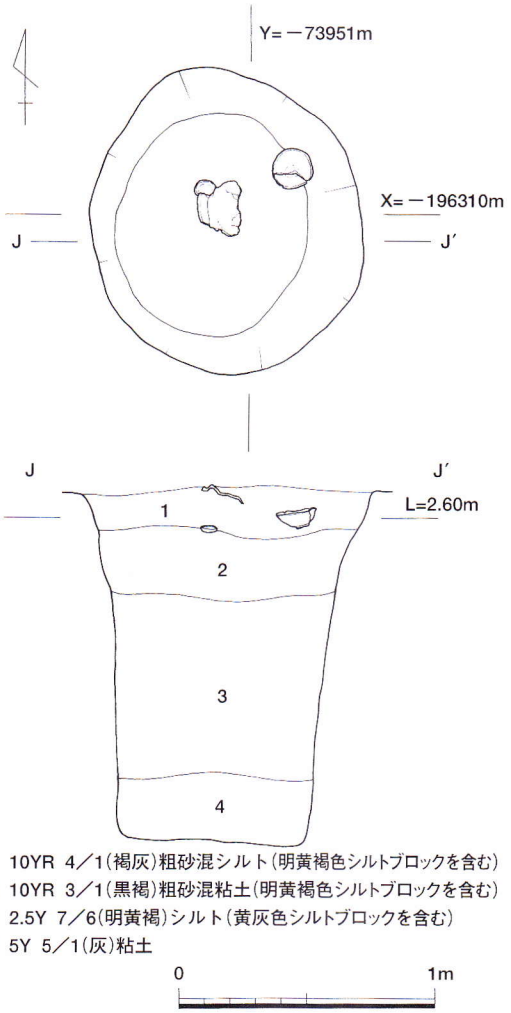
SK－31は、調査区北東部で検出したものである。遺構は北壁外へ延びるため全体の規模は不明であるが、検出長3.2m、幅2.1m、検出面からの深さ50cmを測る。遺構の覆土は、褐灰色系のシルト層が２単位堆積する。覆土内からは、土師器皿、瓦器椀、瓦類等が一定量出土した。



第11図　SK－31土層断面図

［SK－32］（第12図、図版11）

SK－32は、調査区の中央部で検出した井戸状遺構である。遺構の形状は円形を呈し、その規模は東西1.1m、南北1.2mを測る。検出面から1.4m下で底面を検出したが、最下部においては、井筒等の施設は確認できなかった。遺構の覆土は４単位に分けられ、上層は褐色系のシルト及び粘土層が、最下層は灰色の粘土層が堆積する。覆土の上層から土師器・瓦器等が少量出土した。また検出面から10cm下において、完形の瓦器椀（第31図151）と土師器皿（第31図146）が１点ずつ出土しており、これは井戸廃棄時の祭祀行為であると考えられる。



※土器は見通し図

第12図　SK－32遺構平面図及び土層断面図

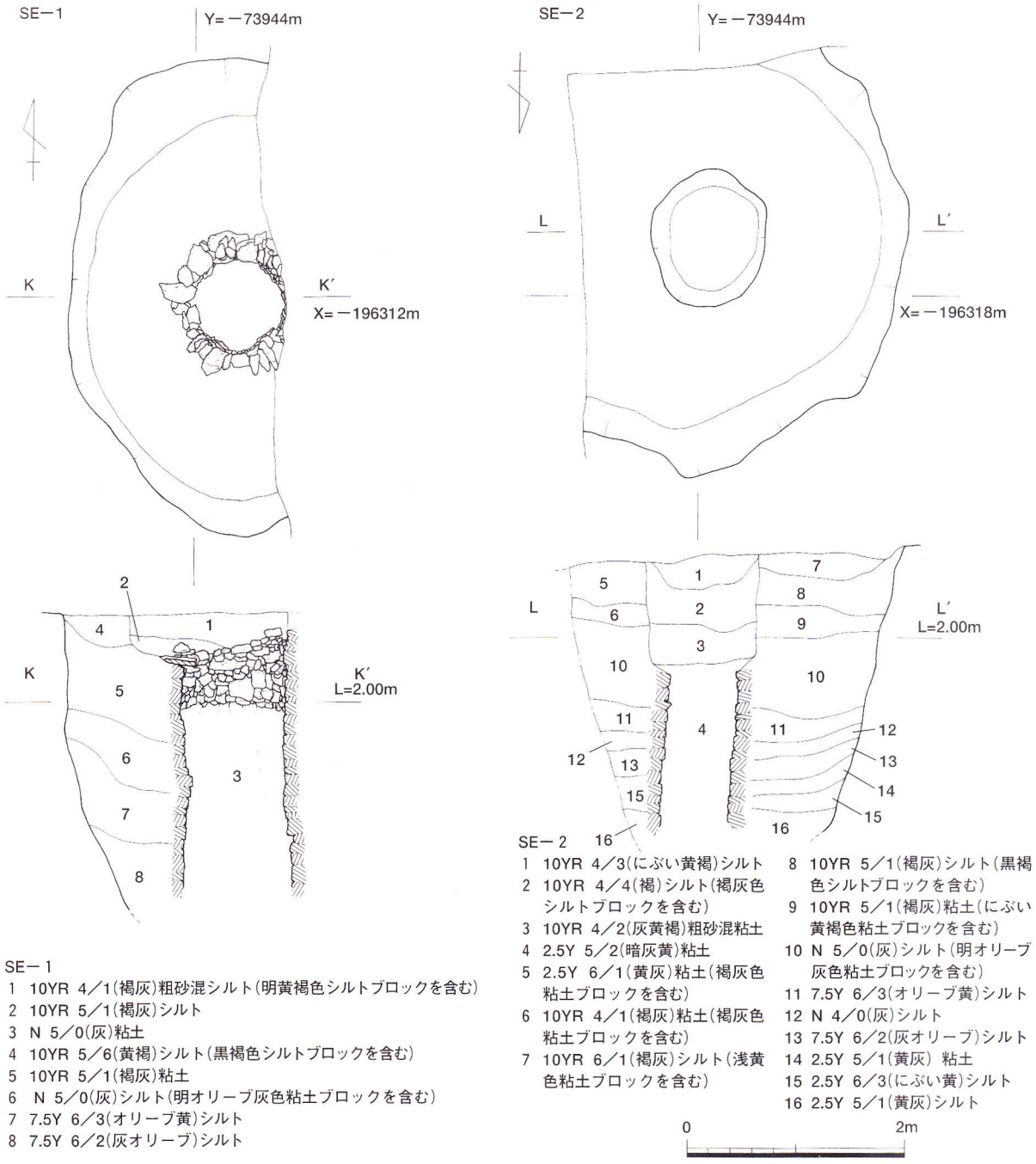
【室町時代の遺構】

室町時代の遺構は、井戸（SE－１・２）、土坑（SK－９・17）、土葬墓（SK－36）などを検出した。この中でSK－９は覆土上層に集石と共に土器・瓦類が出土した遺構であり、同様に集石が認められたSK－３も類似した時期の遺構である可能性が考えられる。

［SE－１・２］（第13図、図版12）

SE－１・２はともに調査区の南東部で検出した石組井戸である。石組は、SE－１・２ともに10～30cm大の結晶片岩と砂岩の割石を小口積みによって円形に構築したものであるが、その中でも10～15cm大の小振りな石材を多く使用している。

SE－１は、調査区東壁外へ延びるため全体の規模・形状は不明であるが、ホリカタは東西2.2m以上、南北5.5mの規模を有し、遺構の形状は円形を呈する。石組は内径80cmを測り、上部40cmの範囲において石材が抜き取られており、垂直に掘削された抜き取り坑が確認できた。遺構の底面については、検出面から2.7mまで掘削を行ったが、検出することができなかったため、井戸底の構造は不明である。



SE−1
1 10YR 4／1(褐灰)粗砂混シルト(明黄褐色シルトブロックを含む)
2 10YR 5／1(褐灰)シルト
3 N 5／0(灰)粘土
4 10YR 5／6(黄褐)シルト(黒褐色シルトブロックを含む)
5 10YR 5／1(褐灰)粘土
6 N 5／0(灰)シルト(明オリーブ灰色粘土ブロックを含む)
7 7.5Y 6／3(オリーブ黄)シルト
8 7.5Y 6／2(灰オリーブ)シルト

SE−2
1 10YR 4／3(にぶい黄褐)シルト
2 10YR 4／4(褐)シルト(褐灰色シルトブロックを含む)
3 10YR 4／2(灰黄褐)粗砂混粘土
4 2.5Y 5／2(暗灰黄)粘土
5 2.5Y 6／1(黄灰)粘土(褐灰色粘土ブロックを含む)
6 10YR 4／1(褐灰)粘土(褐灰色粘土ブロックを含む)
7 10YR 6／1(褐灰)シルト(浅黄色粘土ブロックを含む)
8 10YR 5／1(褐灰)シルト(黒褐色シルトブロックを含む)
9 10YR 5／1(褐灰)粘土(にぶい黄褐色粘土ブロックを含む)
10 N 5／0(灰)シルト(明オリーブ灰色粘土ブロックを含む)
11 7.5Y 6／3(オリーブ黄)シルト
12 N 4／0(灰)シルト
13 7.5Y 6／2(灰オリーブ)シルト
14 2.5Y 5／1(黄灰) 粘土
15 2.5Y 6／3(にぶい黄)シルト
16 2.5Y 5／1(黄灰)シルト

第13図　SE−1・2遺構平面図及び土層断面図

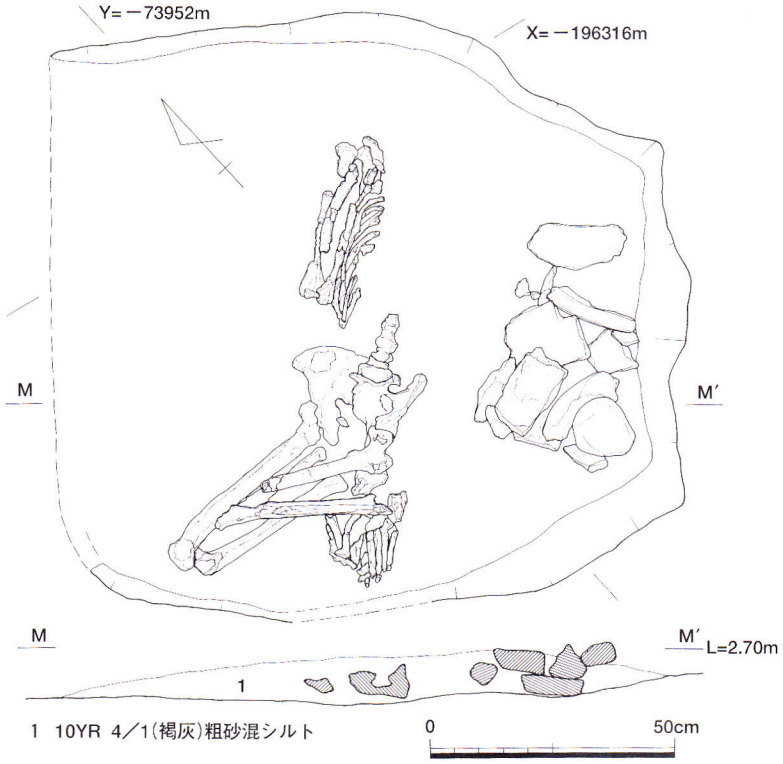
SE−2はSE−1の南約2mの位置で検出したもので、調査区南・東壁外へ延びるため全体の規模・形状は不明であるが、ホリカタは東西3.7m以上、南北4.6m以上の規模をもち、遺構の形状はやや不定な円形を呈する。石組は内径70cmを測り、SE−1と同様に上部1.2mの範囲は石材が抜き取られており、垂直に掘削された抜き取り坑が確認できた。遺構の底面についても、検出面から2.5m掘削を行ったが、検出することができなかったため、井戸底の構造は不明である。

SE−1・2はホリカタの規模や埋土の状況、主体部の石組などの様相が類似していることから、同時期に存在した遺構であると考えられ、SE−1の石組内から室町時代後期の遺物が出土しており、

SE－２についても類似した年代が考えられる。

［SK－36］（第14図、図版13）

SK－36は、調査区南方で検出した土葬墓で、人骨が良好な形で遺存していた。遺構の形状は隅円方形を呈し、規模は東西、南北ともに1.3m、検出面からの深さは10～15cmを測る。遺構の覆土は単一で、褐灰色の粗砂混シルト層である。棺材等の痕跡は確認できなかったが、南東部において15～20cm大の砂岩・結晶片岩と共に平瓦・備前焼の甕の口縁部が重なって出土しており、西側及び北側でも砂岩が出土したことから、本来は人骨を囲むように配されていた可能性がある。人骨は、上部の削平により右肋骨以下のみが遺存していたが、頭部を東に上肢・下肢を屈曲させた仰臥屈葬の状態で埋葬されていた。副葬品と思われる遺物の出土はみられなかったが、人骨の東側で出土した遺物から、室町時代後期の遺構であると考えられる。また人骨は、鑑定の結果、40歳以上の成人男性であることが指摘されている。



第14図　SK－36遺構平面図及び土層断面図

（３）第１・２遺構面検出の遺構（第15図、図版14）

第１・２遺構面は、第１層掘削後、第２層及び第３層上面において検出したものである。第１遺構面では、第２層上面において石垣（SV－１）及び不定形の土坑２基（SK－１・２）を、第２遺構面では、第３層上面において溝状遺構２基（SD－７・８）をそれぞれ検出した。遺構面の標高は3.2mを測る。

［SD－７・８］（第15図）

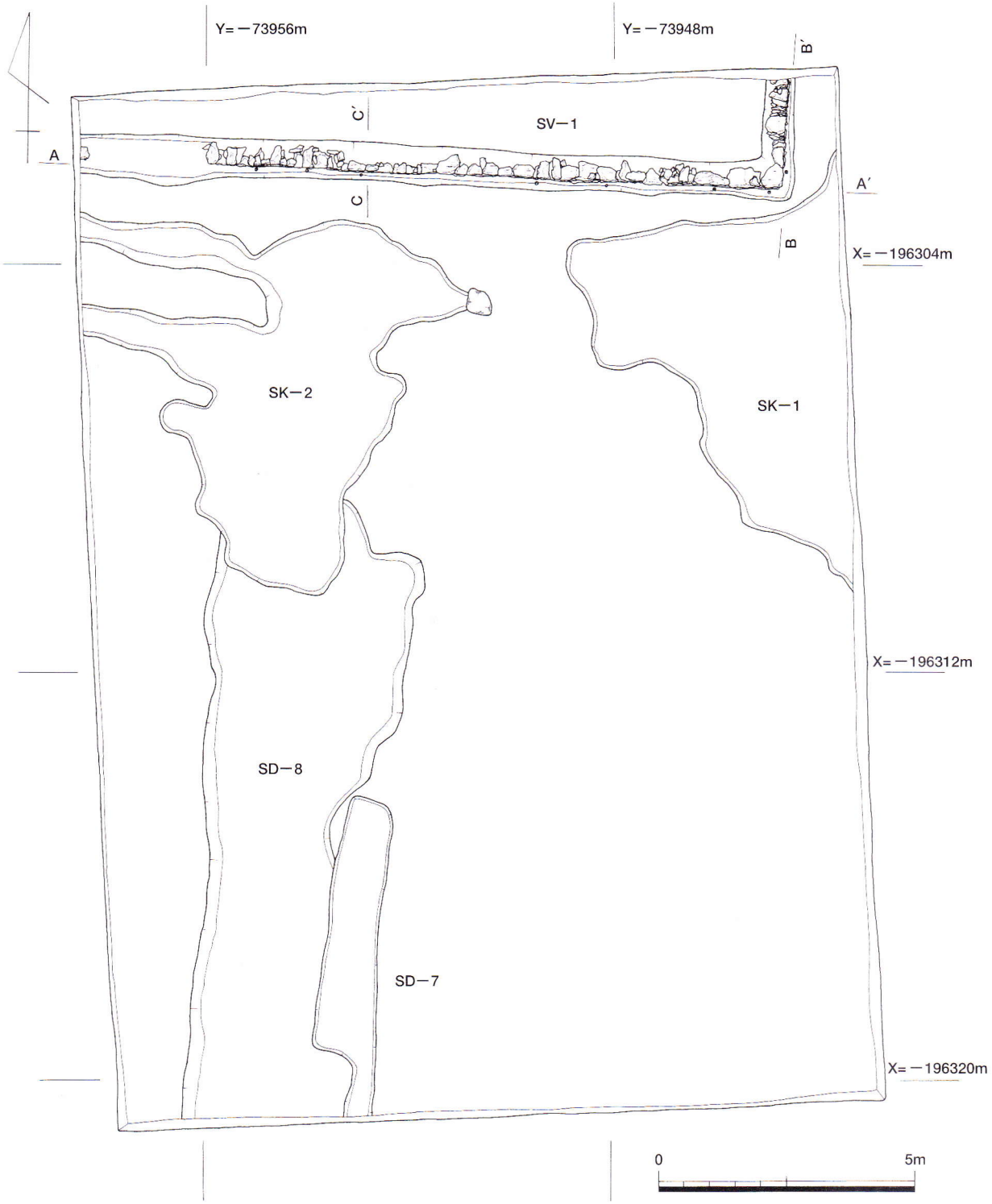
SD－７・８は調査区の南西部で検出した南北の方向性をもつ溝状遺構である。SD－７は検出長7.2m、幅1.0m、検出面からの深さ10cmを測り、さらに調査区南壁外へ延びる。SD－８はSD－７と一部切り合い関係をもち、検出長12.1m、幅3.6m、検出面からの深さ10～20cmを測る浅いもので、SD－７同様に調査区南壁外へ延びる。SD－７・８ともに遺構の覆土は単層で、SD－７が黒褐色粗砂混シルト、SD－８が褐灰色粗砂混シルトによって埋没している。覆土内から、江戸時代後期の肥前系磁器などが少量出土した。

［SV－１］（第16図、図版14）

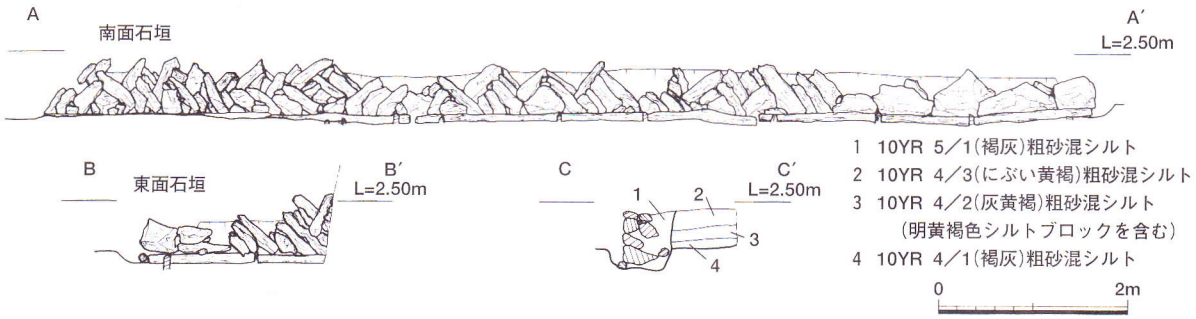
SV－１は、調査区の北端において「L」字状に検出したものであり、東側でほぼ直角に北側に折れる。石垣の検出長は、東西14.2m、南北2.0mを測り、後世に上部を撹乱されているが、高

さは約60cm遺存している。石垣の方向性はN－85°－Wである。石垣に使用された石材は、結晶片岩の割石である。

石垣の構築方法は、まず北側を整地し、そこからホリカタを掘削し、石垣下部に直径15～20cm、長さ約3.5mを測る胴木を設置する。胴木は0.9～1.2m間隔で木杭により固定されていた。胴木の上は、根石を置くことはなく、長さ30～60cm、幅30～40cm、厚さ10～15cmを測る板状の割石を使用し、裏込めに結晶片岩の小石を噛ませながら、「谷落とし積み（矢羽積み）」と呼称される構築技法によ



第15図　第１・２遺構面遺構全体平面図



第16図　SV－1・2立面図及び土層断面図

って基底部から上部を構築する。しかし、石垣南東部の角石及び角脇石の基底部ついては「谷落とし積み」により構築せず、長さ40～60cm、幅30～40cm、厚さ30～40cmを測る直方体の割石を用い、角脇石は南面石垣では4石分、東面石垣では1石分平積みしている。

SV－1は、第2層である水田耕土に対応するものと思われ、宅地と水田とを区画する性格をもつものと考えられる。またホリカタ内及び整地土から出土した遺物の年代から、構築された時期は江戸時代末期に上限をおくことができる。

6．遺物

今回の調査では、遺構の覆土及び第2～5層の遺物包含層を中心として、弥生時代前期から江戸時代にいたる時期の遺物が多量に出土した。そのうち、出土遺物の大半は弥生時代の遺物である。

まず弥生時代の遺物では、前期後半から中期後半の土器が多量に出土している。特に前期後半から中期初頭のものとしてはSD－11～13、中期前半のものとしてはSD－10・2、中期中葉から後半のものとしてはSD－5、中期後半のものとしてはSK－42からそれぞれ良好な土器類や石器などが出土した。また、土器類の中では鹿が描かれた絵画土器が1点あり、環濠の最下層からは、遺構底面に打ち込まれた矢板状の杭や斧台などの木製品、種子などの自然遺物が出土している。なお、弥生土器に関しては胎土観察の結果、特に記載がないものについては結晶片岩・石英などが含まれた在地系のものである。

古墳時代では、SK－35・21に前期初頭の一括資料があり、中期ではSK－39、後期末から飛鳥時代のものとしてSD－6においてまとまった資料の出土がある。土器以外では、前期初頭の所産と考えられる銅鏃が1点出土しており、太田・黒田遺跡においては初例のものである。

奈良・平安時代の遺物量は比較的少なく、SK－5などの遺構から土器類が出土した。

鎌倉時代のものでは、SK－32やSK－41から比較的まとまった遺物が出土した。特にSK－32からは井戸の祭祀行為に関連するとみられる完形の土器が最下層及び最上層から出土した。

室町時代の遺物量は比較的少なく、SE－1、SK－36などの遺構から備前焼などの国産陶器を中心とした土器類が出土した。またSK－36からは、遺存状態の良好な人骨が出土している。

江戸時代のものではSD－7・8やSV－1裏込めなどから、後期を中心とした土器類が出土した。

本書では、これらの遺物を大きく各時代に分類してふれ、その中で遺構一括資料として弥生時代ではSD－11～13、SD－10・2・5、SK－42、古墳時代ではSK－35・21、SD－6、鎌倉時代ではSK－32・41をそれぞれまとめて記述した。また瓦や土製品、石器、石製品、金属製品、木製品、自然遺物などの各遺物については個別に記述した。

（1）遺構出土の弥生土器

［SD－11～13出土土器］（第17・18図、図版16・17）

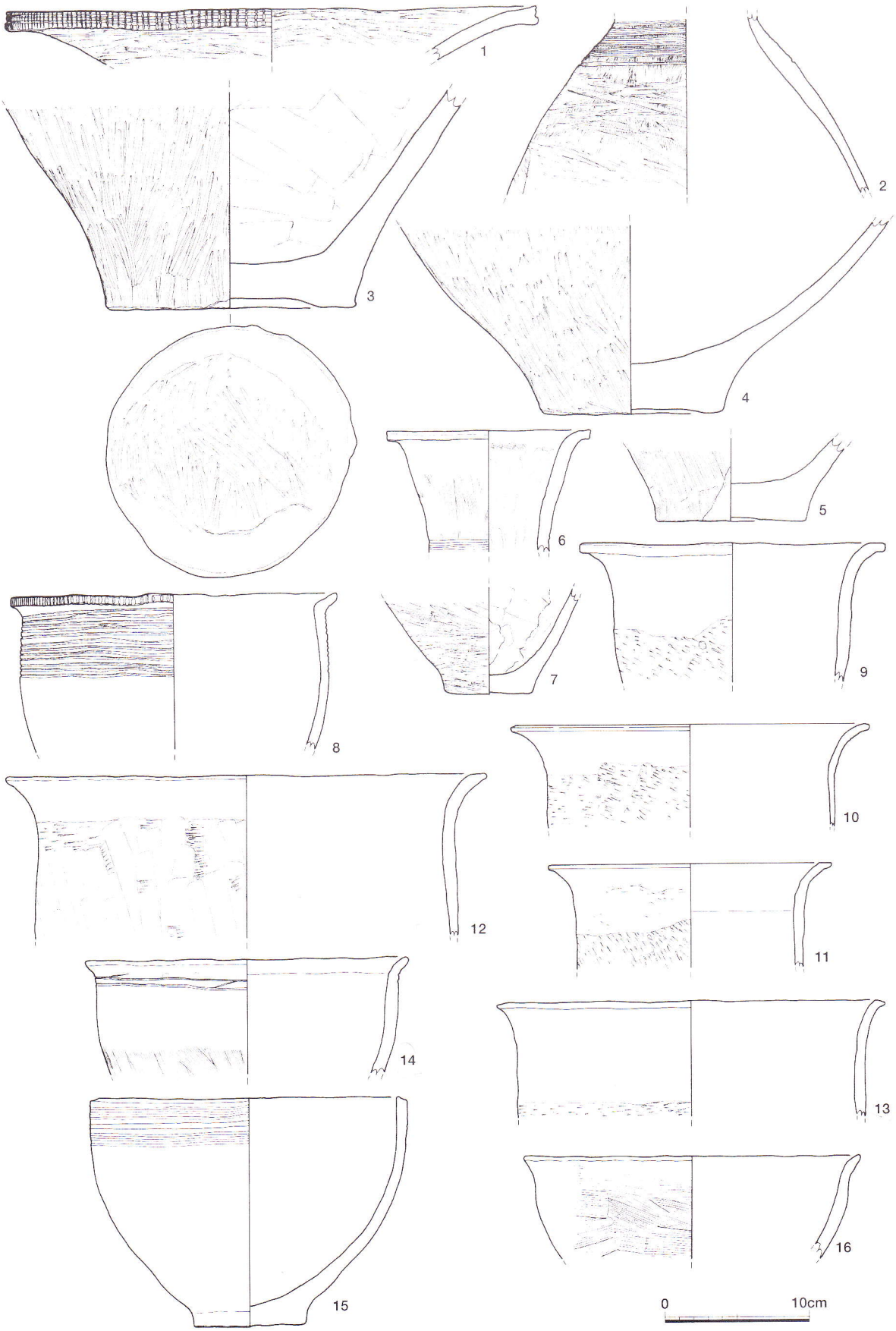
SD－11～13出土土器のうち、SD－11・12から出土のものについては、第7図第1～3層を最上層、第4～11層を上層、第12～18層を中層、第19～22層を下層、第23・24層を最下層としてそれぞれ取り上げを行った。

1～16は、SD－11・12の最下層から上層にかけて出土した土器である。

1～6は広口壺である。1は口径37.4cmを測る口縁部で、口縁端部には2条のヘラ描沈線の後、タテ方向の刻み目を施し、口縁端部下にもヘラ描沈線を1条施す。外面の調整はタテ方向のハケを施した後、ヨコ方向のヘラミガキを行い、内面はヨコ方向のヘラミガキ調整である。2は頸部から体部にかけての破片である。外面はタテ方向のハケを施し、やや粗雑なヘラミガキ調整の後、クシ描直線文を4条以上、その下部に文様を区画するようにヘラ描沈線を1条施す。内面はナデによる調整である。3・4は大型の壺底部である。器壁は肉厚で、上げ底状につくられている。底径は3が17.4cm、4が12.6cmである。外面の調整は、タテ方向の丁寧なヘラミガキが施されるが、3には先行するタテ方向のハケメがみられる。3の内面調整は板状工具によるヨコ方向のナデであるが、4は剥離のため不明である。また、3の底部は外底面にもヘラミガキ調整が及ぶが、4はナデによる調整である。5も器壁が肉厚であり平底を呈するもので、底径は10.4cmを測る。外面はタテ方向のハケ調整、内面はナデによる調整である。6は口径14.0cmを測り、口縁部は外反ぎみに立ち上がるもので、端部を屈曲させる。外面はタテ方向のハケの後、部分的にナデ消し、頸部はクシ描直線文によって加飾される。内面はナデ調整であるが、口縁部上位には先行するヨコ方向のハケメが認められる。7は底径6.0cmを測る壺の底部で、外面はタテハケの後、丁寧なヨコ方向のヘラミガキ調整、内面は板状工具によるヨコ方向のナデ調整を行う。また、内面にはタール状の有機物が炭化したものか、黒色を呈する部分が認められる（第17図7のスクリーントーン部、図版16）。

8～13は甕である。8は口径20.8cmを測り、口縁部が「L」字状に屈曲し、口縁端部に刻み目を施した遠賀川系のものである。調整は内外面ともにナデによるもので、頸部下にはヘラ描沈線を12条施す。また、外面全面には多量の煤が付着する。9～13はいわゆる紀伊型甕の口縁部である。いずれも口縁部に比して体部の張り出しが弱い形態を呈するものであり、10・11・13のように口縁上端部に面をもつものが多い。外面はヘラケズリの後、口縁部から体部上位をヨコナデ調整するもので、ナデとケズリの境は若干の稜がつく。9は器壁がやや厚く、口径に比較して体部の張り出しがなく、古相を呈するものであり、外面には煤が付着する。10はヘラケズリを部分的にナデ消し、12はヘラケズリを板状工具によってナデ消している。9～13の口径は9が21.0cm、10が24.8cm、11が19.6cm、12が33.6cm、13が27.0cmである。

14～16は鉢である。14は口径22.6cmを測り、やや「L」字状に屈曲する口縁部を有するものである。外面はタテハケの後、体部上半から口縁部にかけてナデ調整し、頸部に2条のヘラ描沈線を施す。内面はナデ調整で、外面には部分的に煤が付着する。15は口径22.0cm、器高15.8cm、底径8.0cmを測り、椀形の体部に直口する口縁形態を呈するもので、口縁端部は外傾する面をもつ。口縁部直下にはクシ描直線文を2条施した後、その間に太いヘラ描沈線を1条施す。外面の調整は、器表面が著しく剥離しているため不明である。16は口径23.4cmを測り、短く外反する口縁部を有するもの



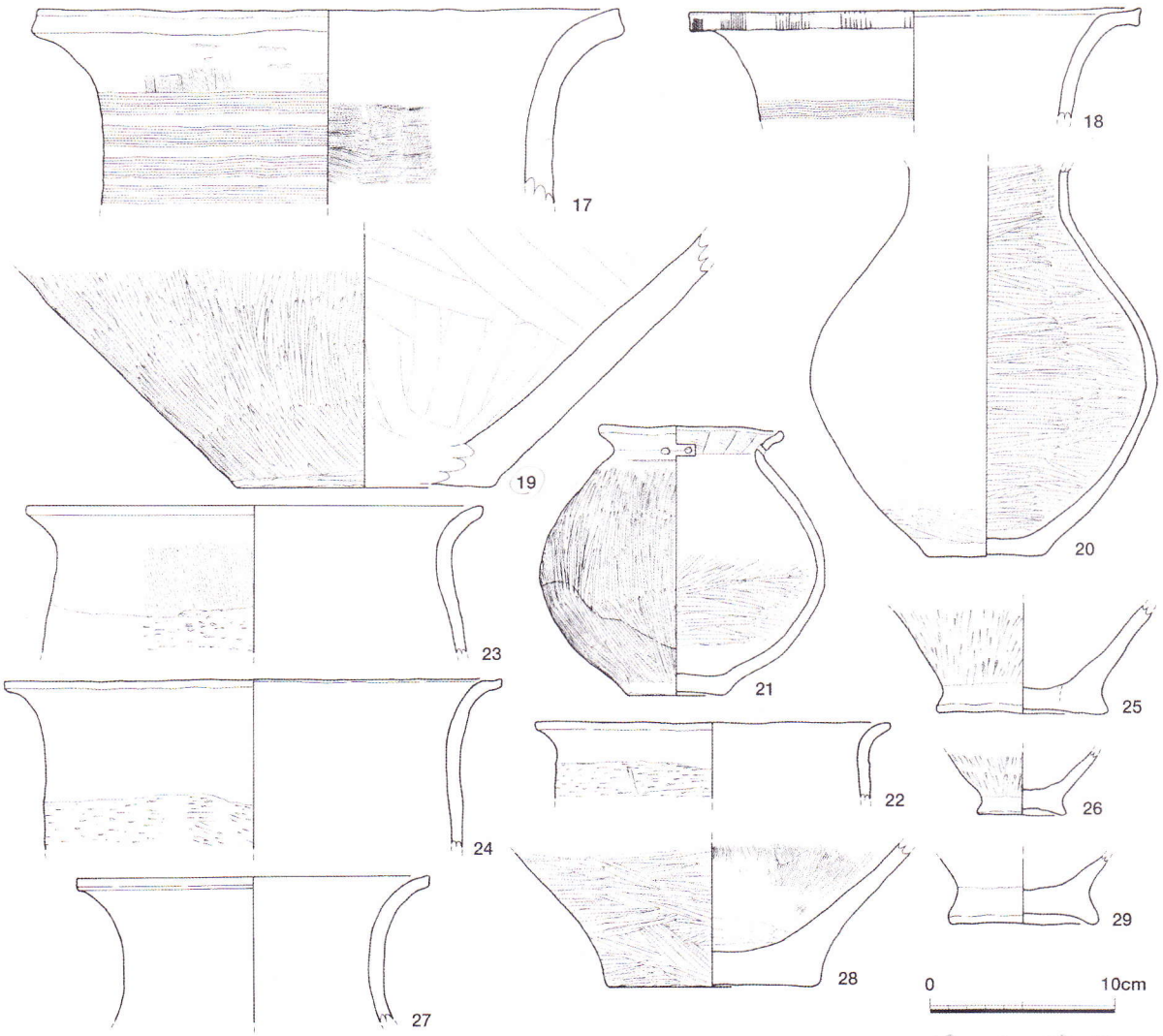
第17図　遺物実測図１

で、外面はヨコハケの後、口縁部から内面をヨコ方向のナデによって調整する。

1～16の出土層位は、1・5・8・16がSD－11最下層、3・9がSD－11下層、4・10～12がSD－11上層、2・6・7・13・14がSD－12上層、15がSD－12下層である。これらの土器は胎土が粗いものが多く、時期的には紀伊第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式古段階に併行するものと考えられる。

17～26は、SD－11・12の最上層から出土した土器である。

17～21は広口壺である。17は口径31.6cmを測るもので、器壁が肉厚で、直立する頸部に大きくひらく口縁部を有し、頸部にはクシ描直線文を4条以上施す。外面はナデによる調整であるが、先行するタテハケが僅かにみられ、頸部内面はヨコハケの後ナデ調整される。18は口径24.4cmを測り、大きく外反する口縁部を有するもので、端部はやや上下に拡張する。口縁外端面にはタテ方向の刻み目が等間隔に施され、頸部にはクシ描直線文による施文がみられる。19は底径13.8cmを測る器壁が肉厚の底部である。外面の調整はタテ方向の丁寧なヘラミガキ、内面は不定方向のナデ調整である。20は底径6.2cm、残存高21.2cmを測り、体部は卵形を呈する。内外面はヘラミガキによって調整されるが、外面は器表面の剥離が著しく不明瞭である。21は球形の体部に短く外反する口縁部を有し、頸部が不明瞭な形態のもので、口径10.0cm、器高14.6cm、底径5.0cmを測る。外面の調整はタテ



第18図　遺物実測図2

方向のヘラミガキ、口縁部はヨコナデ調整である。頸部にはヨコナデ時の痕跡と思われる細線がみられる。内面は体部中位から下半をヨコ方向のヘラミガキ、口縁部をヨコハケによって調整する他はナデ調整である。また頸部には、2孔一対の紐孔が対局に2箇所みられる。

22～26は紀伊型甕である。いずれも口縁部に比して体部の張り出しが弱い形態を呈するもので、口縁上端部は面をもたず丸くおさめるものが多い。ヨコナデとヘラケズリの境は若干の稜がつくが、22は他の個体に比べヘラケズリの範囲が上部にまで及んでおり、稜も比較的明瞭である。また23はヨコナデ調整の後、頸部にタテ方向のハケを施し、最終的に口縁部をヨコナデ調整するもので、24はヘラケズリを部分的にナデ消している。22～24の口径は22が19.2cm、23が24.8cm、24が27.0cmである。25・26は上げ底状の形態を呈する底部で、タテ方向のヘラケズリの後、底部をヨコナデ調整する。25は器壁断面の観察から、円板状の粘土板に粘土紐を巻き付け、底部をつくり、上部を輪積みするという製作技法が窺える。25・26の底径は25が9.2cm、26が4.8cmである。

17～26の出土位置は、17・23がSD－11、18～22・24～26がSD－12である。これらは時期的には紀伊第Ⅱ様式古段階に併行するものと考えられる。

27～29は、SD－13出土の土器である。27は口径19.0cmを測る広口壺で、体部の張り出しが大きい形態と考えられる。28は底径11.6cmを測り、器壁が肉厚な壺の底部である。外面はヘラミガキ調整、内面は底面をナデ、底部上位をタテハケによって調整する。29は底径8.0cmを測り、やや上げ底状につくられた紀伊型甕の底部で、残存部は全てナデ調整である。

これらSD－13出土土器は、遺物量が少なく明確な時期は明らかではないが、遺構の切り合い関係よりSD－12に先行することから、紀伊第Ⅰ様式新段階に併行するものと考えられる。

［SD－10出土土器］（第19図、図版17・18）

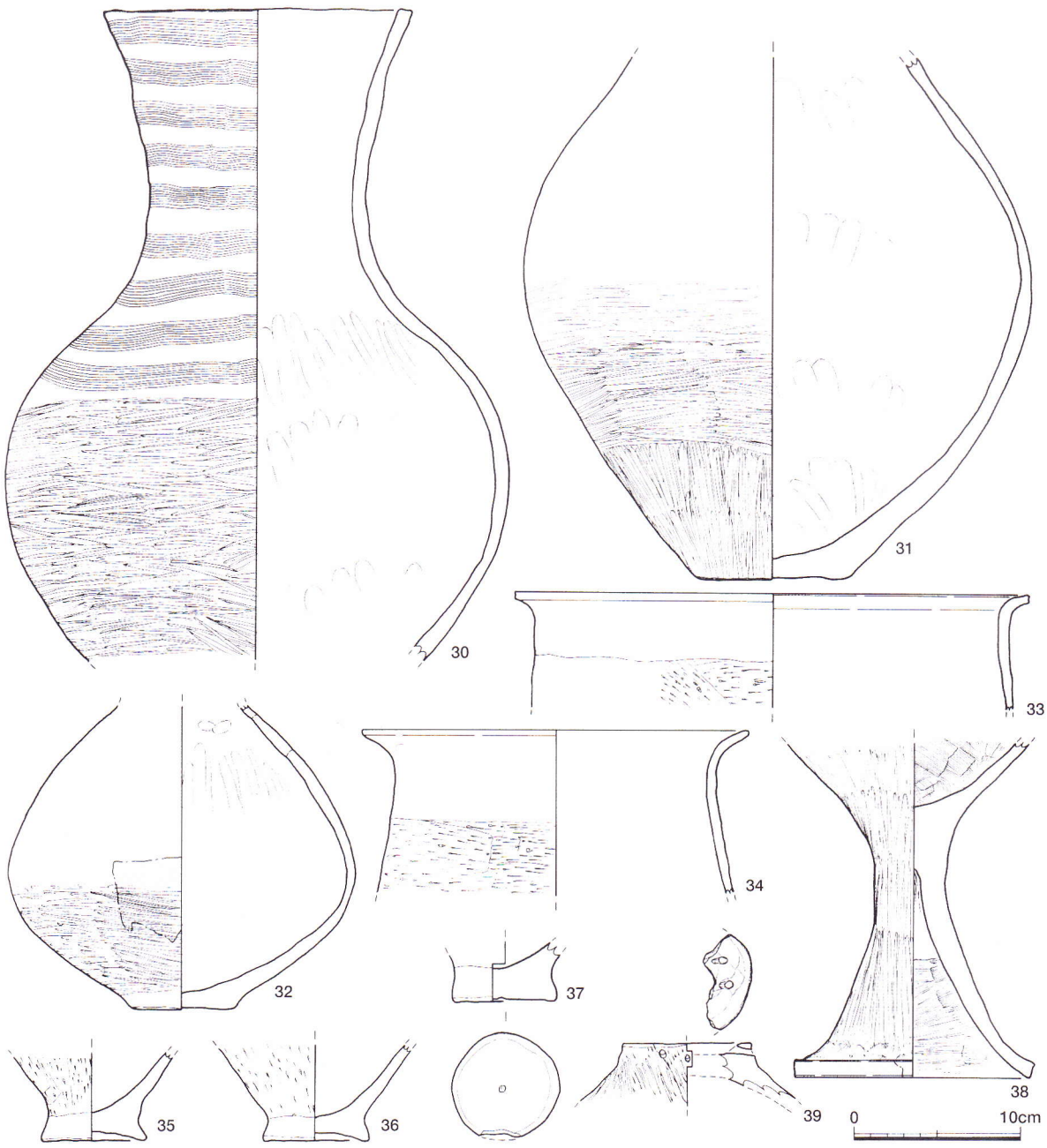
30～32は壺である。30は口径18.3cmを測る直口壺で、残存高38.6cmを測る。口縁部はやや外反ぎみにひらき、口縁部直下から体部上半にかけてクシ描直線文を9条施す。外面は体部中位以下をヨコ方向のヘラミガキ調整し、内面はタテ方向のナデによる調整を行う。31は底径9.0cm、残存高30.9cmを測り、体部の形態は卵形を呈する。底部から体部下半をタテ方向の、体部中位はヨコ方向のヘラミガキ調整をそれぞれ行う。内面は30と同様にナデによる調整であるが、外面の施文はみられない。32は底径6.4cm、残存高18.0cmを測り、体部中位以下に最大径をもつ形態を呈する。体部中位から底部にかけてヨコ方向のヘラミガキを施し、内面はナデによる調整を行う。

33～37は紀伊型甕である。33・34は口縁部と体部の張り出しがほぼ等しい形態のもので、ヨコナデとヘラケズリの境には僅かながら稜がみられるものであり、口径は33が30.6cm、34が23.0cmを測る。35～37は底部で、底径はいずれも6.2cmを測り、35・36は上げ底状を呈する。37は平底を呈し、外底面のほぼ中央に未貫通ながら穿孔の痕跡がみられるものである。

38は脚部径14.0cmを測る高杯であり、脚部は中実の形態である。外面はタテ方向のヘラミガキ調整であるが、先行するタテ方向のハケが認められ、内面は杯部・脚部ともにハケ調整である。

39は蓋で、2孔一対の紐孔が穿たれる。紀伊型甕と調整技法が類似することからその蓋と考えられるものであり、外面はタテ方向のヘラケズリの後、粗いヘラミガキが施される。

これらの土器は、壺・高杯については胎土が比較的緻密で、灰褐色の色調を帯びるものが多い。時期的には、紀伊第Ⅱ様式新段階に併行するものと考えられる。

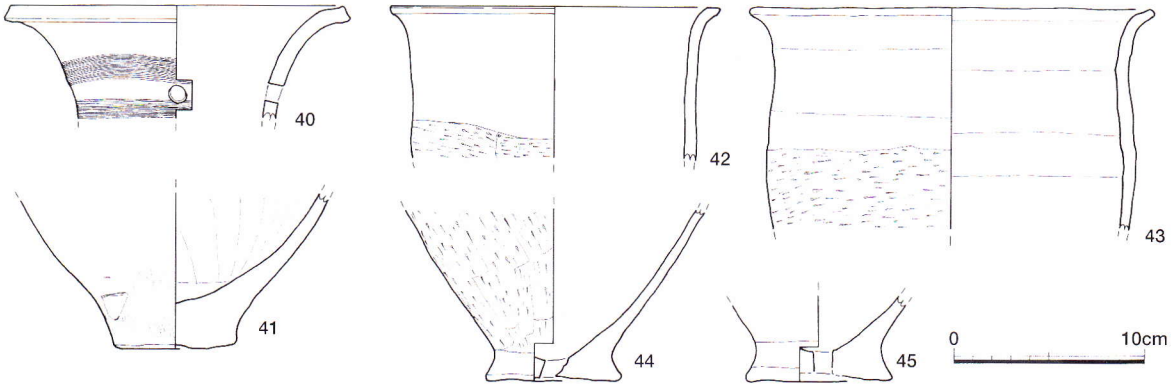


第19図　遺物実測図 3

［SD－２出土土器］（第20図、図版18）

40は口径18.2cmを測る広口壺の口縁部と考えられるが、穿孔がみられることから脚部の可能性もある。頸部には２条以上の細かなクシ描直線文を施した後、外面から穿孔が穿たれる。41は底径6.4cmを測る壺の底部で、底部の形状はやや丸みをもち、中央は上げ底状に窪む。外面はタテハケをナデ消し、内面は板状工具によるナデの痕跡が認められる。

42～45は紀伊型甕である。42・43は口縁部の屈曲がいずれも短いもので、口径は42が17.2cm、43が21.2cmである。42は口縁上端部に面をもち、43の口縁端部は丸みのある形態で、内面はヨコナデによる凹凸がやや顕著である。44・45はやや上げ底状につくられ、底部中央に穿孔のある有孔甕の底部で、底径は44が7.0cm、45が7.6cmである。44は焼成前に内面から、45は焼成後に内外面から穿孔される。



第20図　遺物実測図 4

SD－２出土の土器は、壺の胎土については緻密であり、時期的にはSD－10と同じく紀伊第Ⅱ様式新段階に併行するものと考えられる。

［SD－５出土土器］（第21～23図、図版18～21）

46～51は広口壺である。46・47は頸部をクシ描直線文によって施文するもので、口径は46が23.0cm、47が13.4cmを測り、46の口縁端部はやや尖る。48は口径15.4cmを測り、口縁部が大きく外反し、端部はやや扁平な形状を呈するものである。頸部から体部にかけては多条のクシ描直線文間に、扇形文を施す。49は口径26.6cmを測る器壁が厚手な個体であり、残存部に施文はみられない。50・51は口縁部が垂下し、外端面及び上端面に施文されるもので、口径は50が20.4cm、51が18.2cmを測る。50の外端面は斜格子文の後、円形浮文を、上端面には列点文によって加飾し、51は外端面・上端面ともに円形浮文を貼付ける。

52～54は広口細頸壺である。52は口縁端部を上下に拡張させ、外端面にタテ方向のクシ目を一定間隔で施すもので、口径は11.0cmを測る。53は口径13.8cmを測り、大きく垂下する口縁部外端面及び頸部に凹線文を施したもので、口縁部外端面には円形浮文が貼付けられた後、竹管文を施す。また上端面は列点文によって加飾された後、２孔一対の紐孔が穿たれる。54は底径5.2cm、残存高21.8cmを測り、頸部に２条の貼付突帯を有するもので、体部外面の下半はタテ方向、中位はヨコ方向のヘラミガキによって調整するものである。

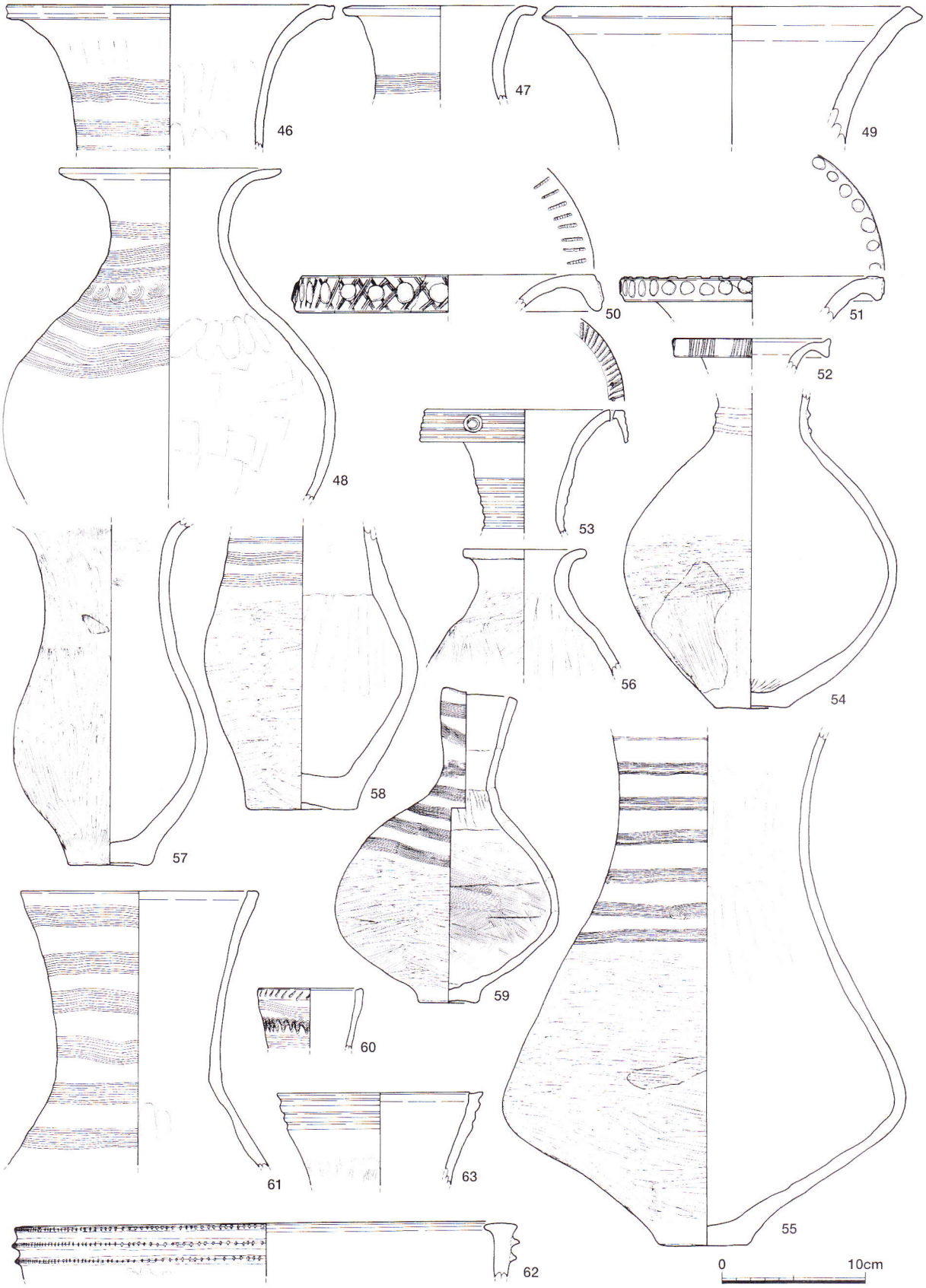
55は底径5.8cm、体部最大径28.3cmを測る広口太頸壺であり、体部から底部にかけてヘラミガキ調整を行った後、頸部から体部上位にかけてはクシ描直線文を７条以上施すが、クシ描文の終点は流水文状に施している。

56は口径8.4cmを測る広口短頸壺で、外面にはヘラミガキ、内面にはタテ方向のナデ調整を施す。

57・58は生駒西麓産の壺である。57は底径7.8cm、残存高24.1cmを測る広口壺であり、無文で外面はタテハケの後やや粗雑なタテ方向のヘラミガキ調整を行う。内面はナデによる調整であるが、先行するヨコハケが僅かに認められる。58は底径7.6cm、残存高19.9cmを測り、厚手の底部はやや上げ底状を呈するものである。頸部はやや内傾ぎみに立ち上がり、頸部外面にはクシ描直線文を施す。内面は、頸部と体部の境に明確な稜がみられる。

59・60は細頸壺である。59は口径5.2cm、器高21.8cm、底径4.4cmを測り、口縁部から体部上半にかけて多条のクシ描直線文を施したもので、体部下半は丁寧なヨコ方向のヘラミガキ調整を行う。内

面には粘土紐の接合痕が顕著にみられ、体部はヨコハケによって調整される。60は口径9.4cmを測り、クシ描直線文に加えて、列点文と波状文によって加飾されたものである。



第21図　遺物実測図 5

61～63は直口壺である。61は口径16.4cmを測り、口縁部から体部にかけて多条のクシ描直線文を施したものである。62は口径35.0cmを測る大型のもので、口縁端部は内側に肥厚し、２条の突帯を貼付ける。また口縁端部及び突帯には細かな刻み目を施し、突帯下には僅かにクシ描波状文が認められる。63は口径14.2cmを測り、口縁部に３条の凹線文を施したものである。

64は口径39.6cmを測る大型の段状口縁壺である。口縁部は大きく外反しながら立ち上がり、屈曲して直立し、端部は内外にやや肥厚する。口縁屈曲部には突帯が貼付けられ、上部には刻み目が施される。また、頸部には粘土紐を指圧によって押捺された貼付突帯がめぐる。

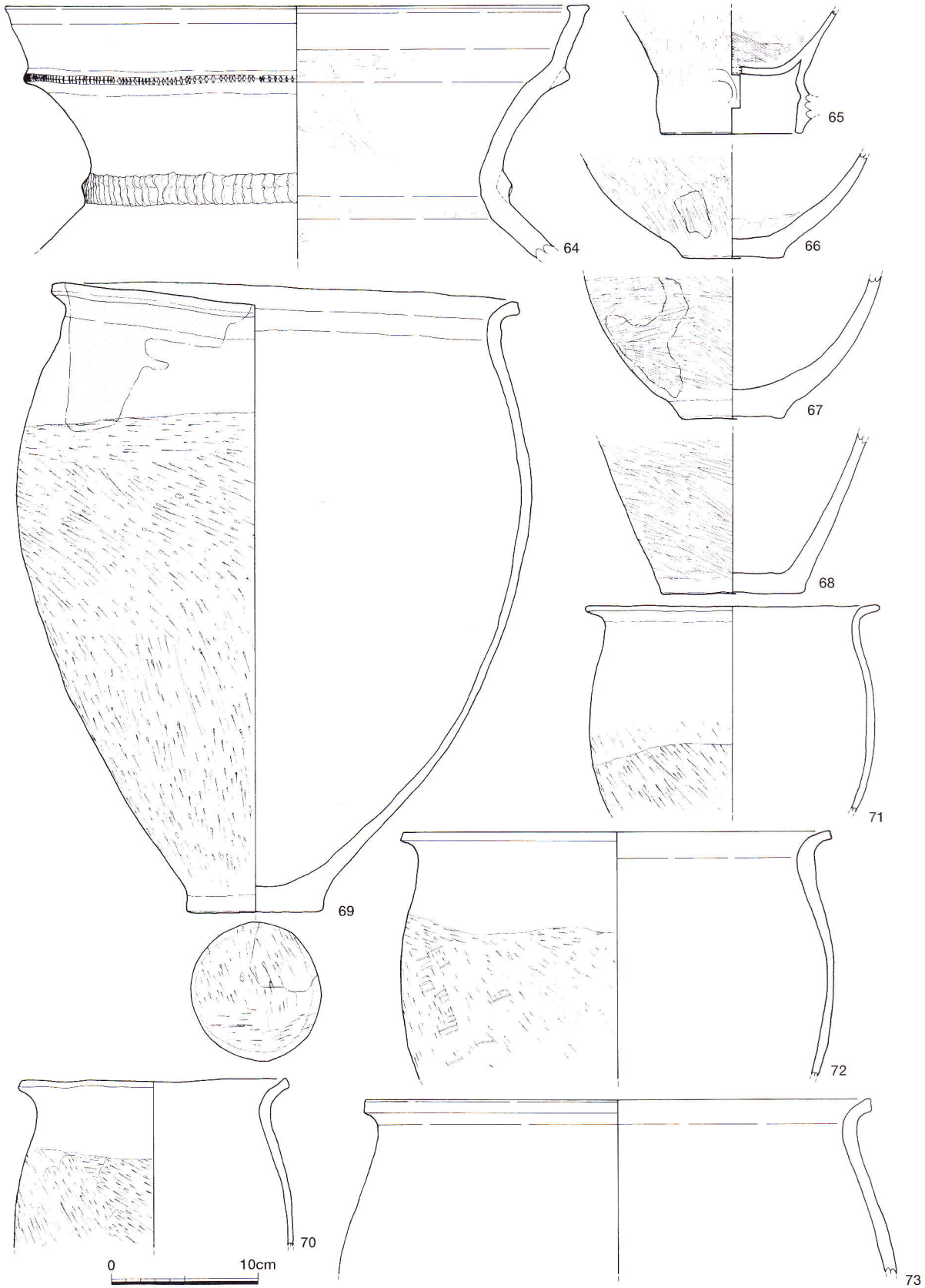
65は脚部径9.6cmを測る無頸壺で、残存部で２箇所の円孔が確認できる。脚部は把手を有するが、貼付け面で欠損している。外面の調整はタテ方向のヘラミガキ、体部内面にはヨコハケを施す。

66～68は壺の底部であり、底径はそれぞれ66が7.2cm、67が7.0cm、68が11.0cmを測る。形態的には、66・67が球形の体部を呈するのに対し、68の体部は外反ぎみに直線的に立ち上がる。いずれも外面は緻密なヘラミガキ調整を施し、内面はナデ調整によって仕上げられる。

69～85は甕である。69～73は紀伊型甕で、体部の張り出しが口縁部とほぼ等しいか、口縁部より張り出す形態のものが多く、ヨコナデとヘラケズリの境には稜はみられない。69はほぼ完形の個体であり、口径32.0cm、器高42.9cm、底径9.4cmを測る。外面のヘラケズリは下から上へ行い、体部下半は上下方向に、体部上位ではナナメからヨコ方向に施され、外底面にもヘラケズリが及ぶ。71はナデの範囲がひろく、体部中位まで及んでいる。72・73は口頸部がやや厚手のもので、72にはヘラケズリに先行するヨコ方向のタタキがみられ、73は残存部全面がナデ調整されたものである。70～73の口径は70が18.2cm、71が19.8cm、72が29.2cm、73が34.6cmである。74～78は、口縁部端部を上下に拡張させる形態のものである。74は口縁部外端面に沈線状の刻み目を、77は１条の凹線文を施し、下端部には刻み目を施す。74・75は内外面にハケ調整を施し、76は外面をタテハケ調整、内面を板状工具によってナデ調整する。78は口縁部外端面に多条の凹線文を施し、体部外面にはヨコ方向のタタキ、内面には板状工具によるナデ調整を行う。74～78の口径は74が25.0cm、75が32.2cm、76が30.6cm、77が30.8cm、78が34.0cmである。79～81は口縁端部が上方に拡張する小型の甕である。79は内外面ともにタテハケを施すが、外面はハケメをナデ消す。80・81は全面にナデ調整を行うものであるが、80の外面にはミガキ状の痕跡が数単位みられ、81の口縁端部には残存部で２ヶ所の切り込みがみられる。79～81の口径は79が18.8cm、80が16.2cm、81が15.2cmである。82～85は紀伊型甕の底部である。82は底径6.2cmを測り、上げ底状につくられた底部中央の内外面は大きく窪む。83は平底で、底部が極めて薄手のものであり、底径は5.8cmを測る。84・85は大型で、やや上げ底状を呈するが、底部は薄手である。底径は84が10.6cm、85が11.0cmである。

86～93は高杯である。86は残存高24.5cm、脚部径14.6cmを測り、脚部が中実で、脚部と杯部の境に１条の突帯を貼付けるものである。杯部は口縁部にいたって内側に突出させるもので、水平口縁を呈すると考えられる。外面はタテ方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整である。87・88は杯部である。87は杯部径28.0cmを測り、口縁端部を内外面にやや突出させるもので、内外面ともにヘラミガキにより調整する。88は杯部径26.0cmを測る垂下口縁を有し、器壁は薄手なつくりである。89～93は脚部である。89・90は中空の脚部を有し、脚端部を上方に拡張するもので、脚部径は89が16.0cm、90が10.4cmである。外面の調整はヘラミガキ、内面は89がナデ調整、90がヨコ方向のヘラ

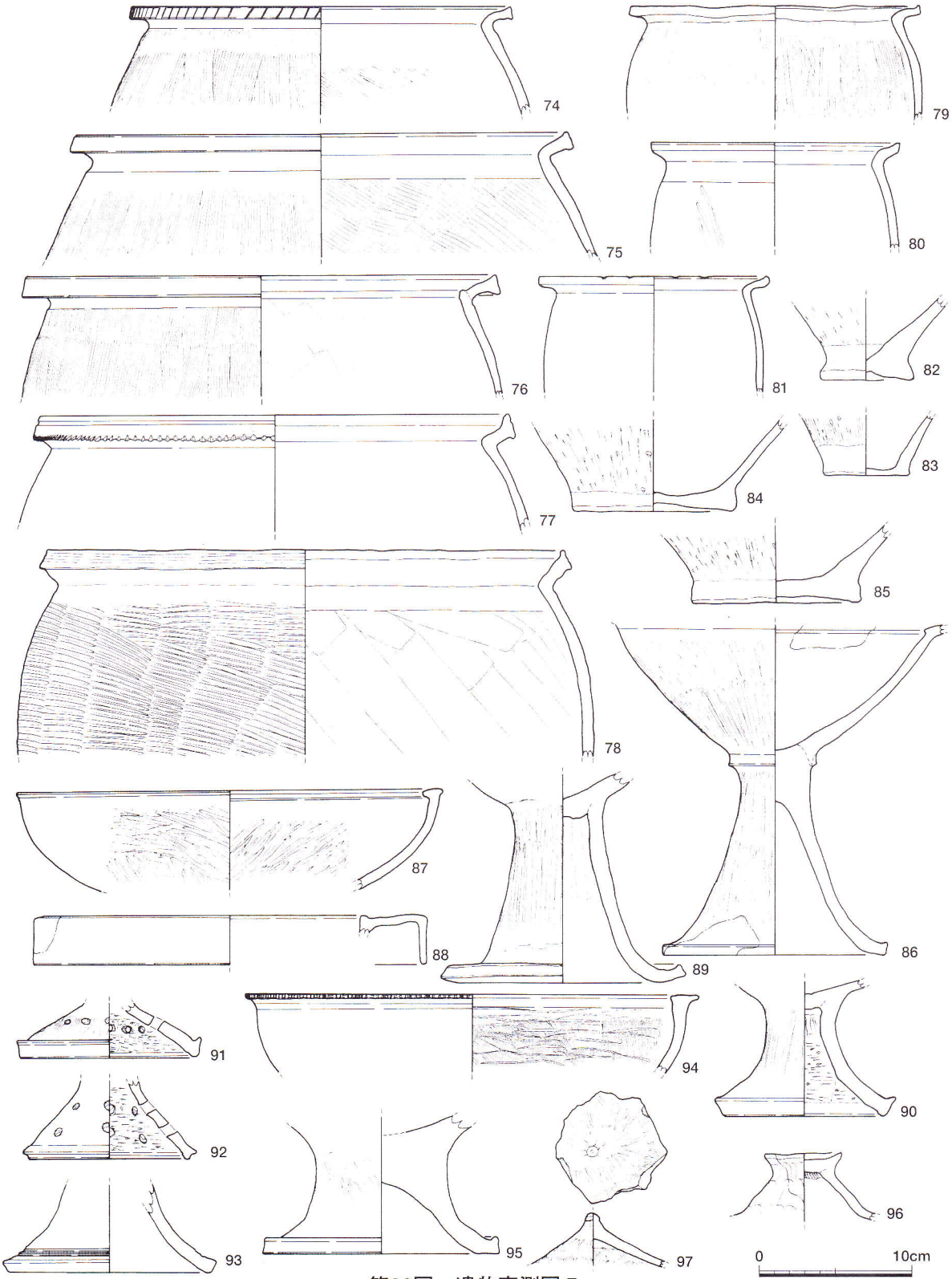
ケズリ調整である。91～93の脚部径は91が11.6cm、92が11.2cm、93が14.0cmを測る。また91・92の脚端部はやや上方に拡張するもので、91が１段、92が２段の円孔を外面から穿つ。外面の調整は91が



第22図　遺物実測図６

ヘラミガキ、92がナデ調整であり、内面はともにヨコ方向のヘラケズリである。93は残存部全面をナデ調整するもので、外面脚端部付近に凹線文を施す。

94・95は鉢である。94は口径が29.8cmを測り、水平に屈曲する口縁部は端部に刻み目を施す。外面は磨滅のため不明であるが、内面はナナメ方向のハケの後、ヨコ方向のヘラミガキを粗く施す。

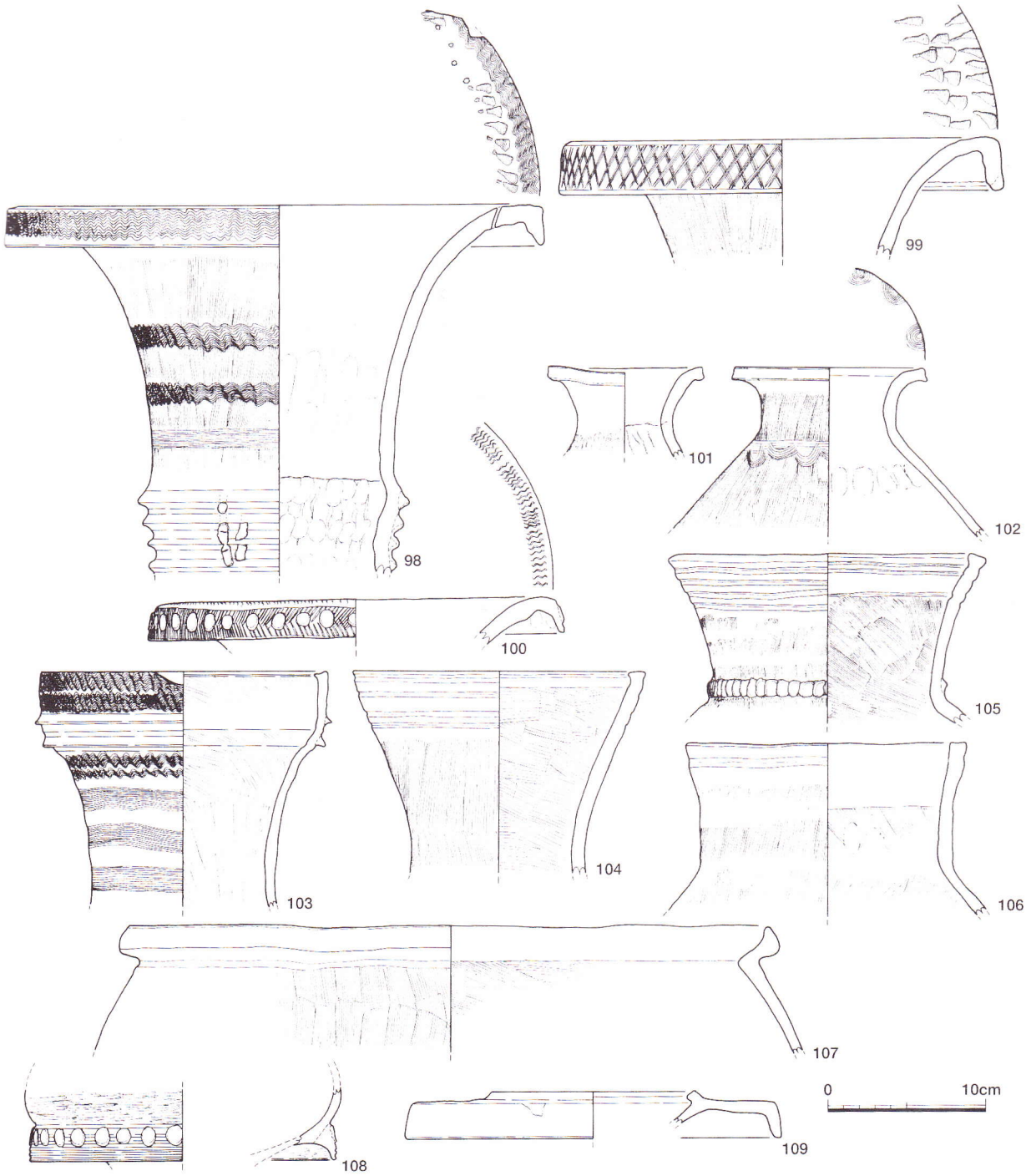


第23図　遺物実測図７

95は脚部径15.6cmを測り、厚手につくられたもので、外面には僅かにヘラミガキが確認できる。

96・97は蓋で、96はつまみ径5.0cmを測る。胎土中には雲母を少量含んでおり、搬入土器の可能性があるもので、外面には指オサエの痕跡が明瞭に残る。97は残存高3.5cmを測り、傘状の形態を呈するものであり、つまみの端部は丸く尖り、内外面ともにヘラミガキによる調整が施される。

SD－5出土の土器には57・58・96の搬入土器が含まれ、甕を除き、胎土は緻密である。時期的には紀伊第Ⅲ様式中段階から新段階に併行するものと考えられるが、50・51・53などはより新しい時期と考えられ、これらは遺構の切り合いがあるSK－42の混入遺物の可能性がある。



第24図　遺物実測図8

［SK－42出土土器］（第24図、図版21）

98～102は広口壺である。98～100は口縁端部が垂下し、外端面・上端面にクシ描文を施すものである。98は口径33.2cmを測り、外面をタテハケ調整した後、頸部にはクシ描波状文を2条、直線文を1条施し、体部との境には4条以上の貼付突帯に重ねて、一部に棒状の粘土の貼付けがみられる。口縁部外端面及び上端面は波状文によって加飾し、上端面はさらに扇形文を施す。99は口径27.6cmを測り、口縁下端部に粘土補充を行うものであり、外端面は斜格子文、上端面は3条の扇形文が施される。100は口径26.2cmを測り、外端面はクシ先によって綾杉文を施した後、円形浮文を貼付け、上端面はクシ先による列点文を施す。101・102は広口短頸壺で、102はタテハケの後、クシ描直線文・扇形文を施すもので、口径は101が9.6cm、102が12.0cmを測る。103～106は直口壺である。103は口径18.0cmを測り、片口状の注口部をもつもので、口縁部と頸部の境には2条の突帯が貼付けられる。口縁部から頸部上位にかけてはクシ描波状文、それ以下は直線文を施す。内面はハケの後、ナデ調整が行われる。104～106は口縁部を凹線文により施文し、内外面の調整としてハケを施したもので、口径は104が18.2cm、105が20.0cm、106が17.4cmである。形態的には104・105の口縁部が外反ぎみにひらくのに対して、106は直立する。また、105の頸部には指圧によって押捺された突帯が貼付けられ、104の頸部にも貼付け文様の剥落した痕跡が認められる。

107は口径40.4cmを測り、口縁端部を上方に拡張させた大型の甕であり、内外面はハケによって調整され、内面はハケメをナデ消している。

108は残存高4.5cm、垂下部径19.2cmを測る複合鉢の破片であり、垂下部は凹線文の後、円形浮文が貼付けられ、体部外面及び垂下部内面にはヨコ方向のヘラミガキ調整を行う。

109は杯部径24.0cmを測る高杯の垂下口縁部であり、調整は磨滅のため不明であるが、口縁上端部には僅かにミガキ調整がみられる。

SK－42出土の土器はいずれも胎土が緻密であり、時期的には紀伊第Ⅳ様式に併行するものと考えられる。

（2）その他の弥生土器（第25図、図版22）

110は水差形土器である。外面の装飾には上位から4条の凹線文、綾杉文風に施された3段の列点文があり、頸部にはクシ描による簾状文と直線文を配している。施文に先行する調整は、外面にヨコ方向のヘラミガキが行われている。また、内面にはナデ調整がそれぞれ観察できる。

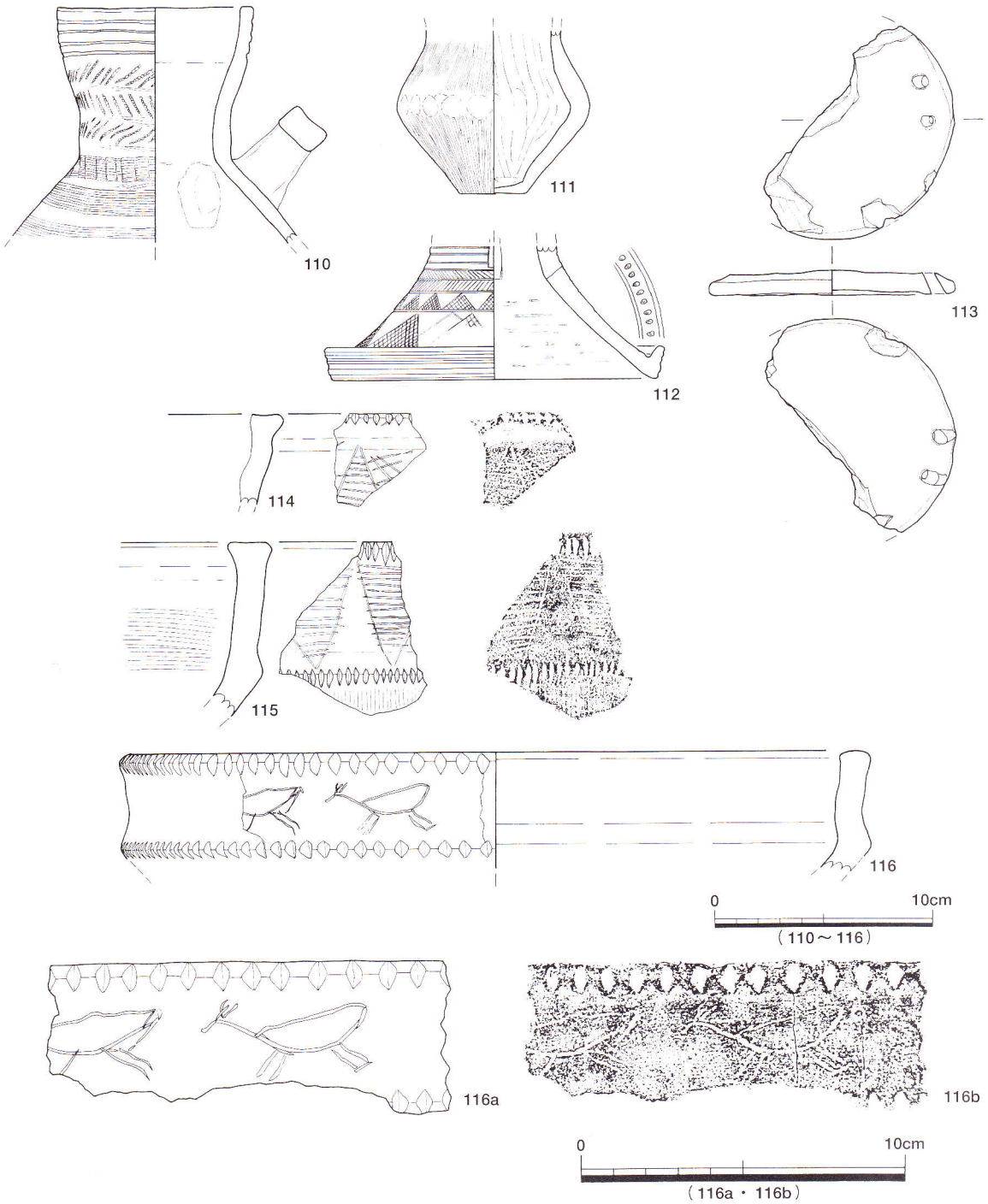
111はミニチュア土器と考えられる個体である。壺とみられるこの土器は、外面の上位をタテハケ、下半部をタテ方向のヘラミガキによって調整され、その境にあたる体部中位を指オサエによって仕上げている。また内面にはタテ方向のナデ調整の痕跡が明瞭に観察できる。

112は高杯脚部の破片である。大きくひらく脚端部は上方につまみ上げられ、外端面を形成し、この外端面には4条の凹線文が、上端面には刺突文がそれぞれ施されている。また上位には方形の透かし孔がヘラ切りによって行われている。外面の装飾は、まずヘラ描沈線によって区画線を入れた後、上位を綾杉文、下位を2段の鋸歯文によって飾られている。また最下位の鋸歯文は重複する部分が観察できることから、描き直しているものと考えられる。この土器の調整は、外面がヨコナデで、内面にはヨコ方向のヘラケズリを行った後、それをナデ消している状況がみられる。

113は扁平な形状をした壺の蓋である。周縁部にみられる双孔は下方から斜め上方に穿たれたものであり、下面には紐を固定するためのものか溝状に凹んでいる。この土器の色調は、外面にあたる上面が黒褐色に、内面にあたる底面が淡褐色に発色している。

これらの出土位置は、110がSK－35の第２層、111がSV－１の裏込め、112が第３層、113が第２層である。また、全体的に弥生時代中期を中心とした時期が考えられ、特に110・112が紀伊第Ⅳ様式に併行するものとみられる。

114～116は段状口縁壺口縁部の破片である。この３点は、すべて口縁外面の上端部や段屈曲部に



第25図　遺物実測図９

刻み目があり、また外端面には線刻による文様が施されている。114の外端面の文様は、山形状の線刻を施した後、横線を入れ、さらにその両側に斜状の線刻が観察できる。この土器は、内面が剥落しているため正確な厚みが不明である。115の文様は114の逆位の山形状の線刻を施した後、横線を入れたもので、連続する文様構成になっている。この土器には外面にタテ方向、内面にはヨコ方向のハケ調整が行われている。116は復元口径33.6cmのもので、12cm程度の破片1片だけの残存である。この土器の外端面には左向きの鹿が2頭描かれている。内外面の調整は、ともにヨコナデである。

これらの出土位置は、114が第2層、115・116がSD－7であり、114が淡褐色に、115が赤褐色に、116が褐色にそれぞれ発色している。

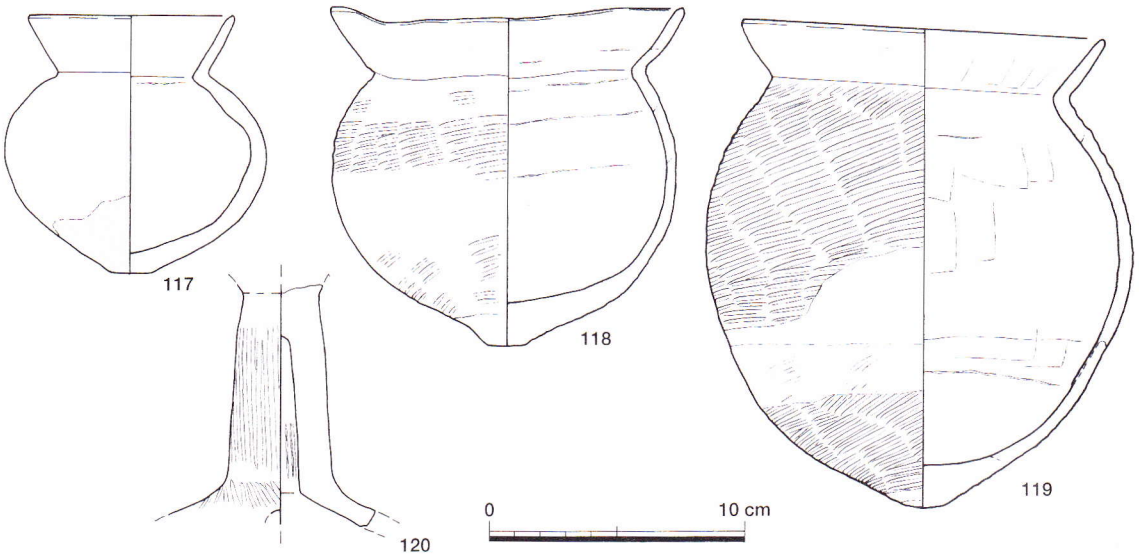
（3）古墳時代の土器

［SK－35出土土器］（第26図、図版23）

117～120は土師器である。

117は口径8.0cm、器高10.1cmの法量をもつ小型の壺である。この壺は、ほぼ球体の体部から外上方に直にのびる口縁部をもつもので、底部は底径1.6cmと小さい。外面の調整は剥離が著しく不明瞭であるが、ヘラミガキを施していた可能性がある。また外面肩部から内面にかけてはヨコナデ調整が行われ、外底面周辺に黒斑が観察できる。

118・119はともに体部下半部を中心に煤が付着した甕である。118は球体の体部からやや内彎ぎみに立ち上がる口縁部をもつもので、口縁部の歪みが著しい。また底部は底径1.6cmと小さく、使用によるためかやや丸みをもち平滑になっている。外面の調整は、タタキを施した後、これをナデ消している。また口縁部はヨコナデによって仕上げ、内面もナデ調整が観察できる。119は卵形の体部から直にのびる口縁部をもつもので、底部は前者に比べさらに丸みをもった小さいものである。成形技法として、鉢状の下半部に体部上位を接合する分割成形の状況が確認できるもので、接合時には内面に粘土を貼付けて補強し、外面のタタキを強いナデによって消している。また口縁内端面



第26図　遺物実測図10

と体部内面には板状工具によるナデが確認できる。

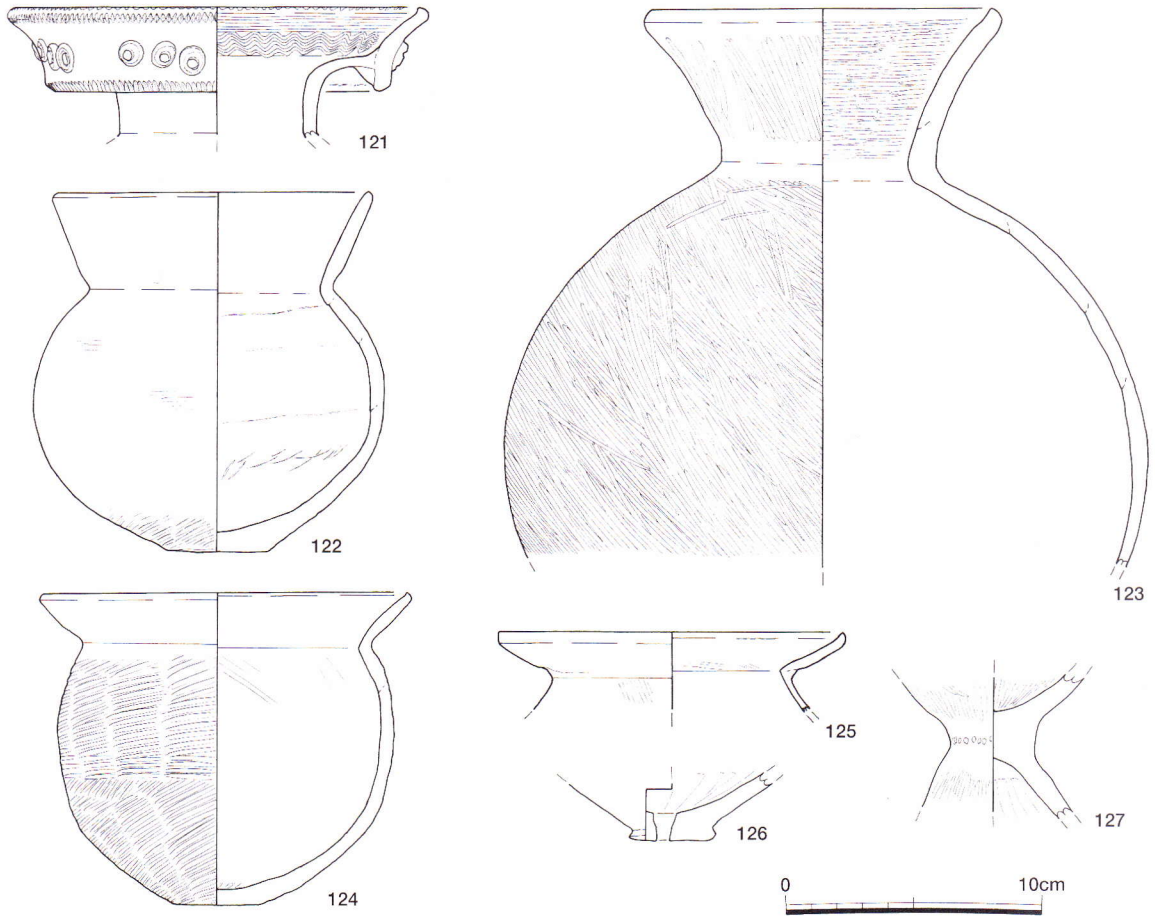
120は高杯の脚部である。この脚部はほぼ垂直に立ち上がる脚柱部から下半部が大きくひらくタイプのもので、上端部は杯部との接合面で破損している。この土器の調整は、外面に丁寧なタテ方向のヘラミガキを行い、屈曲部下の内面をナデによって仕上げている。また外面から穿たれた円孔は4箇所復元できる。

これらSK－35の出土層位は、すべて第2層であり、胎土中には結晶片岩・石英・赤色軟質粒が含まれた在地系のものである。時期的には、庄内式併行期の新段階に併行するものと考えられる。

［SK－21出土土器］（第27図、図版23）

121～127は土師器である。

121～123は壺である。121は複合口縁壺の口縁部で、外端部の上端部と外端面及び下端部に刻み目を施し、その間に3個を1単位とした円形浮文を貼付けた後、竹管文によって加飾し、また内端面にはクシ描による直線文と波状文が施文されている。外端部の成形は貼付けによる接合が用いられ、接合部の上・下部に粘土紐を充填して補強している。この土器の調整は、内外面ともヨコナデである。122・123はともに球体の体部をもつもので、123は細い頸部から外反ぎみにのびる口縁部をもつ。122の調整は、体部外面にタタキを行った後、底部周辺を除きナデ消している。この体部外面は、熱変による剥落部分があり、下半部に煤が付着している。また内面はナデ調整であるが、ヘラ先で掻き取ったキズ状の痕跡が残る。123は、口縁部をヨコナデ調整した後、外面をタテ方向



第27図　遺物実測図11

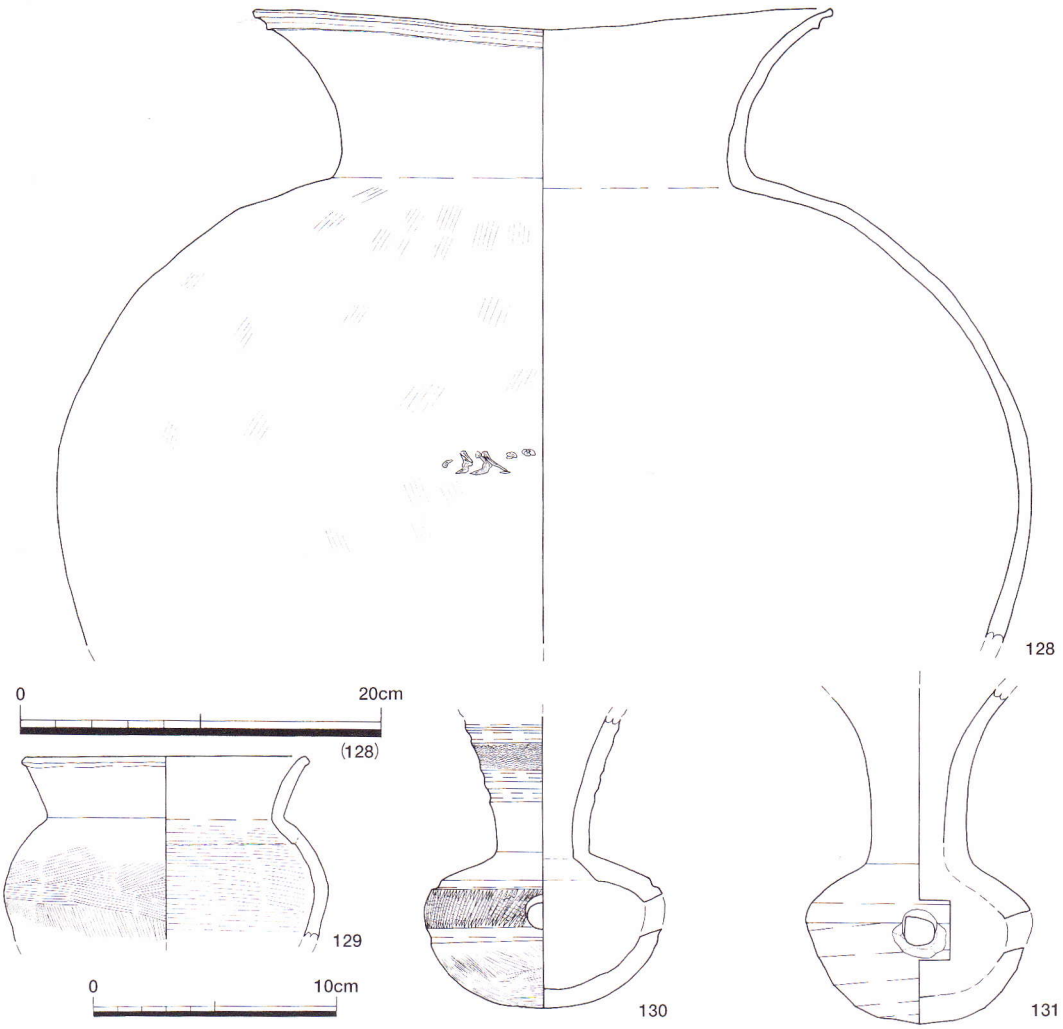
に、内面をヨコ方向にヘラミガキを行っている。体部は、外面に丁寧なヘラミガキを行い、内面にはナデ調整を施している。

124・125は甕である。124は122に類似する体部から大きくひらく口縁部を形成するものである。体部外面のタタキは明瞭に残り、底部から口縁部にかけて行われている。また内面にはナナメ方向のハケが僅かに残り、底面には蜘蛛の巣状ハケメが観察できる。125は生駒西麓産の搬入土器である。大きくひらく口縁部はやや内彎しながらのび、端部を上方に突出させている。この土器の調整は全体的に不明瞭であるが、体部外面と口縁部内面にハケ調整が確認できる。

126は、底面に径5～8㎜の円孔が1箇所穿たれた甑である。この土器は外面をナデ調整したもので、内面には板状工具の圧痕が顕著に確認できる。

127は高杯である。杯部の内外面と脚部外面にはタテ方向のヘラミガキ調整が行われ、脚部内面には板状工具によるナデが施されている。また杯部と脚部の境には、刺突文が1条巡らされている。

これらSK－21の出土層位は、125～127が第1層で、121・122・124が第2層、123が第1・2層の接合資料である。土器の胎土観察では、122～124・126に結晶片岩・石英・赤色軟質粒が含まれ、在地系のものと判断できるが、126・127には結晶片岩が含まれておらず、乳白色の色調をもつことから搬入品の可能性がある。また125には角閃石が多量に含まれている。時期的には、布留式併行



第28図　遺物実測図12

期の古段階に併行するものと考えられる。

［SK－39他出土土器］（第28図、図版24）

128は口径31.5cm、体部最大径53.6cmの須恵器大甕である。大きくひらく口縁端部はシャープにつくられ、断面形が三角形の突帯１条が巡る。体部外面の平行タタキはナデ消され、一部にその痕跡が残る程度である。内面も丁寧にナデ調整が行われ、当て具等の痕跡は確認できない。また外面上位と口縁上端部には黄白色の自然釉が付着し、外面体部中位にはヘラ記号が施されている。

129はやや外反する口縁部をもつ土師器の小型甕で、口縁端部を外側に突出させている特徴をもつ。体部内外面にはタテ及びヨコ方向のハケ調整が施され、口縁内端面にもヨコナデに先行するヨコハケが行われていたとみられる痕跡が残る。また外面の体部下半には黒褐色の煤が付着している。

この128・129はSK－39から出土したもので、古墳時代中期に比定できる。

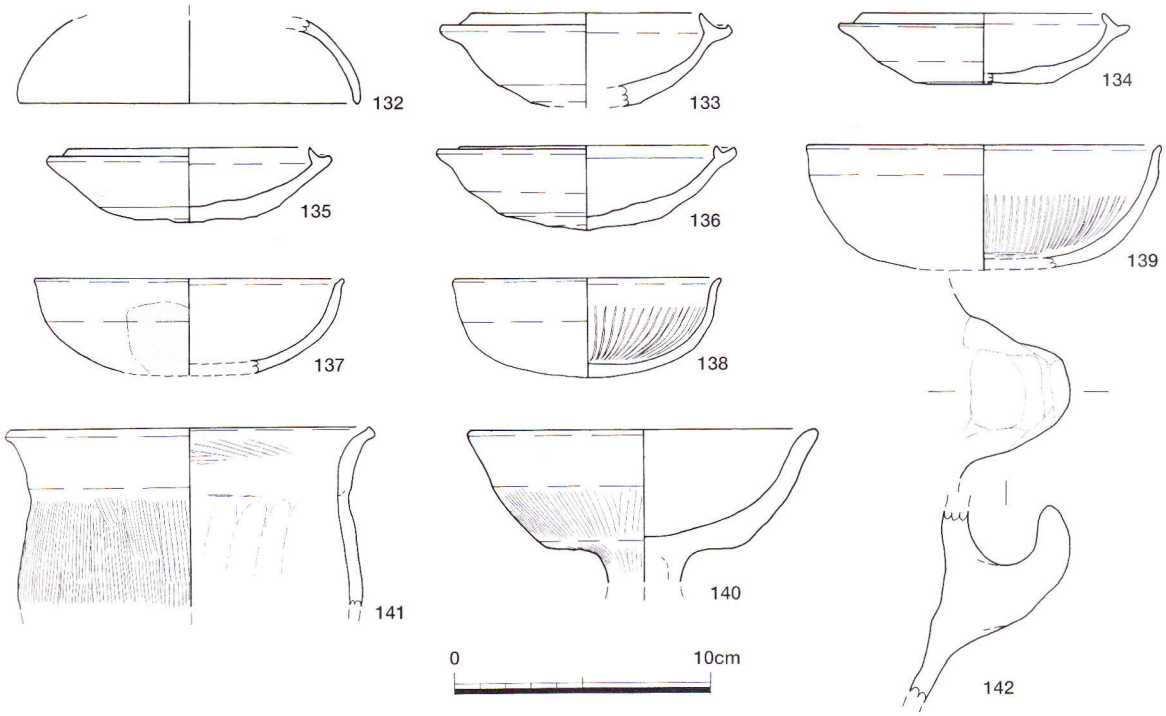
130・131はともに内斜する円孔をもつ須恵器の甑である。130は口縁部外面に幅広の沈線２条を１単位とする区画線を設け、その間にクシ描の波状文を施す装飾をもち、体部外面には幅広の沈線間にクシ先を用いた刺突文が密に施されている。底部は、ヘラケズリの後、ハケ状の工具によって平滑にしている。131は残存部では無文のもので、体部下半を回転ヘラケズリに、上半部をヨコナデによって仕上げている。体部の円孔の周囲は使用によるとみられる磨滅がみられる。これらの土器は、130が弥生時代の溝（SD－５）の混入遺物として、131がSD－17から出土し、前者が古墳時代の中期に、後者が後期にそれぞれ位置づけられるものとみられる。

［SD－６出土土器］（第29図、図版24）

132～136は須恵器である。

132は全体的に丸みを帯びた器形の杯蓋である。

133～136は口径9.0～10.0cmの杯身で、すべて口縁内端部に受け部が付くものである。口縁受け部



第29図　遺物実測図13

はすべて内傾し、136のように極めて短いものがある。外底面周辺のヘラケズリは、1/3以下であり、136はヘラケズリをナデ消している。

以上の須恵器には、黒色粒・白色粒が含まれ、136がやや軟質焼成である以外は焼成が良好である。また135の底面には自然釉が付着している。

137～142は土師器である。

137～139はすべて口縁端部が外反する杯である。137は口径12.0cmを測るもので、内外面をヨコナデ及びナデ調整によって仕上げたものである。外面の一部には黒斑がみられる。138は口径10.4cmの比較的小さな個体で、外面底部周辺の調整にはヘラケズリをナデ消した状況が確認できる。139は口径13.7cmの比較的大きなものである。また138・139の内面には放射線状の暗文が施されている。

140は全体的に肉厚の高杯杯部である。内面から口縁部にかけてはヨコナデ調整が施され、強いヨコナデによって口縁端部をやや外反させている。また杯部外面中位から下方にはタテハケ調整が行われている。

141は体部と口縁部の境が不明瞭な甕である。この土器は、体部外面と口縁内端面にハケ調整が施され、体部内面にはタテ方向の指頭圧痕が観察できる。

142は堝の把手と考えられる。この把手は、貼付技法による接合とみられ、また体部外面にはタテ方向のハケ調整が施されている。

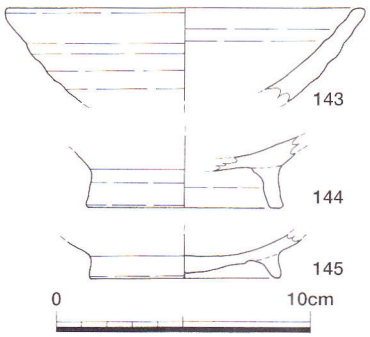
以上、SD－6の出土層位は、138が第1層で、133～135・137・139・141・142が第2層、132・136・140が第3層である。これらの土器には、結晶片岩・赤色軟質粒が含まれ、在地系のものとみられるが、138には結晶片岩が含まれず、雲母が含まれている点で注目できる。また時期的には、6世紀末から7世紀初頭頃のものと考えられる。

（4）平安時代の土器（第30図）

143・144は土師器である。143は口径14.2cmを測る椀で、外面には回転台成形による凹凸が著しい。144は底径7.8cmを測る台付皿であり、足高の脚部を有する。

145は底径7.4cmを測る黒色土器の椀で、やや外側にふんばる断面形が逆三角形の高台を有する。内面のミガキは、磨滅のため不明瞭である。

これらの出土位置は、143がSV－1の裏込め、144がP－49、145がSK－5である

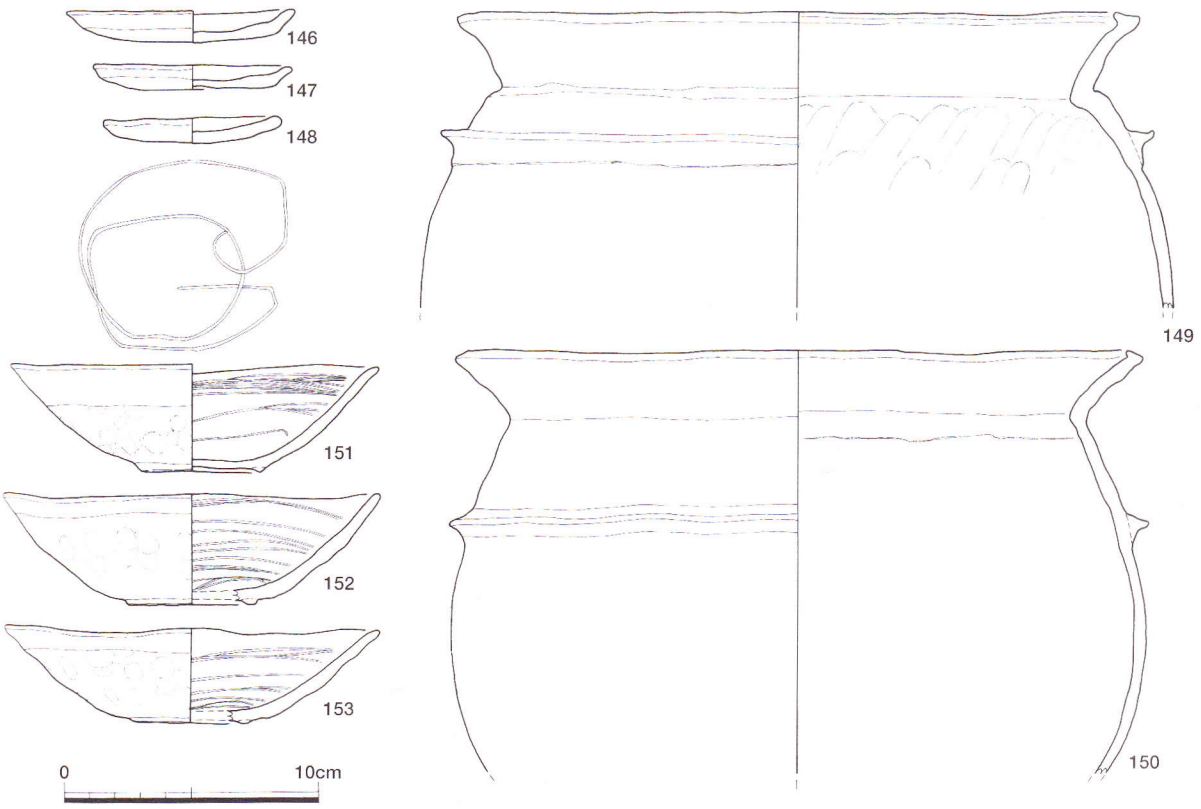


第30図　遺物実測図14

（5）鎌倉時代の土器

［SK－32出土土器］（第31図、図版25）

146～150は土師器である。146～148は器高が低く、扁平な形態を呈する皿で、全て完形である。146・147は口縁部を強いヨコナデによって外反させるもので、148は粘土板を皿状に彎曲させた極めて簡易なつくりのものである。これらの法量は、146が口径8.0cm、器高1.3cm、147が口径7.8cm、器高1.1cm、148が口径7.0cm、器高1.0cmである。149・150は釜である。ともに体部上位には断面形が三角形を呈する一条の鍔が貼付けられ、口縁部は大きく外反し、端部を内側につまみ上げるもので



第31図　遺物実測図15

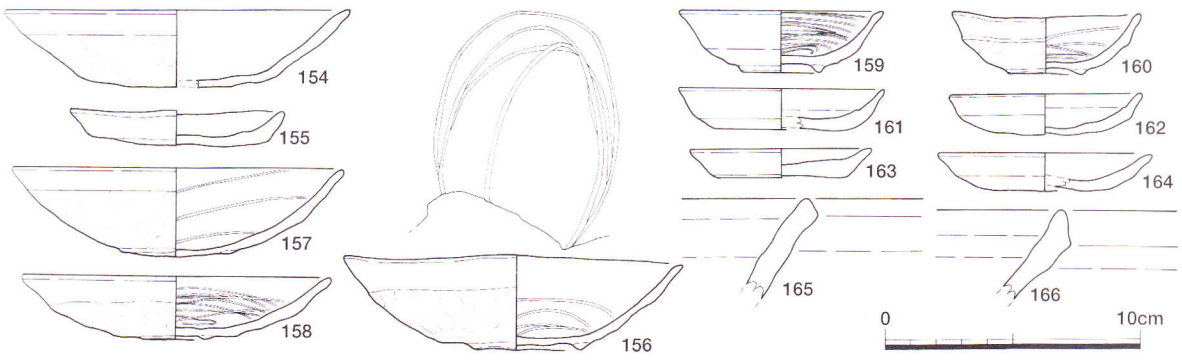
ある。内外面の調整はナデであり、鍔以下を中心に煤が付着する。149・150の口径は149が26.8cm、150が27.0cmを測る。

151～153は瓦器椀であり、そのうち151は完形である。いずれもナデと指オサエによって成形され、口縁部を強いヨコナデによって外反させる。底部には小さな高台が貼付けられるが、152の高台底面には繊維質の圧痕が認められる。内面には、9～12回転の渦巻き状暗文がみられる。151～153の法量は151が口径14.4cm、器高4.2cm、底径5.2cm、152が口径14.8cm、器高4.4cm、底径5.0cm、153が口径14.8cm、器高3.7cm、底径4.4cmを測る。

これらの出土層位は146・150～152が第1層、153が第2層、147～149が第4層である。

[SK－41出土土器]（第32図、図版25）

154・155は土師器の皿である。154は口径13.6cm、器高3.1cmを測り器高が深いものである。155は完形で、口径8.4cm、器高1.4cmを測り、扁平な形態を呈するものである。



第32図　遺物実測図16

156～164は瓦器で、156・159・164は全体に銀化し光沢をもつ。156～158は椀であり、いずれもナデと指オサエによる成形後、口縁部を強いヨコナデによって外反させるもので、底部には小さな高台が貼付けられる。内面には、158が9回転の渦巻き状暗文を施すが、156・157の暗文は4・5回転と退化したものである。156～158の法量は156が口径13.2cm、器高3.5cm、底径4.0cm、157が口径13.0cm、器高3.5cm、底径4.4cm、158が口径12.2cm、器高2.5cm、底径3.0cmを測り、SK－32出土のものに比べ、より扁平な形態を呈するものが多い。159・160は小椀であり、つくりは椀と同様であるが、159の内面には13回転の細かな渦巻き状暗文が施される。159・160の法量は159が口径8.0cm、器高2.4cm、底径2.8cm、160が口径7.4cm、器高2.4cm、底径2.6cmである。161～164は皿であり、口縁部をヨコナデ調整によって短く外反させる。内面はヨコナデ調整のみであり、暗文はみられない。これらの法量は161が口径8.0cm、器高1.6cm、162が口径7.6cm、器高1.6cm、163が口径7.0cm、器高1.2cm、164口径8.2cm、器高1.5cmを測る。

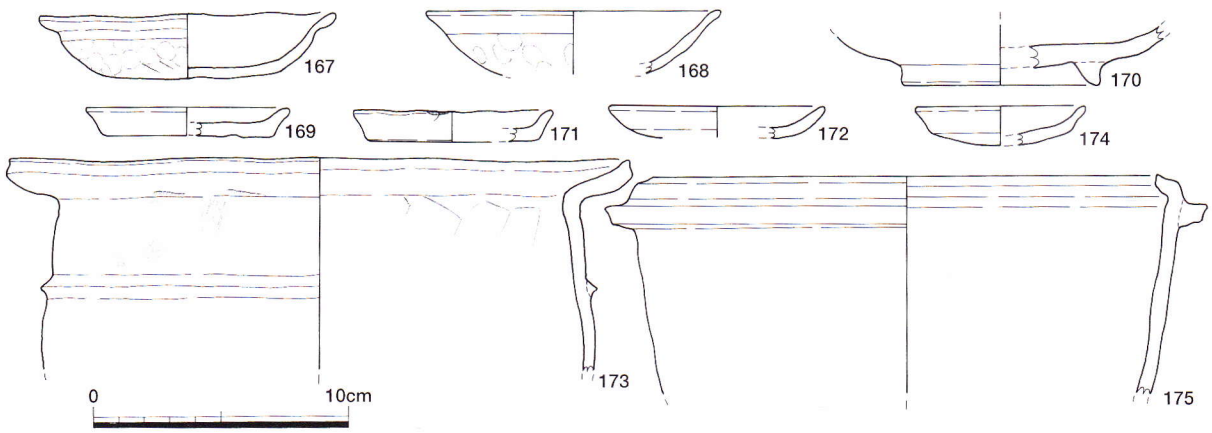
165・166は東播系須恵器のこね鉢である。165は口縁部の拡張が顕著ではないが、166はやや肥厚し上方に拡張するものである。

これらの出土層位は154～156・160・164が下層、157～159・161～163・165・166が上層である。

［SK－31他出土土器］（第33図、図版25）

167～169はSK－31から出土した土師器の皿である。167・168は器高が深い皿であり、167はやや「て」の字状に口縁部が外反する。169は平底の底部に、短く外反する口縁部を有する。167～169の法量は167が口径11.6cm、器高2.6cm、168が口径11.6cm、169が口径8.0cm、器高1.1cmを測る。

170～174はSK－28出土の土器で、170～172は土師器の皿である。170は底径7.6cmを測る台付き皿であり、断面形が逆三角形の高台を有する。171は169と同形態のもので、法量もほぼ同一であり口径7.8cm、器高1.2cmを測る。口縁部の一部が掻き取られており、灯明皿の火口受けとも考えられる。172は口径8.5cmを測り、やや丸みのある形態を呈する。173は土師器の釜であり、体部上位には、断面形が三角形を呈する一条の鍔が貼付けられるが、SK－32出土のものに比べ小さなものである。口縁部は屈曲し、端部を上方につまみ上げるもので、内外面ともにナデによる調整であるが、外面には先行するタテハケが認められる。174は瓦器の皿である。口径6.6cmを測り、器高が1.5cmとやや深い形態を呈し、内面の暗文はみられない。



第33図　遺物実測図17

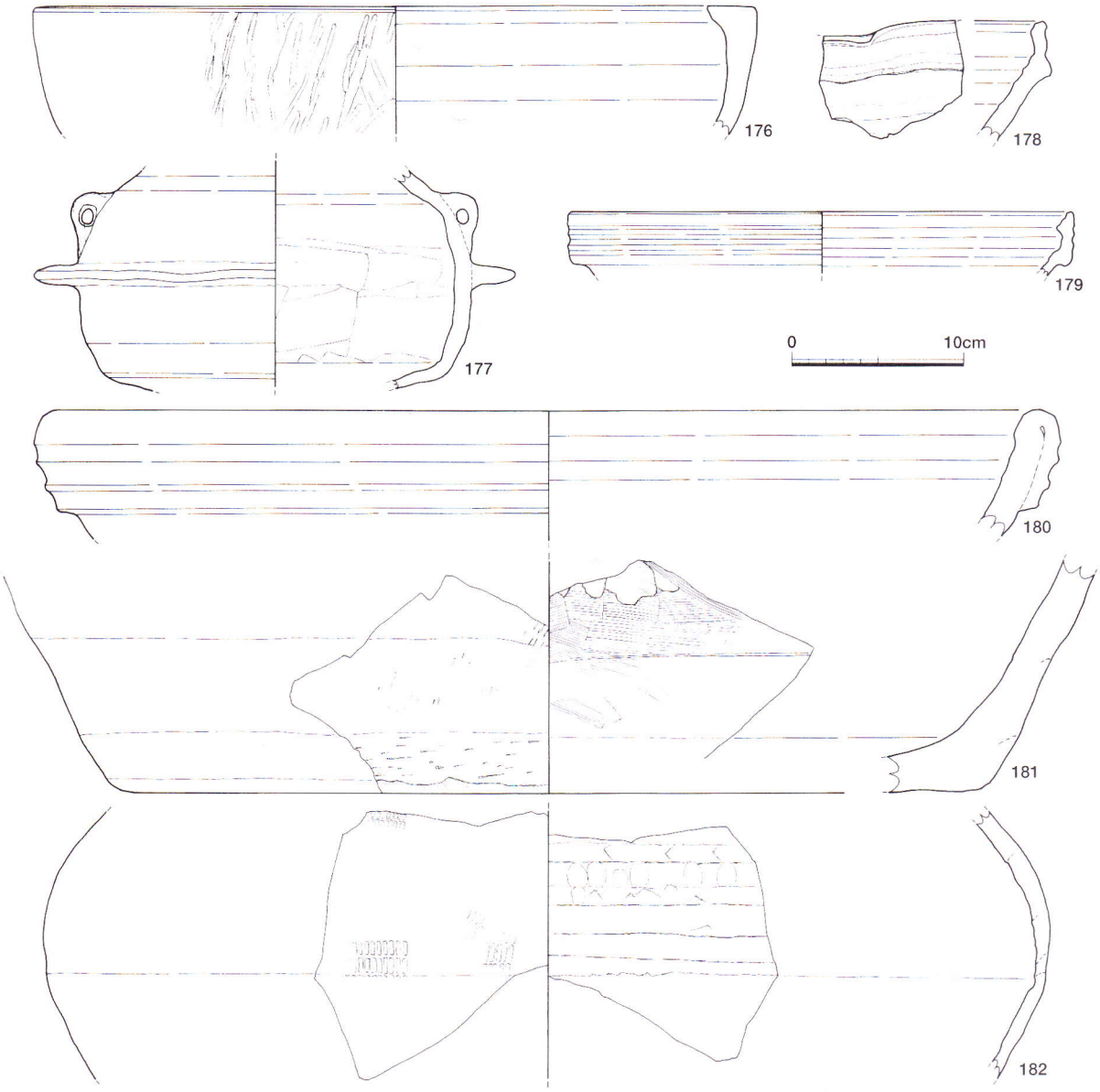
175はSK－3から出土した土師器の釜である。形態的には長胴を呈するものと考えられ、口縁部は内側に屈曲する。口縁部直下には方形の鍔が貼付けられ、体部下半には煤の付着が認められる。

（6）**室町時代の土器**（第34図、図版26）

176は口径42.0cmを測る土師質土器の火鉢である。口縁部は上端部が水平で、内側に突出する形態を呈する。外面は丁寧なナデ調整の後、タテ方向のヘラミガキを粗雑に施す。

177は残存高12.7cm、体部径22.8cmを測る瓦質土器の釜である。口縁部及び底部を欠くが、平底で、直立する口縁部を有すると考えられる。肩部には貼付けの耳部があり、体部中位には接合部分にカキメを施した後、鍔が貼付けられ、鍔以下には多量の煤が付着している。外面体部下半はヘラケズリの後ナデを施し、内面は下半部を板状工具によってケズリ状にナデ調整を行う。

178～181は備前焼である。178・179は口縁部が上方に拡張する擂鉢で、178は口縁部の片口部分である。179は口径29.8cmを測り、口縁部上端は内傾ぎみに切られ、外面には2条の凹線が巡る。



第34図　遺物実測図18

180・181は甕である。180は口径59.4cmを測る大甕の口縁部であり、口縁部外面は3条の太い凹線を巡らす。181は底径51.6cmを測る大甕の底部である。外面はケズリ状に器表面を掻き取った後、ナデ調整を行い、内面はヨコハケの後、部分的にハケメをナデ消す。

182は体部最大径58.6cmを測る常滑焼の甕であり、体部外面はタタキメをナデ消し、肩部には自然釉がかかる。内面は指オサエと粘土紐の接合痕が顕著で、部分的に当て具の痕跡が観察できる。

これらの出土位置は、176～178がSE－1、179がSK－2、180・181がSK－36、182が整地土3層である。

（7）輸入陶磁器（第35図、図版26）

183・184は白磁の碗である。183は口径16.2cmを測るもので、口縁端部を外反させる。184は体部下半以下をヘラケズリ調整し、釉は内外面ともに体部下半まで施釉される。

185は底径5.4cmを測る龍泉窯系の青磁碗である。高台は削り出しであり、外底面は露胎である。内外面には粗い貫入が認められ、内底面には形骸化した花文がスタンプされる。

186は底径4.4cmを測る白磁の菊皿であり、外面にはノミによる菊花が彫られる。釉はやや青味のあるもので、外底面を除いて施され、粗い貫入が認められる。

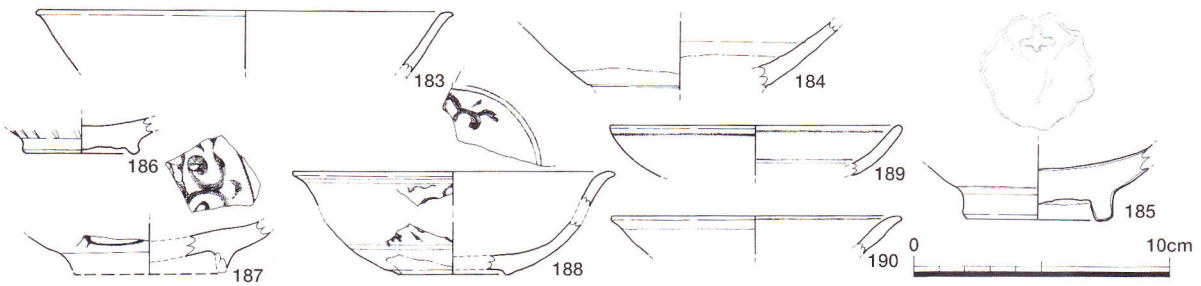
187～190は中国製の染付である。187は残存高1.9cmを測る碗であり、全面に施釉がみられるが、高台端部の釉は掻き取られる。188・189は皿である。188は口径12.6cm、器高4.0cm、底径4.2cmに復元できるもので、口縁端部が外反し、高台は削り出され碁笥底を呈する。外面は二重の圏線と草花文、内底面は二重の圏線内に花文が描かれ、内外面に粗い貫入が認められる。189は口径11.2cmを測り、口縁部が内彎する形態のもので、内外面には圏線文が描かれる。190は口径11.4cmを測る皿ないしは小碗と考えられるもので、口縁部は外反し、189と同様に内外面には圏線文が描かれる。

これらの出土位置は、183・184がSK－31、185・189が第2層、186が整地土1層、187がSD－5、188がSD－6、190が第3層であり、187・188については遺構の時期と異なることから、混入遺物と考えられる。

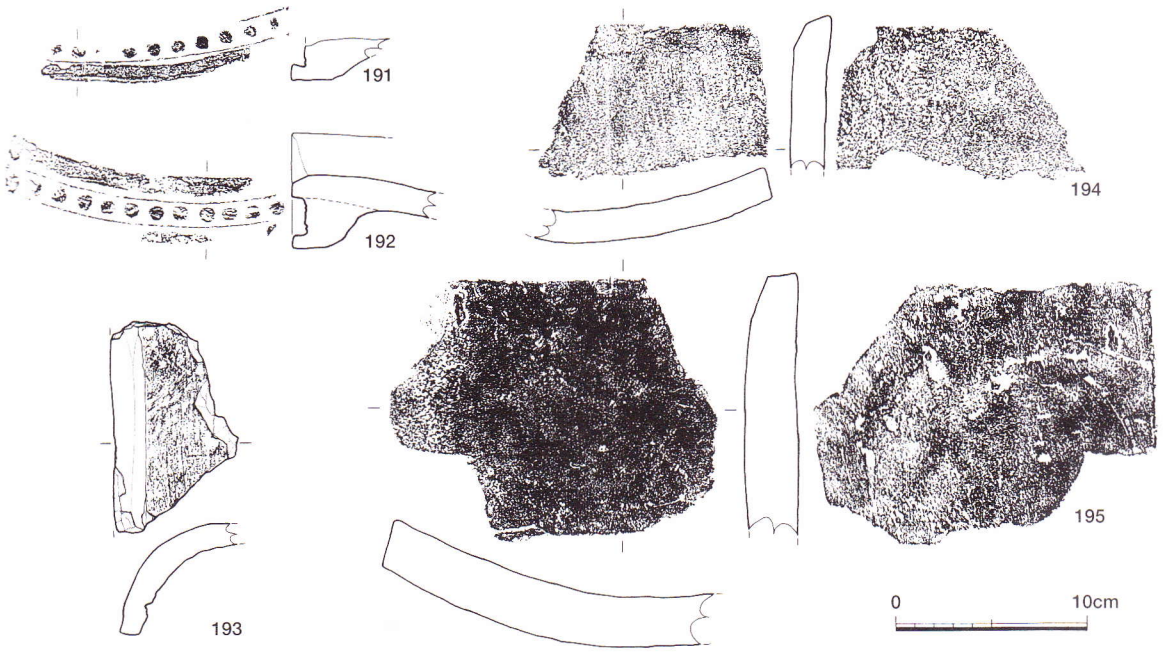
（8）瓦（第36図、図版27）

瓦は大半が中・近世に属する丸・平瓦であり、少量の古代末期に遡る丸瓦などが出土している。

191・192は連珠文軒平瓦であり、ともに文様帯の周囲を圏線で囲むものである。瓦当部の接合方法としては、平瓦部を瓦当上部に接合するものであり、191はその接合面で剥離している。また顎部瓦当裏面の調整は、ともにタテ方向のケズリによって調整するものである。



第35図　遺物実測図19



第36図　遺物実測図20

193は丸瓦で、やや薄手につくられたものである。凸面は強いナデによって縄叩き痕を消しており、ナデによって側縁端部はやや窪む。凹面には、細かな布目痕と吊り紐痕がみられる。

194・195は平瓦で、ともに凹凸両面をナデ調整するものである。194は凹凸両面に離れ砂の付着が認められ、全面に燻しがかかる。195は厚さ2.8cmを測る厚手なもので、凹凸両面のナデは板状工具によるものであり、凸面側は強いナデ調整により砂粒・礫の移動がみられる。

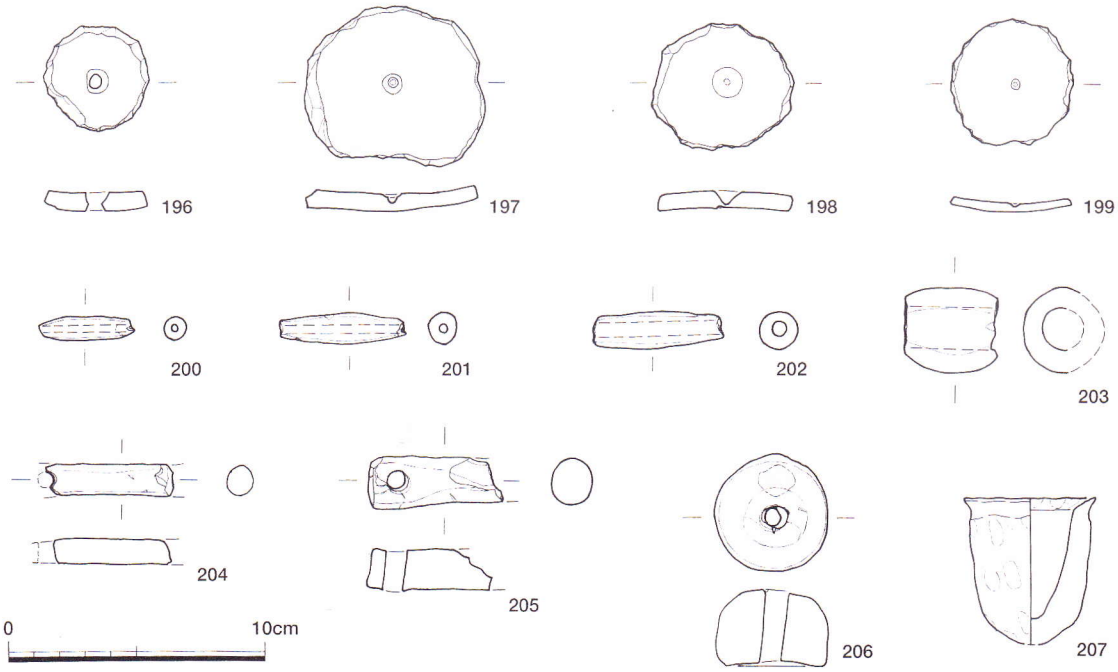
これらの出土位置は、191・193・194がSK－41、192がSK－31、195がSK－36である。

（9）**土製品**（第37図、図版27）

196～199は弥生土器の破片の周囲を円形に打ちかいた円板状転用品であり、紡錘車と考えられるものである。すべて中央部に穿孔を行ったもので、貫通しているものは196だけであり、196を除く3点は未製品と考えられる。196は甕体部の破片を利用した直径4.2cmのもので、内外面の両方向から穿孔を行っている。穿孔の内径は5㎜である。197は壺体部の破片を利用した最大径7.2cmと比較的大きなもので、内面から穿った孔は器壁の1/2程度までである。穿孔の外径は7㎜である。198も壺体部の破片を利用した直径5.5cmのもので、内外面の両方向から穿孔を行っている。それぞれ穿孔の外径は、外面からのものが1.1cm、内面からのものが2㎜である。199は紀伊型甕体部の破片を利用した直径4.8cmのもので、内面から穿った孔は器壁の1/3程度までである。穿孔の外径は3㎜である。これらの重量は196が13.8g、197が40.7g、198が27.0g、199が11.8gである。また出土位置は、196が第3層、197が第2層、198がSK－36、199がSD－7である。

200～205は土錘である。

200～203は管状土錘である。200は長さ3.8cm、最大径9.5㎜、孔径3㎜のもので、今回の調査で出土したものの中では最も小さい。201は長さ4.9cm、最大径1.2cm、孔径3㎜のもので、棗形を呈する。202は長さ5.1cm、最大径1.5cm、孔径6㎜のもので、一方の先端が使用のためか平滑になっている。また203は長さ3.7cm、最大径3.3cm、孔径1.7cmのもので、全体的に肉厚である。これらの重量は200



第37図　遺物実測図21

が2.8g、201が6.6g、202が9.7g、203が16.8gである。また出土位置は、200がSD－6の第2層、201・203が第2層、202がSK－41である。

204・205は棒状土錘である。204は両端部を欠失した残存長5.0cm、最大径1.25cmのもので、端部に穿たれた復元孔径は6㎜である。205は全体の1/2程度を欠失した残存長5.3cm、最大径2.0cmのもので、端部に黒斑が観察できる。これらの重量は204が8.5g、205が20.6gであり、また出土位置は、204・205とも第2層である。

206はSK－41から出土した土製紡錘車である。底面をやや上げ底状に作り、全体にナデ調整が行われている。底面から穿たれた孔は、やや中軸から外れており、その孔径は9㎜を測る。また重量は73.6gであり、上端面には黒斑が観察できる。

207は長胴の甕を模倣した口径5.2cm、器高5.8cmの手づくね土器である。全体的に肉厚で、口縁部は外上方につまみ上げている。内外面とも指オサエとナデが行われている。この土器はSD－5の第1層から出土したもので、混入遺物と考えられる。

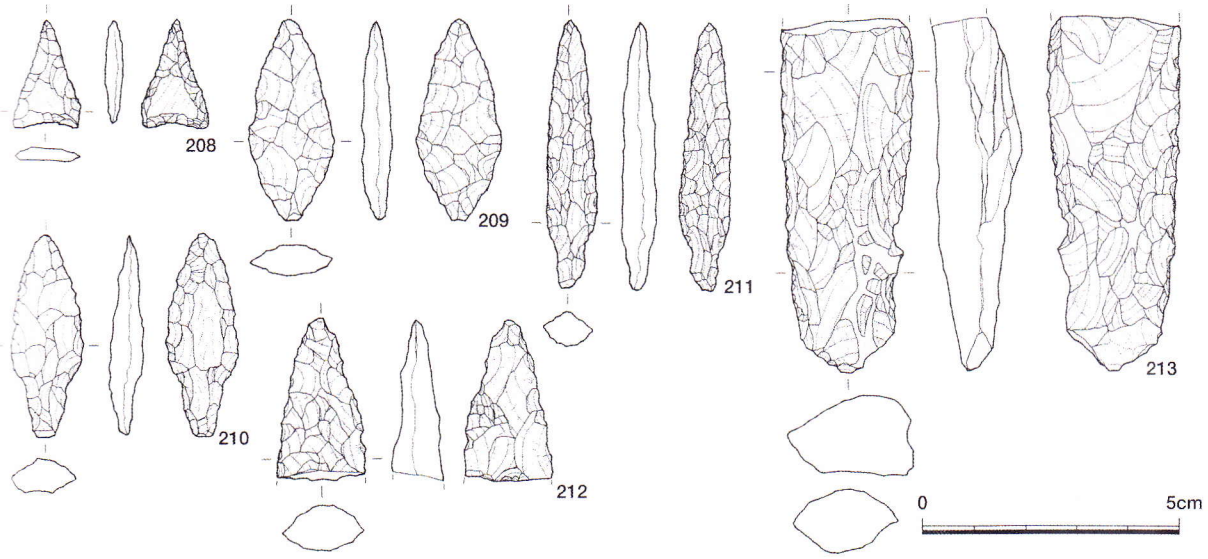
(10) 石器（第38・39図、図版28）

208～213はサヌカイト製の打製石器であり、図示した以外のものとして石鏃未製品や石核、剥片などが出土している。

208は平基式石鏃で長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ3㎜を測り、重量は0.45gである。板状の素材剥片の周縁を、左右両面とも基部から先端に向かって調整する。

209は凸基式石鏃で長さ4.0cm、幅1.7cm、厚さ6㎜を測り、重量は2.9gである。左右両面とも先端から基部に向かってやや大きな調整を施す。

210・211は有茎式石鏃である。210は長さ4.0cm、幅1.4cm、厚さ7㎜を測り、重量は3.25gである。



第38図　遺物実測図22

右面は大剥離面を残す剥片の周縁を細部調整しており、左右両面とも先端から基部に向かって調整される。211は長さ5.3cmを測る大型品で、幅1.0cm、厚さ7㎜を測り、重量は2.85gである。調整は丁寧に施され、左右両面ともに先端から基部に向かって行われる。

212・213は石槍状石器である。212は先頭部であり、残存長3.2cm、最大幅1.7cm、厚さ1.0cmを測り、重量は4.2gである。左右両面とも先端から基部に向かって調整されるが、右面の調整はやや粗雑に施される。213は基部で、基部に向かって幅がやや狭まるものである。残存長は7.0cm、最大幅2.7cm、厚さ1.7cmを測り、重量は39.4gである。左右両面とも先端から基部に向かって調整され、側縁部は細部調整により刃潰しが行われる。また左右両面ともに、部分的に磨耗した部分が認められる（第38図スクリーントーン部）。

これらの出土位置は、208～210が第2層、211がSD－8、212がSE－1、213が第3層である。

214～223は磨製石器であり、図示したものの他に、石庖丁未製品などが出土している。

214～219は結晶片岩製の石庖丁である。いずれも直線刃で半月形を呈するものと考えられるが、破損後216～219のように刃部及び背部を叩石として使用し、原形を保っていないものが多い。紐孔は内径4～5㎜、外径6～9㎜を測る。214・215の刃部は両面から研磨が施され、左面には明確な稜が認められる。214は幅4.7cm、厚さ6㎜を測るもので、原形がよく保たれている。215は幅3.3cm、厚さ6㎜を測るもので、紐孔内に敲打、右面の紐孔近くには直径2㎜を測る未穿孔部分が各1箇所認められる。216は幅3.5cm、厚さ7㎜を測り、背部には敲打痕が顕著にみられ、大きく欠損するものである。217は幅4.6cm、厚さ7㎜を測り、両面には明瞭な研磨痕がみられ、左面の紐孔近くに直径4㎜の未穿孔部分が1箇所ずつ確認できる。218は幅4.4cm、厚さ8㎜を測るもので、刃部を大きく欠損するが、左面には刃部をつくり出す際の明瞭な研磨痕が認められる。219は幅4.2cm、厚さ7㎜を測るもので、刃部・背部ともに大きく欠損するが、左面には紐擦れ痕が確認できる。

220～222は結晶片岩製の太型蛤刃石斧で、石庖丁と同じく叩石として転用されている。220は全長11.8cm、幅6.8cm、厚さ4.0cmを測り、ほぼ完形に残存しているものである。基部の形状はやや円弧を描くもので、基端部を中心に敲打痕がみられる。221は残存長7.5cm、残存幅5.2cm、厚さ4.2cmを測り、断面形は楕円形を呈する。左右両面には顕著な敲打痕が認められ、大きく窪む。222は残存長

第39図　遺物実測図23

9.8cm、残存幅5.5cmを測り、基端部・刃部を中心に叩石として転用される。

223は全長9.8cm、幅3.7cm、厚さ2.6cmを測る結晶片岩製の柱状片刃石斧である。断面形は方形をなし、抉りの無い形態のもので、刃面との稜は明瞭ではない。

214～223の出土位置は、214・215・220がSD－10、216がSD－5、217がSK－21、218が第4層、219・223が第2層、221がSK－42、222がSD－2である。

224～228は礫石器であり、図示したもの以外では磨石などが出土している。

224～227は叩石で、いずれも石材は砂岩である。224は左右両面、側縁部に顕著な敲打痕が観察できるものである。225～227は上面を中心に敲打が施されるために窪み、側縁部にも弱い敲打痕がみられる。また、225の上縁部には局部的な赤変部が認められる。これらの重量は224が230g、225が600g、226が240g、227が150gを量る。

228は全長22.3cm、残存幅16.5cm、厚さ6.8cmを測る砂岩を用いた台石である。上面の中央部を中心に広い範囲に敲打が及び、下縁部は直線的な面をもち、擦痕が認められる。また上面及び側面には、二次焼成の痕跡がみられる。

224～228の出土位置は、224・226がSD－5、225・228がSK－33、227がSD－10である。

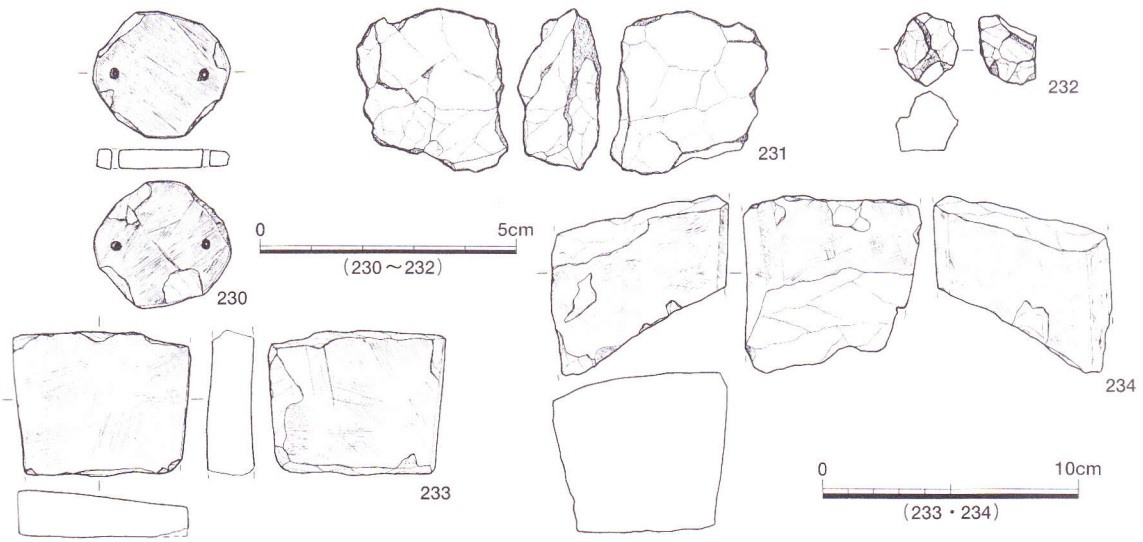
229は結晶片岩を材質とした長さ6.2cm、幅3.1cm、厚さ1.2cmを測るものである。上面はやや平滑で、筋状の鋭利な窪みが認められることから、砥石の用途が考えられる。第2層から出土した。

(11) 石製品（第40図、図版29）

石製品には図示した有孔円板や火打石、砥石の他に、砂岩製の石臼片や碁石とみられるものが出土している。

230は第2層から出土した滑石製の有孔円板である。直径2.7cm、厚さ4㎜を測り、一部を欠損するがほぼ完形である。両面ともに不定方向の研磨痕が明瞭にみられ、周縁部は整った円形を呈さず、成形時の研磨による直線的な面をもち、やや角張っている。円孔は内径が1㎜、外径が2㎜を測るもので、重量は4.8gである。

231・232は火打石である。231は石英製で長さ3.3cm、幅3.0cm、厚さ1.6cmを測り、重量は17.6gで



第40図　遺物実測図24

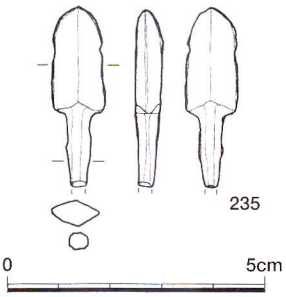
ある。打割面の稜線、側縁部は火打金の打撃により細かく潰れている。231は緑灰色を呈するチャート製のもので、過度に使用されたために約1.5cm大の小さな八面体を呈し、重量1.8gを量る。これらの出土位置は231が第２層、232がSK－２である。

233・234は砥石で、石材は233が砂岩、234が白色を呈する石灰岩質のものである。ともに欠損部を除く全面に不定方向の擦痕が認められ、234の側面はやや弧状を呈している。これらの出土位置は233がSK－41、234がSK－31である。

(12) 金属製品（第41図、図版29）

金属製品としては、銅鏃や鉄釘の他、鉄滓が少量出土している。

235は第３層出土の凸基有茎式銅鏃である。茎先端を欠損するが、残存長3.5cmを測り、重量は2.8gである。身は長さ2.0cm、幅1.0cm、厚さ５㎜を測り、身先端は剥離したことから丸みを帯び、横断面は菱形を呈する。茎は長さ1.5cm、幅５㎜、厚さ３㎜を測り、横断面は六角形を呈する。



第41図　遺物実測図25

(13) 木製品（第42図、図版29）

236～240は、SD－11の最下層から出土したものである。

236は残存長14.2cm、厚さ4.4cmを測る膝柄横斧の斧台と考えられるもので、斧台前面と後面の境で破損している。斧台基部は一部破損しているが、すぼまる形状とみられる。斧柄との装着方法は、通例のように孔を空けて挿入するのではなく、ほぞを切って組み合わせるものである。斧身との装着溝は破損により不明瞭であるが、中央ではなく片側にかたよっており、斧身は柱状片刃石斧の可能性がある。加工痕はほぼ全面に観察できるが、特に側面は面取り状の加工痕が明瞭である。

237は残存長15.3cm、直径6.0cmを測る杭であり、下端は鋭利に尖る。一部に段状の加工痕がみられ、側面にやや明瞭な加工痕跡が観察できる。

238・239は、SD－11の底面に打ち込まれていた矢板状の杭であり、原位置を保つ６点の取り上げを行ったうちの２点である。杭の下端は尖らず平坦であり、表面には若干の工具痕が認められる。均一な柾目材であることから、原木を木口面で放射状に分割したものと考えられ、側面の一端が尖り、横断面は三角形状を呈する。法量は238が残存長56.1cm、幅9.0～10.3cm、厚さ3.0cm、239が残存長66.9cm、幅6.0～8.8cm、厚さ3.0cmを測る。

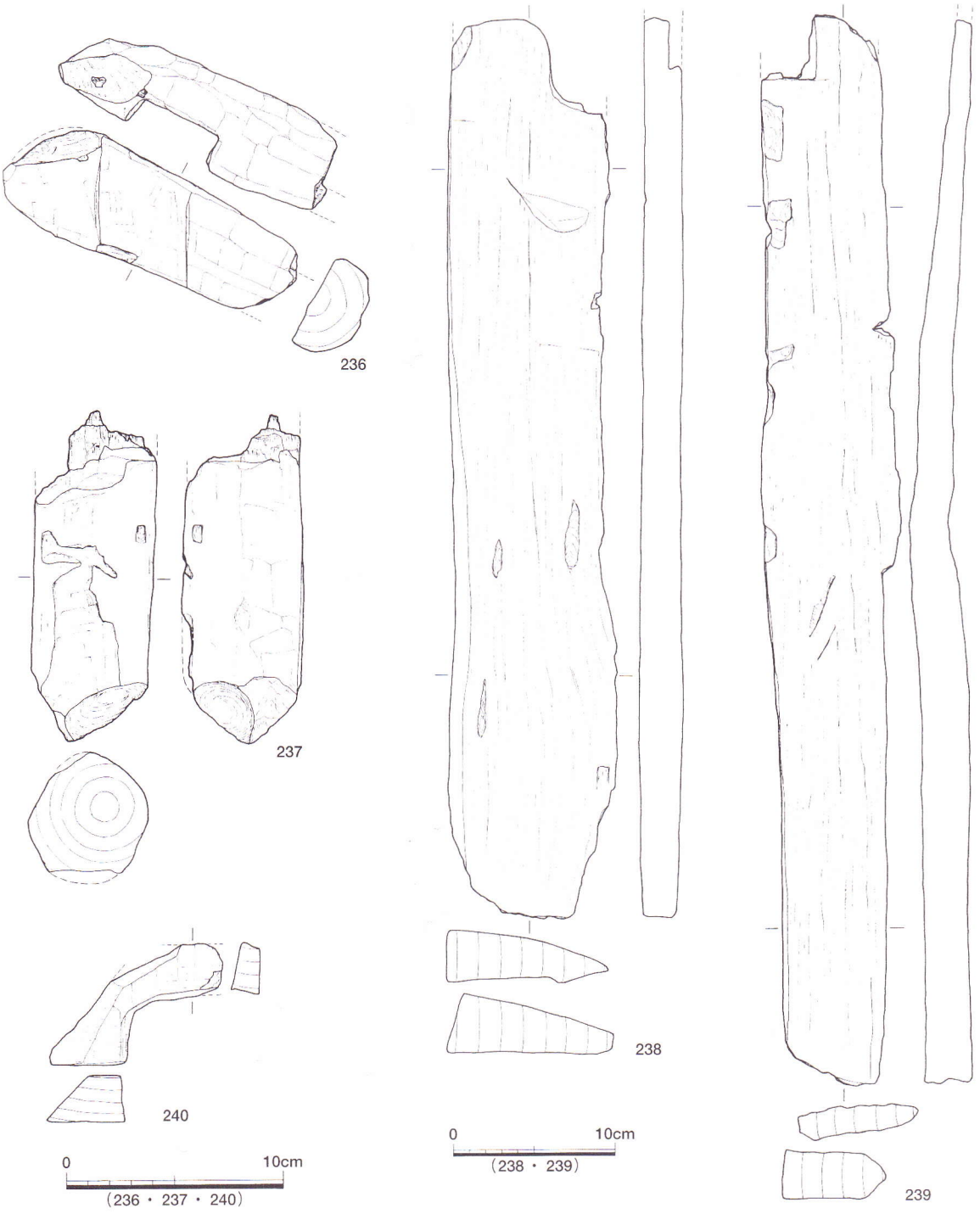
240は長辺8.0cm、短辺5.5cm、厚さ1.0～2.2cmを測る用途不明の部材である。ほぞ状の加工が行われ、一部には柾目に直交する加工痕が僅かに観察できる。

(14) 自然遺物

本調査で出土した自然遺物には、炭、骨（人骨・獣骨・歯・魚骨）、自然木、種子（桃核）などがある。

骨はSD－12・２・５、SK－42・35・36からそれぞれ出土したが、その中でもSD－５からは一定

量の獣骨・歯の出土があった。また、SK－36から出土した人骨は頭部と左上半身は削平されていたが、残存する部分の遺存状態は良好なものである。自然木・種子についてはSD－11最下層から一定量の出土があり、桃核はSK－22から少量出土した。



第42図　遺物実測図26

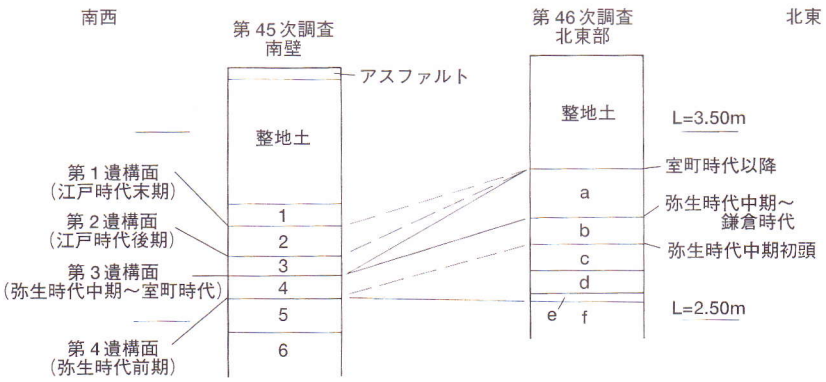
7.まとめ

（1）遺構の変遷について

今回の調査では4面の遺構面の調査を行い、それぞれの検出面において良好な遺構を検出した。各遺構面の時期を整理しておくと、第4遺構面が弥生時代前期の紀伊第Ⅰ様式新段階に、第3遺構面が弥生時代中期の紀伊第Ⅱ様式新段階から室町時代後期まで、第2遺構面が江戸時代後期に、第1遺構面が江戸時代末期にそれぞれ比定できる。これらの遺構面について、時期の古いものから各遺構面ごとに遺構の変遷をたどってみたい。また今回の調査と並行して調査を行った北東側隣接地にあたる第46次調査においても当調査とは様相の異なる4面の遺構面を検出しており、これらを比較検討してまとめとしたい。

まず弥生時代の遺構を検出した遺構面としては、第3・4遺構面の2面である。第4遺構面は、第5層上面において検出した弥生時代の単一な遺構面であり、前期の環濠（SD－11・12）、溝状遺構（SD－13）やピットを検出した。この遺構面の標高は2.6～2.8mである。この遺構面に対応する周辺調査で検出された遺構としては、北西約150mの地点に位置する第26次調査（1995年）の前期の大溝や土坑がある。この大溝が、今回検出した環濠の延長部にあたるものとみられ、当遺跡が弥生時代前期の環濠集落であることを初めて明らかにすることができた。また今回検出した2条の環濠は、出土遺物や堆積による埋没状況などが類似することから併存していたことが明らかであり、出土した土器からみて機能していた時期は弥生時代前期（紀伊第Ⅰ様式新段階）に、最終埋没の時期は中期初頭（紀伊第Ⅱ様式古段階）にそれぞれ比定できるものである。前期環濠集落の内側にあたる第46次調査地点では、環濠埋没の堆積に併行すると考えられる遺物包含層が20cm程度の厚みで2～3単位（第43図c～e層）に分層できる状況を確認している。また、このc層の上面には遺構面が存在し、紀伊第Ⅱ様式古段階に併行する竪穴住居1棟や土坑などを検出している。

次に、第3遺構面は第4層上面において検出したもので、遺構面の時期としては弥生時代中期から室町時代にかけてのものである。遺構面の標高は、2.8～3.1mである。検出した遺構について、弥生時代ではSD－10・2などから紀伊第Ⅱ様式の新段階から遺構が形成されるものとみられ、SK－42から紀伊第Ⅳ様式までその範囲がおさまるものとみられる。また古墳時代では、前期の井戸と考えられる土坑（SK－35・21）や中期の土坑（SK－39）、後期の土坑（SK－13・30）、末期から飛鳥時代の溝（SD－6）などを多数検出し、ほぼ連綿と確認できる状況にある。鎌倉時代では、井戸と考えられるSK－22・32のほか、多数の土坑やピットなどを検出し、室町時代では、井戸（SE－1・2）や土坑（SK－9・17）、土葬墓（SK－36）などを検出した。このように、弥生時代から室町時代という長期にかけて遺構が検出でき



第43図　第46次調査との遺構面対応土層柱状模式図

るこの遺構面は、太田・黒田遺跡の中央部において確認できるもので、安定した立地条件にあるものと考えられる。しかし、当調査地は遺構の形態として深掘されたものが多く、比較的浅く掘削された遺構はみられなかった。また隣接地の第46次調査地に比べるとこの遺構面の標高は20cm程度低い部分も存在する。このことから、当遺構面は大規模な削平を受けている状況が窺え、さらに第46次調査では単一な鎌倉時代の10～20cmを測る遺物包含層（第43図a層）を確認し、その上面に室町時代の遺構面を検出している。この土層は、当地では存在しないことからもそれを裏付ける根拠となる。第46次調査では古墳時代の竪穴住居を検出しているが、壁溝のみが遺存していた状況であったことなどから、削平を受けているものと考えられる。以上のことを踏まえると、当地でも古墳時代の竪穴住居等が存在していた可能性も考えられる。

また室町時代の遺構・遺物から太田城との関わりをみると、井戸（SE－1・2）や土坑（SK－9・17）、土葬墓（SK－36）などを検出した。太田城に関係するとみられる遺構では、1968年に行われた第1～9次調査や1987年の第19次調査などにおいて、東西方向の幅10m、深さ3mの規模をもつ中世末期に埋没した大規模な濠状の溝を検出しており、また西側に隣接する市道有本田尻線の範囲内で調査された第11次調査や第12次調査において中世の溝や溝の一部か池状の落ち込みと考えられる16世紀代の大きな掘り込みを確認している。また第46次調査においてもN－14°－Eに主軸をもつ南北方向の溝や土坑などを検出している。そして、今回検出した井戸などは生活に関係するとみられる遺構であることから、当地周辺は太田城の存在した時期には居住範囲に含まれている可能性が高いものと考えられる。また遺存状態の良い人骨が出土した土葬墓（SK－36）は、共伴する遺物から室町時代後期に位置づけられることから、太田城とどのような関わりをもつのかを今後の課題のひとつとして考えたい。

第2遺構面は、第3層上面において検出したもので、溝状遺構2基（SD－7・8）がある。これらの遺構は、出土した肥前系磁器などから江戸時代後期に位置づけられ、江戸時代の太田・黒田遺跡を考える上での貴重な資料を得ることができた。

第1遺構面は、第2層上面において検出したものである。この遺構面では、石垣（SV－1）及び不定形の土坑2基（SK－1・2）を検出した。検出した石垣（SV－1）の構築時期は、江戸時代末期に上限をおくことができ、この遺構面を形成する第2層が水田耕土に対応するものと考えられることから宅地と水田とを区画する性格をもつものと思われる。

以上、今回の調査成果を遺構面ごとにその変遷をみてきたが、第46次調査との対応関係のなかで、北東部に位置する微高地にあたる地点では弥生時代中期以降の遺構面の標高が高く、南西部にあたる微低地部に向かって下降する傾斜をもつ状況が得られ、遺跡南部での古環境を復元する上で貴重な成果といえる。

【参考文献】

『太田・黒田遺跡　第26次発掘調査概報』　（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年

（２）弥生時代前期の環濠について

今回の調査における最大の成果は、第４遺構面において検出した弥生時代前期環濠の検出であり、この環濠を検出したことから当遺跡が弥生時代前期段階において既に環濠集落であったことが明確となった。この環濠は1995年の第26次調査において幅2.3m、深さ1.2mの大溝を延長約25m分検出し、その遺構形状や堆積状況などから環濠となる可能性を考えていた。この大溝が今回の調査で検出したSD－11の延長部にあたるものとみられ、その距離は約150m以上続くことになる（第44図）。また、SD－11の南西に3.0～3.6m隔てて並行するSD－12の延長部に関しては、第26次調査段階において下層調査の範囲の制約から確認することができなかった。このほか、前期段階の遺構の検出範囲は、完全な下層調査を行っていない場合が多く、東側150mに位置する第16次調査の竪穴住居１棟と第26次調査及び第46次調査の土坑などがある。これらのことから、環濠集落の内側に当たる範囲はSD－11の北東側に位置し、このSD－11が内環濠にあたるものと考えられる。

弥生時代前期段階の環濠集落としてよく知られている遺跡としては、福岡県の板付遺跡や兵庫県の大開遺跡などがある。前者は前期でも古段階に位置づけられる初現期のもので、東西81m、南北110mの長楕円形で、面積6,700㎡である。また後者は、現代のところ近畿地方の最古例にあたる前期中段階のもので、成立当初は東西70m、南北40m、面積1,300㎡であったものが、その後拡張して面積2,100㎡を測るようになる。また奈良県の多遺跡では前期新段階の環濠が検出されており、東西300m、南北350mの範囲が復元され前期段階の最大級とされている。

次に、中期段階の環濠集落では、大阪府の池上曽根遺跡や奈良県の唐古・鍵遺跡などの30,000㎡をこえる大規模な環濠集落が確認されている。太田・黒田遺跡においても中期段階の遺物の出土範囲が東西500m、南北900mにも及ぶことから、この段階の環濠が検出されていなくとも大集落であったことには疑う余地がないと思われる。

和歌山県内における環濠集落としては、御坊市に所在する堅田遺跡が知られている。堅田遺跡は前期の古段階に集落が形成され、前期末には廃絶したという前期に限られた集落

第44図　弥生時代前期遺構の検出地点

である。環濠は、遅くとも中段階から新段階の始め頃には掘削され、３条の濠を含めた範囲は東西120m、南北150m、面積約15,000㎡とされる。このほか、海南市から和歌山市にかけてその範囲をもつ岡村遺跡に中期段階とみられる環濠が確認されているほか、中期末から後期にかけての高地性集落と考えられる和歌山市の滝ヶ峯遺跡や橘谷Ⅳ遺跡に空濠とみられる環濠が検出されている。

以上の時期的な様相をふまえ、環濠の様相をみてみると沖積平野に掘削された環濠の場合には全周する濠をもつものが多いとされている。このことから、当遺跡の環濠も全周する可能性が高い。

次に環濠の規模について、当遺跡の環濠は少なくとも二重の濠が巡らされている多重環濠であり、内濠（SD－11）は幅3.6～3.9m、底面の幅0.6m、深さ1.9～2.0mの規模をもち、断面形は逆台形である。また外濠（SD－12）は、SD－11と幅3.0～3.6mの間隔をもって並行し、その規模は幅1.2～1.4m、底面の幅0.2m、深さ1.2～1.4mで、溝の断面形は「Ｖ」字状を呈する。前期段階の多重環濠は、堅田遺跡や大阪府の安満遺跡などのように近畿地方のひとつの特徴とされているもので、堅田遺跡では３条の環濠が確実に巡る。この点からみても、当遺跡の多重環濠は近畿地方の一般的な様相をもつものとして位置づけられる。濠の横断面の形状では、比較的「Ｖ」字状のものが規模が小さく、逆台形状のものが規模が大きいとされており、近畿地方で採用された形状は逆台形が多くをしめている。このことから、当遺跡の環濠は、内・外の規模によってその形状が異なる特徴的な多重環濠であるといえよう。

次に、環濠の構造については、愛知県の朝日遺跡において環濠内部にカシの木を外向けに立て並べた逆茂木とその外側に杭を密に打ち込んだ忍び返しが検出されている。また堅田遺跡では外濠と中濠の間に土塁が築かれていたことが確認され、このような土塁をもつ形態が多く復元されている。今回の調査では、環濠内部の堆積や環濠間及び環濠の内側の状況から土塁が存在したかについては確認することができなかった。しかし、内濠の西壁際、すなわち外側にあたる面には溝の勾配に沿ってやや内傾させて打ち込まれた６本の杭列を検出した。この杭列が矢板状の護岸施設であったことが考えられることから、内濠と外濠の間に何らかの施設が存在した可能性が指摘できる。

以上のように、太田・黒田遺跡における前期環濠集落についてみてきたが、当遺跡の環濠はようやく２地点において確認された状況であり、その実態解明については今後の課題であろう。また、前期段階で環濠集落が形成されていることから、中期以降にも環濠の掘削を行っていた可能性が考えられ、これについても今後の調査に期待したい。

【参考文献】

「弥生文化の研究７　弥生集落」　雄山閣　1985年
都出比呂志　「住居の構造と集落の形態」　『世界考古学大系』日本編補遺　天山舎　1987年
「堅田遺跡」弥生前期環濠集落2000.11.19　御坊市　2000年
「環濠集落とクニのおこり」　『季刊考古学』第31号　雄山閣　1990年

（3）環濠出土の弥生土器

弥生時代前期の環濠（SD－11・12）から出土した弥生土器は、大きく最下層、下層、中層、上層、最上層の5単位に区分して取り上げを行ったが、中層からの遺物は稀薄であり、上層から最上層にかけて一定量の出土があった。出土した弥生土器について、本調査の北西150mに位置し、内環濠の延長部とみられる第26次調査SD－19出土遺物も含め、出土層位と土器の年代との関係を整理したのが第45図である。まず最下層からは第Ⅰ様式新段階に併行する遺物のみが出土しており、他の時期の遺物はみられない。次に下層から上層にかけては第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式古段階にかけての遺物が混在するが、その中で最も新しい時期の遺物の年代は、下層が第Ⅱ様式古段階古相、上層が第Ⅱ様式古段階である。最上層については、第Ⅱ様式古段階に併行する遺物のみが出土している。これら環濠出土の弥生土器と出土層位から明らかにできる点として、環濠は第Ⅰ様式新段階には存在し、第Ⅱ様式古段階には完全に埋没したということであり、出土した弥生土器は第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式古段階にかけて漸移的な変容過程を示す遺物群であるということである。この中で注意すべき遺物は、下層から出土した鉢（15）及び上層から出土した壺（2）のように、同一個体においてヘラ描文とクシ描文が共存する個体である。これらの土器は中期の指標とされるクシ描文に前様式のヘラ描沈線を付加するもので、現在まで鳴滝遺跡出土の壺が知られており、従来の編年では紀伊Ⅰ－3様式に含まれ次様式に下る可能性が指摘されていたものである。本調査では環濠から出土した2点以外に、中期初頭の遺物包含層である第4層から細いヘラ描沈線間に太いヘラ描沈線を施した壺が1点出土しており、環濠出土遺物と同様に前期と中期の過渡的様相を示す遺物と考えられる。太田・黒田遺跡では、本調査の北東隣接地である第46次調査においても、SK－24・SB－2及び遺物包含層からヘラ描文とクシ描文が共存する直口壺や広口壺が総数で6点出土しており、SK－24・SB－2ではクシ描文土器と共伴している。また太田・黒田遺跡以外では、和歌山市神前遺跡第3次調査SX－1及び前述の鳴滝遺跡から、ヘラ描文とクシ描文が共存する壺の頸部片が出土している。神前遺跡第3次調査SX－1は、出土遺物が少なく共伴する遺物の様相が不鮮明であるが、遺構の年代は上面の遺物包含層に含まれる遺物の年代より前期末から中期初頭の時期が考えられている。

以上のような中期の指標となるクシ描文に前様式のヘラ描沈線文を併用する土器群については、直口壺が認められ、広口壺の口縁端部が肥厚し、第Ⅰ様式に比較して壺の体部がより球形化しているなど、第Ⅱ様式的な様相が確認できる。前期と中期の過渡期において、このような特徴を示すのは、他地域では和泉地域を除いてはほとんど認められないものである。和泉地域では「付加条をもつヘラ描沈線文、付加条をもつクシ描直線文をもつ段階」として第Ⅱ様式初頭にⅡ－0様式が設定されている。池上曽根遺跡では、中期段階において紀伊型甕が多量に搬入される状況から、従来より和泉地域とは密接な関連が指摘されているところではあるが、前期から中期への移行過程として同様な変容過程を確認できた点は注目できる。そこで、この現象を積極的に評価し、和泉地域と同じく小様式を構成する一属性と認め、本格的なクシ描文の成立に先行し、ヘラ描沈線の消滅を指標とする紀伊Ⅱ－1様式の前様式として、新たにⅡ－0様式の設定を考えたい。

畿内においてはヘラ描き沈線文土器とクシ描文土器との共伴例が確認されたことにより、その共存段階が判明し、第Ⅰ様式と第Ⅱ様式との差をヘラ描文とクシ描文によって一様に分離しえない状

況が指摘されている。和歌山県内においては、この動向がクシ描文による帯状文様の萌芽期として同一個体内での太描沈線文と細描沈線文あるいはヘラ描文とクシ描文を併用する土器群の存在に表出されていると考える。和歌山県内では第Ⅱ様式段階に集落の一時的な衰退が想定されるなど、第Ⅱ様式古段階の資料が少なく、第Ⅰ様式から第Ⅱ様式への移行過程は不明瞭である。このことから、今回設定したⅡ－0様式が他の遺跡においても適用できるかは現段階では明らかではない。Ⅱ－0様式は太田・黒田遺跡では環濠が埋没し、集落が大きく拡大する画期にあたり、集落の変遷過程においても過渡期にあたる。今後は、調査の進展に伴う一括資料の増加と型式学的な検討、集落の変遷過程を含めた検証を試みることにより、第Ⅰ様式から第Ⅱ様式にかけての土器様相について、より鮮明にできるものと考える。

【参考文献】

『太田・黒田遺跡 第26次発掘調査概報』　(財)和歌山市文化体育振興事業団　1995年

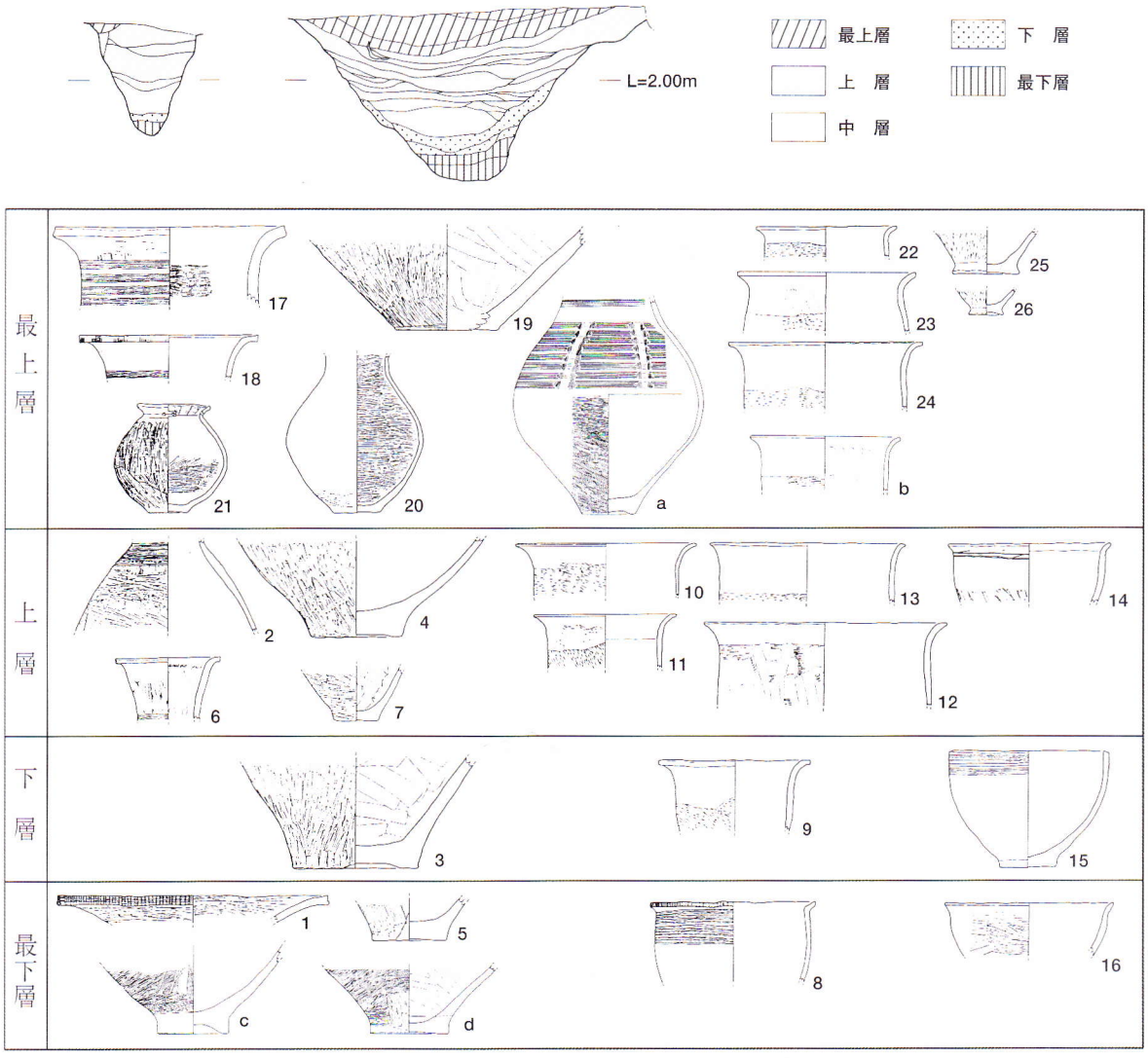
「神前遺跡第３次調査」　『和歌山市内遺跡発掘調査概報－平成10年度－』　和歌山市教育委員会　2000年

井藤暁子　「近畿」　佐原真編『弥生土器Ⅰ』　ニューサイエンス社　1983年

上井孝之　「紀伊地域」　寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅰ－』　木耳社　1989年

樋口吉文　「和泉地域」　寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年－近畿編Ⅱ－』　木耳社　1990年

上井孝之　「紀伊の弥生集落の様相－集落構成の等質と画期を求めて－」　『みずほ』第31号　大和弥生文化の会　1999年



第45図　環濠出土層位別弥生土器一覧

（図中の遺物番号は実測図番号に対応、a～dは第26次調査SD－19出土遺物）

（4）弥生絵画土器について

今回の調査における出土遺物は、遺物収納コンテナ約100箱であった。このうち弥生土器が大半をしめる状況にある。これらの弥生土器の中で、絵画を描いた土器が１点（第25図116）出土した。

全国的にみて、弥生絵画土器の出土は250例を超えるとみられ、これらの約半数が奈良県唐古・鍵遺跡と清水風遺跡から出土している状況にあり、残りが他地域に散在していることとなる。和歌山県内では、これまで採集資料として太田・黒田遺跡で中期段階の鹿とみられるものと田辺市水取山遺跡で後期の水鳥の首部とみられるものの２例が知られていた。しかし、近年の遺物整理において、1978年８月から９月にかけて行われた太田・黒田遺跡第12次調査で出土した遺物の中から２頭のいわゆる矢負いの鹿が描かれた土器片が出土していたことが判明した。土器片は、口縁部から頸部にかけてのもので、器形が復元できることなどこれまでで最も良好な資料といえる。また器種は、今回出土の土器片と同じく段状口縁壺であり、絵画が描かれた部位も同じ口縁外端面である。この土器の詳細については、近々発表予定である。以上の３例に加え、今回の資料が４例目となる。

さて、今回の絵画土器であるが、江戸時代の溝状遺構（SD－７）の混入遺物として取り上げた段状口縁壺口縁部の破片で、類似するものにSD－５出土の段状口縁壺（第22図64）があり、時期的には紀伊第Ⅲ様式の新段階頃に位置づけられる。外端面に描かれた左向きの鹿２頭は、ともに三日月形の胴部から線描による脚が描かれ、１頭の鹿（右）には同じく線描による頸部及び頭部、そして２本の角が表現されている。この鹿の表現を藤田三郎氏の分類に適用すれば、次のとおりとなる。頸部から胴部の表現は頸部単線表現及び胴部三日月形の「第Ⅲ類」に、頭部の表現は頭部を単線で表現した「２類」に、角の表現は左右の主幹のみで角枝がない「d類」に、脚の表現は不明瞭ながら１頭の鹿（左）から脚先が前方向に折り曲げた表現の「ろ類」に分類でき、それぞれが組み合わされたものである。

太田・黒田遺跡で出土した弥生土器はこれまで膨大な量を数えるに至っているが、絵画が描かれたものはわずか３点に過ぎず、これらは紀伊地域における弥生土器絵画を考える上で貴重な資料といえる。その中で、構図が判別できるものはすべて鹿の絵柄である。また絵画が描かれた土器は、器種が判別できるものが２点で、ともに段状口縁壺であり、描かれた部位も共通する口縁外端面であるというひとつの特徴がみられる。

【参考文献】

浦　宏　「水取山弥生式遺跡発見鳥形紋土器」　『紀伊考古』１－２　紀伊考古雑誌発行会　1938年
羽磨正信　「和歌山市太田黒田遺跡出土の一土器片」　『熊野路考古』２　南紀考古学同好会　1962年
藤田三郎　「弥生土器における土器絵画（１）」　『みずほ』第９号　大和弥生文化の会　1993年
藤田三郎　「弥生土器における土器絵画（２）」　『みずほ』第10号　大和弥生文化の会　1993年

8．自然科学分析

（1）太田・黒田遺跡出土の人骨

大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学　安部みき子

太田･黒田遺跡の16世紀後半の土壙から出土した人骨は頭部と左上半身の骨格が失われていたが遺存している骨の保存は良かった。出土状況は関節の状態から埋葬時の位置をたもっていると思われ、頭位は東、仰臥位で埋葬されている。遺存している右の上肢は上腕を体幹に添わせた状態で肘関節を全屈させ、左右の下肢は股関節を半屈させた状態で膝関節を全屈させ、両膝を揃えて埋葬されている。

【保存状態】（第46図、図版30）

頭骨：頭頂骨の一部と思われる破片が４点出土し、そのうちの１点は縫合線を含んでいる。この縫合線は矢状縫合の一部と思われる。

脊柱と肋骨：腰椎の椎弓と椎体の破片が出土している。仙骨は前・後仙骨孔より外側はすべて破損している。肋骨は破片で出土し、部位の同定は出来ないが、出土状況から右半身のものと思われる。

上肢：肩甲骨は肩甲棘から肩峰までと関節窩から関節窩結節が出土している。上腕骨は骨幹部と遠位部が遺存している。前腕の骨格で尺骨の近位部の保存は良かったが骨幹と遠位部は破損し、橈骨は破片で出土している。手根骨は舟状骨、月状骨、大菱形骨と有鉤骨が、中手骨は第１、第２と第４中手骨が出土しているが、第２と第４中手骨は遠位端が破損している。

下肢：左右の寛骨は恥骨と腸骨稜の一部が破損しているが、耳状面から坐骨結節にかけては遺存している。右大腿骨は骨幹の中央の前面と内側上顆が破損している以外はほぼ完全に遺存し、左は骨幹の一部が破損している。膝蓋骨は右のみが出土し、内側の半分が破損している。左の脛骨は破損が大きく復元は出来なかったが、右脛骨は近位の内側顆のみが破損している以外はほぼ完全に出土している。左足根骨は踵骨、距骨、舟状骨、立方骨、内側楔状骨と中間楔状骨が出土し、このうち踵骨と立方骨のみ外側部が破損している。左中足骨はすべて出土しているが、第１中足骨と第２中足骨は骨幹部が破損している。指骨は第１基節骨と末節骨がほぼ完全な形で出土している。右足根骨は踵骨、距骨、舟状骨、内側楔状骨、中間楔状骨、外側楔状骨と立方骨が出土し、これらは完全な形で遺存している。右中足骨もすべての骨が出土しているが、第１中足骨と第２中足骨は骨幹中央部より遠位が破損している。指の骨は第１基節骨の骨頭部のみ同定できた。左右不明の第５指で中節骨と末節骨が癒合しているものが出土しているほかは、左右不明の末節骨と、破片の指の骨が出土している。また、足底の靭帯内に出現する種子骨も３点出土している。

【性および年齢の判定】

出土人骨の性は、寛骨の大坐骨切痕の角度が狭いことより男性と判定される。年齢は、頭頂骨の矢状縫合の縫合線が内側面では完全に消失し外側面でもほぼ消失していることと、手根骨や足根骨、中足骨の関節の辺縁に加令によると思われるわずかな骨増殖が見られることより、40歳以上と推定される。

【形態的特徴】

長骨の骨計測値を表１に示す。

大腿骨は殿筋粗面や粗線の発達が良く、大腿骨上部の扁平示数は82.1と偏平大腿骨に分類され、骨体中央横断示数は左 116.1、右 113.1であった。脛骨の後面のヒラメ筋線は明瞭であるが脛骨の後面の変形は見られず、偏平示数が 80.0と広脛を示した。脛骨の下関節面の前方と距骨の滑車の前方に蹲踞面が見られ、しゃがむ姿勢を頻繁にとっていたと思われる。

大腿骨の最大長が計測できたので身長の推定をピアソンの推定式で行った結果165.1cmとなり、当時としては高身長である。

まとめ

１．本遺跡から出土した人骨は、頭部と下肢を除く左半身が発掘時に喪失していたが遺存している骨格より、頭位を東に仰臥位で屈葬されていた。

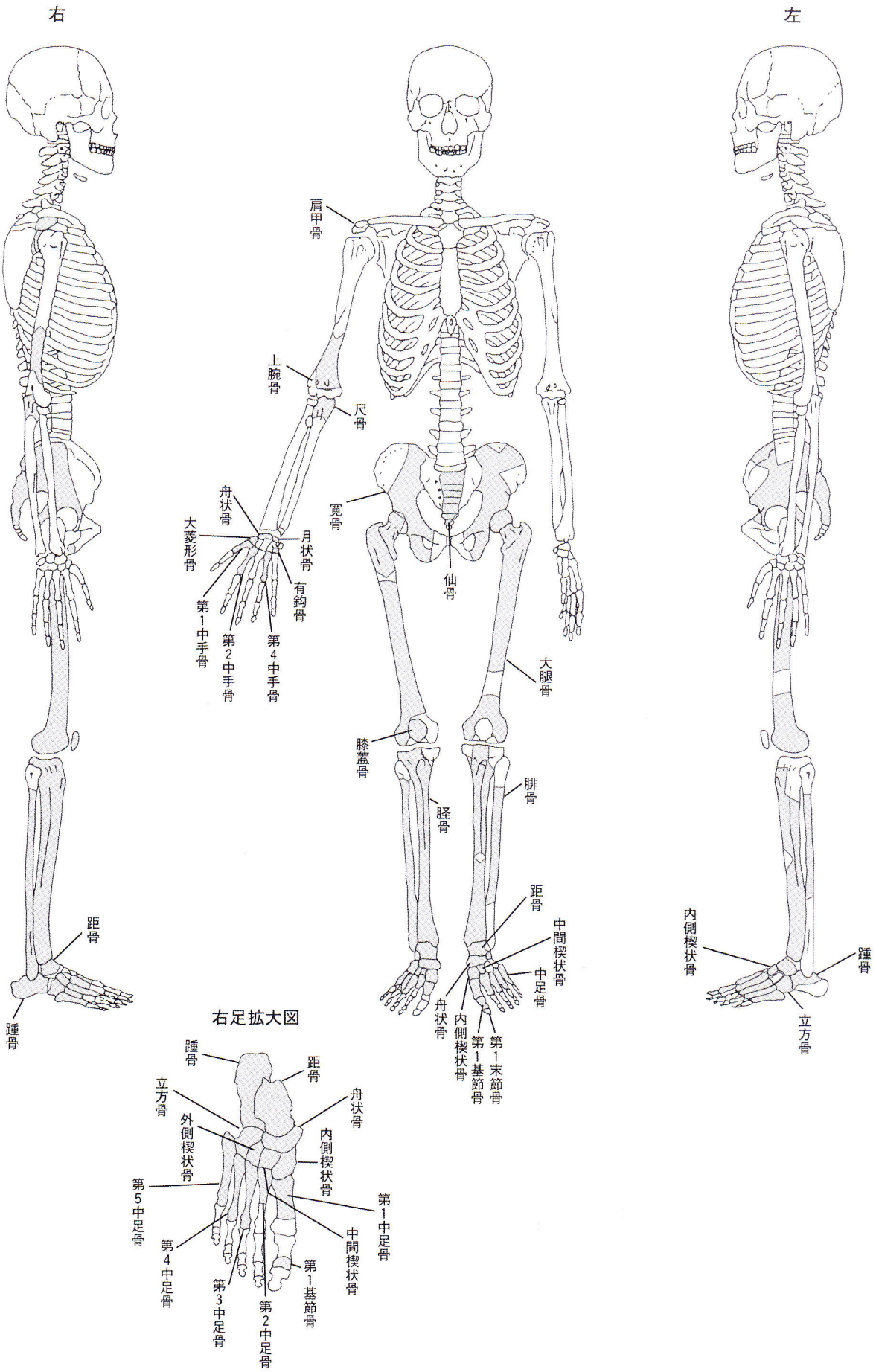
２．本人骨は、40歳以上の男性で、身長は165.1cmと推測された。

３．下肢の筋付着部は比較的発達し、脛骨と距骨には蹲踞面が見られた。

表１　四肢骨の計測値

		左	右
上腕骨	下端幅		61.0
尺骨	近位関節面高		42.1
	滑車関節面高		32.3
	肘頭幅		26.8
	肘頭深		23.7
大腿骨	最大長	446.0	—
	中央矢状径	31.8	31.3
	中央横径	27.4	27.7
	中央周	95.0	93.0
	上部横径	35.0	—
	上部矢状径	28.7	—
	骨体中央横断示数	116.1	113.1
	扁平示数	82.1	—
脛骨	全長		358.0
	最大下端幅		54.9
	下端矢状径		38.5
	中央最大径		32.7
	中央横径		26.5
	中央周		92.0
	栄養孔位最大幅		35.1
	栄養孔位横径		28.1
	栄養孔位周		103.0
	最小周		83.0
	扁平示数		80.0

単位はmm



第46図　出土骨の主要残存部位（トーン部分は主要残存部位を示す）

報告書抄録

ふりがな	おおだ・くろだいせきだい45じはっくつちょうさがいほう
書名	太田・黒田遺跡第45次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第27集
編著者名	井馬好英・川口修実
編集機関	財団法人　和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640－8227　和歌山県和歌山市西汀丁29　　TEL　073－435－1195
発行年月日	西暦　2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積(㎡)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
おおだ・くろだいせき 太田・黒田遺跡 おおだじょうあと 太田城跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 おおだ 太田	3020150	327 356	34° 13' 39"	135° 11' 50"	20001002 20010110	300	事務所 ビル 建設

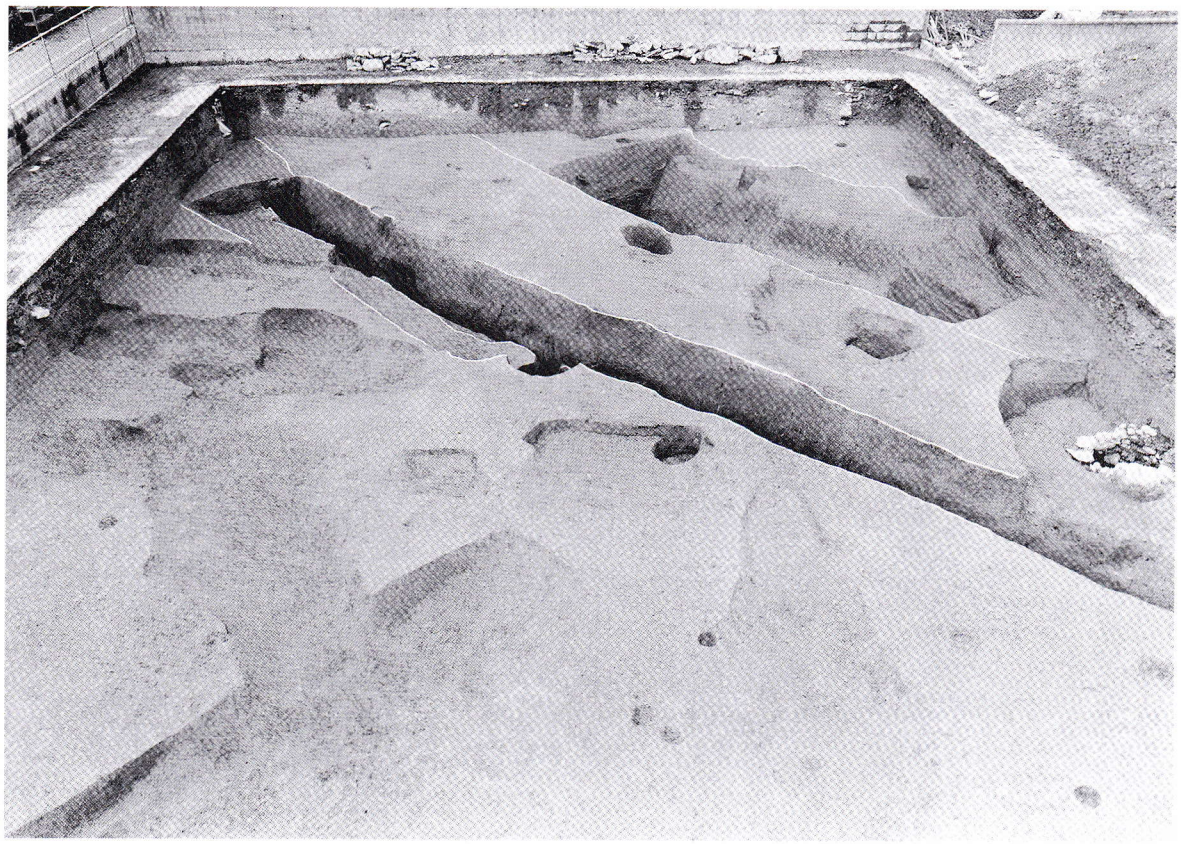
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
太田・黒田遺跡 太田城跡	集落跡 城館跡	弥生時代 古墳時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代	環濠・溝・井戸 ・土坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・中世土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・国産陶磁器・瓦・土製品・石器・石製品・金属製品・木製品・自然遺物	弥生時代前期の環濠を2条検出。 弥生時代中期の絵画土器が出土。 古墳時代初頭頃の銅鏃が出土。

図　　版

調査地近景（南東から）

調査前の状況（東から）

図版2



第4遺構面全景（南から）

第4遺構面全景（東から）

SD－11・12（南東から）

SD－11（北西から）

図版4

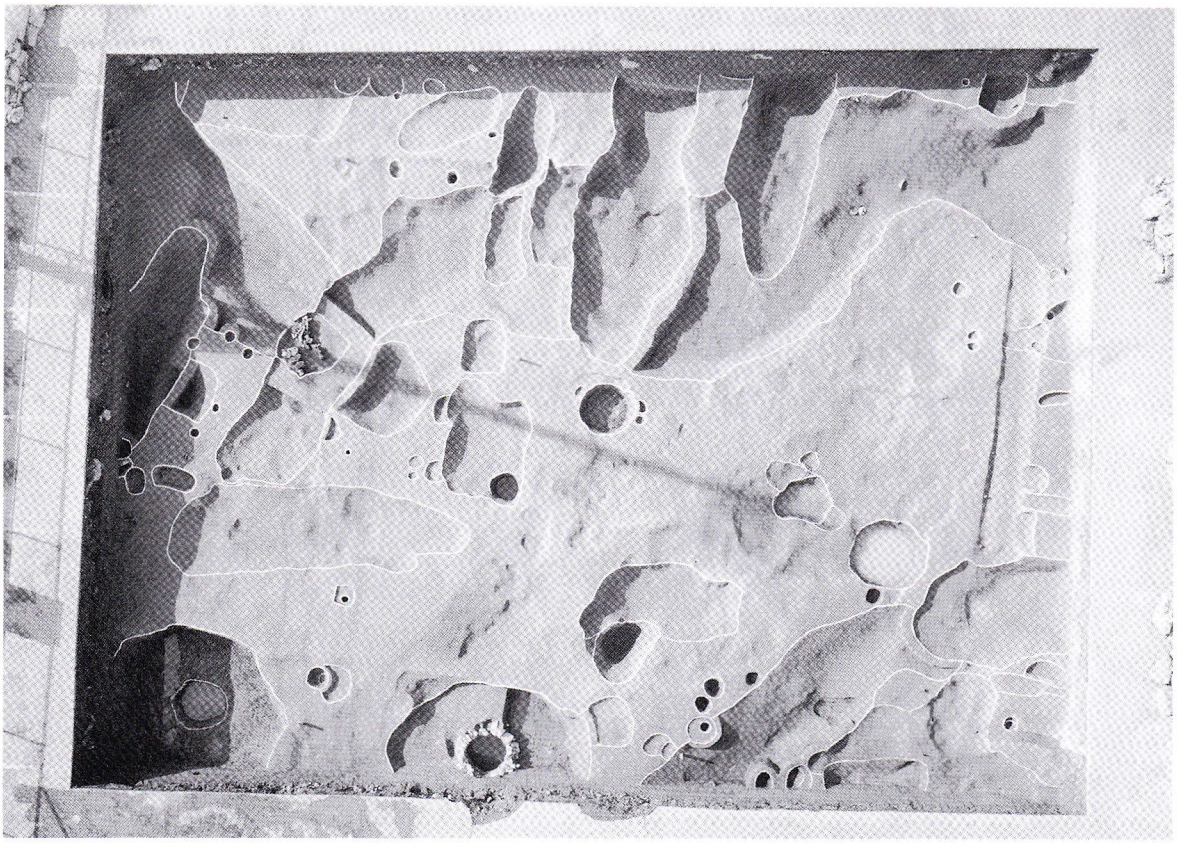
SD－11 杭断割状況（北西から）

SD－11 土層堆積状況（南東から）

SD－12（南東から）

SD－12・13 土層堆積状況（南東から）

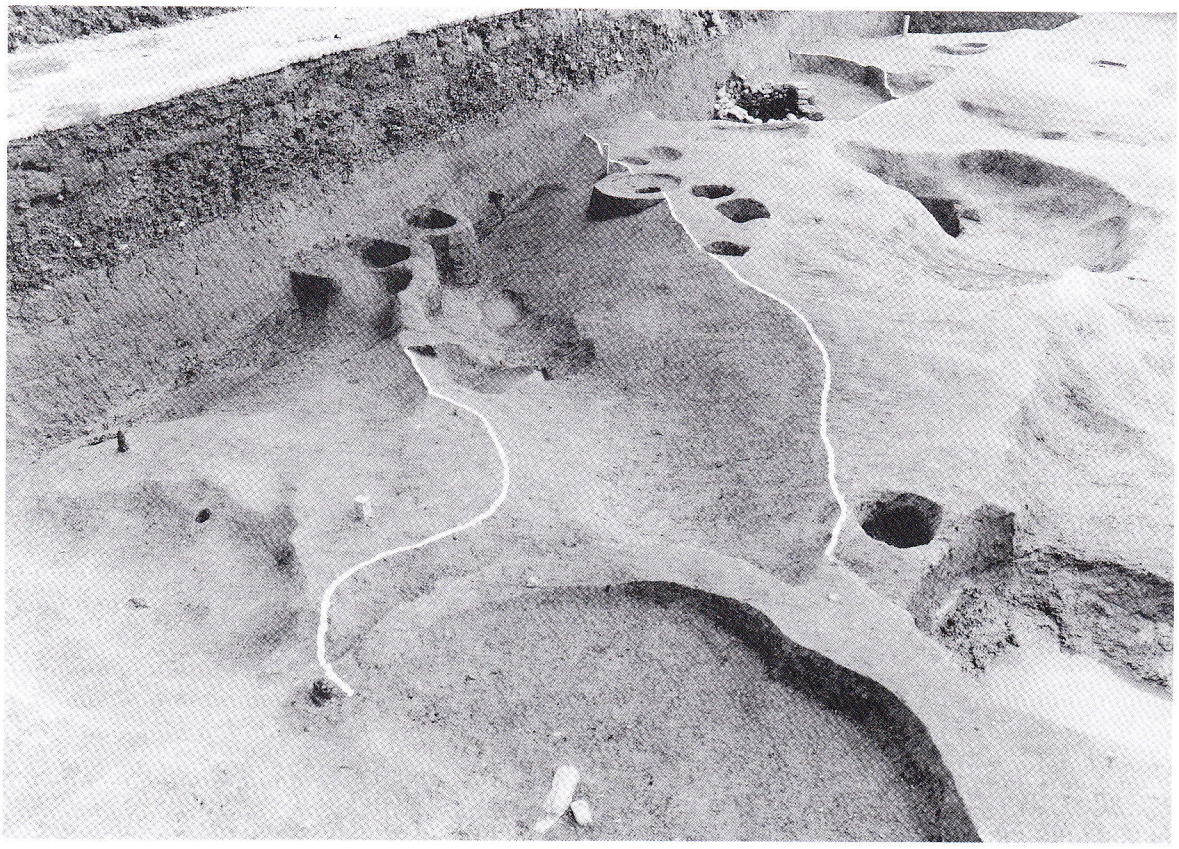
図版6



第3遺構面全景（右が北）

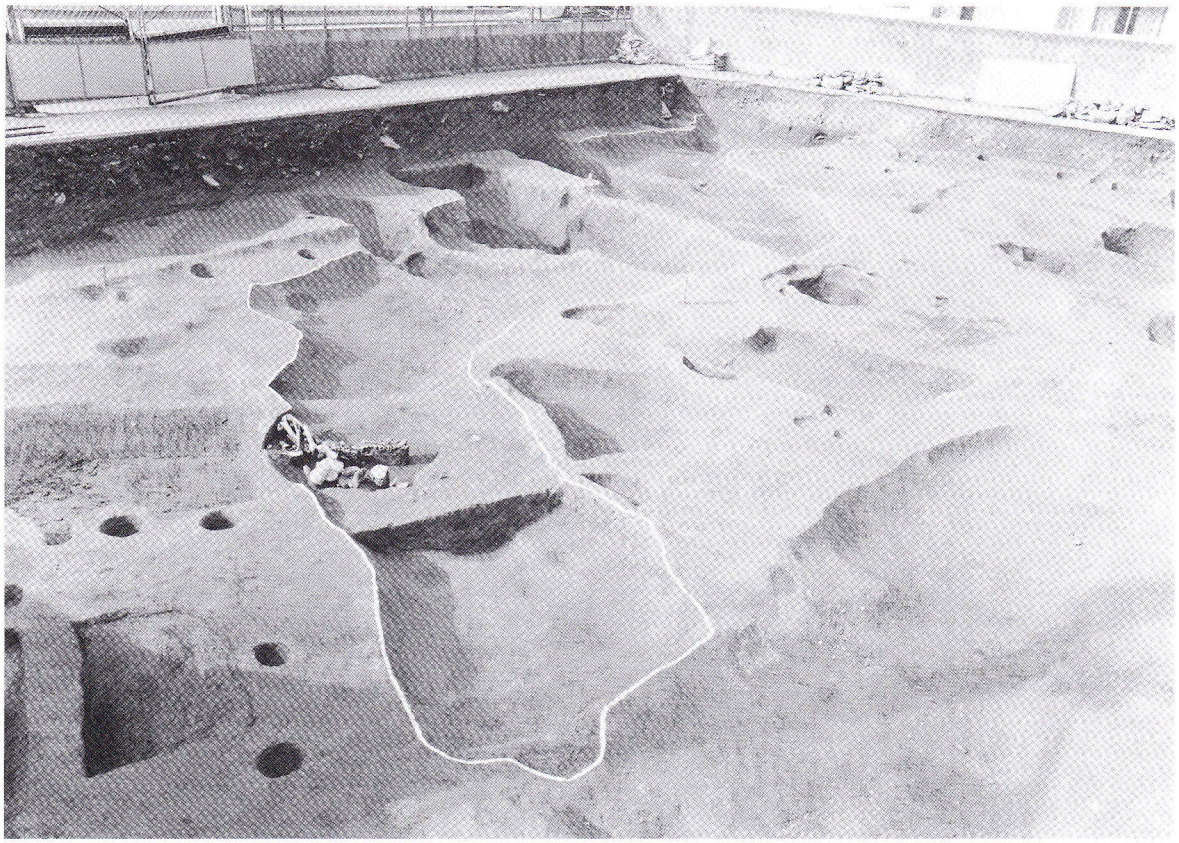
第3遺構面全景（東から）

SD－10（北東から）

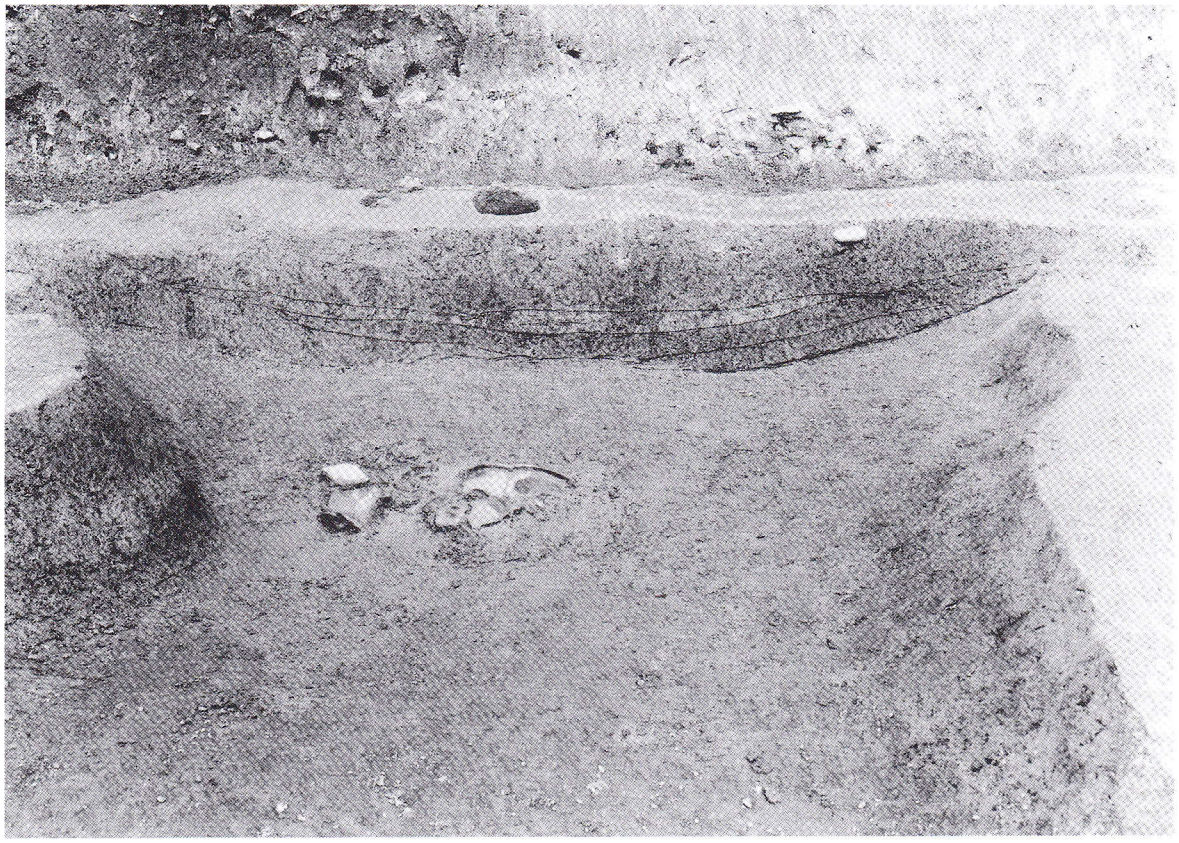


SD－2（北西から）

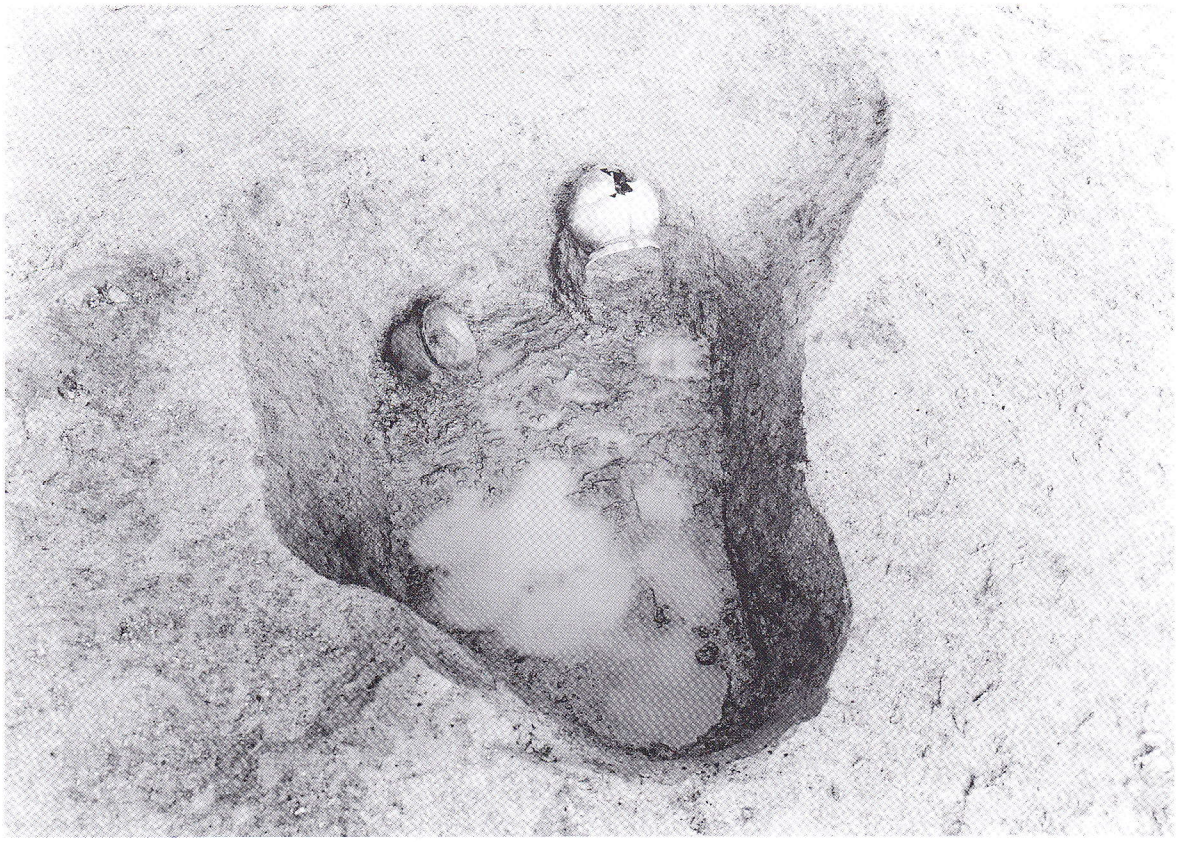
図版8



SD－5（南東から）



SD－5 土層堆積状況（南から）



SK－35 遺物出土状況（南から）

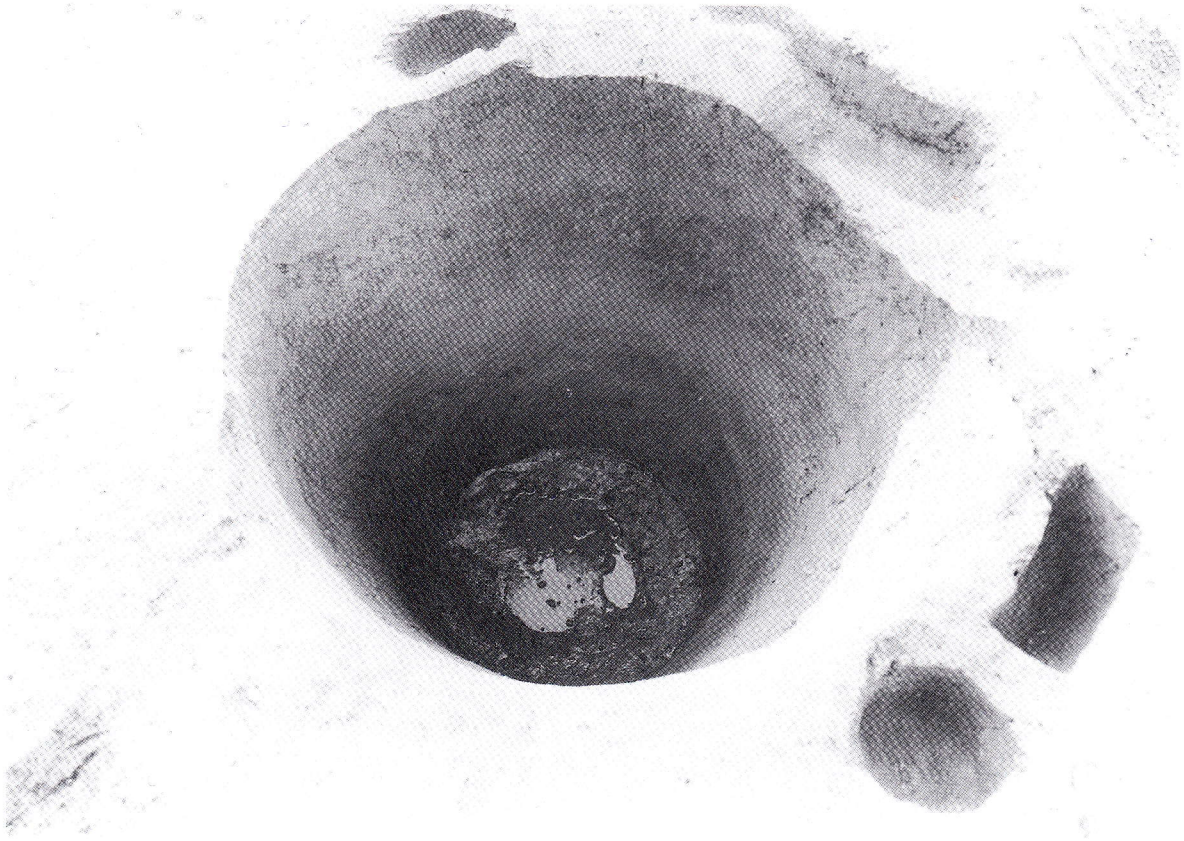
SK－35（南から）

図版10

SD－6（東から）

SD－6 土層堆積状況（東から）

SK－32 遺物出土状況（西から）



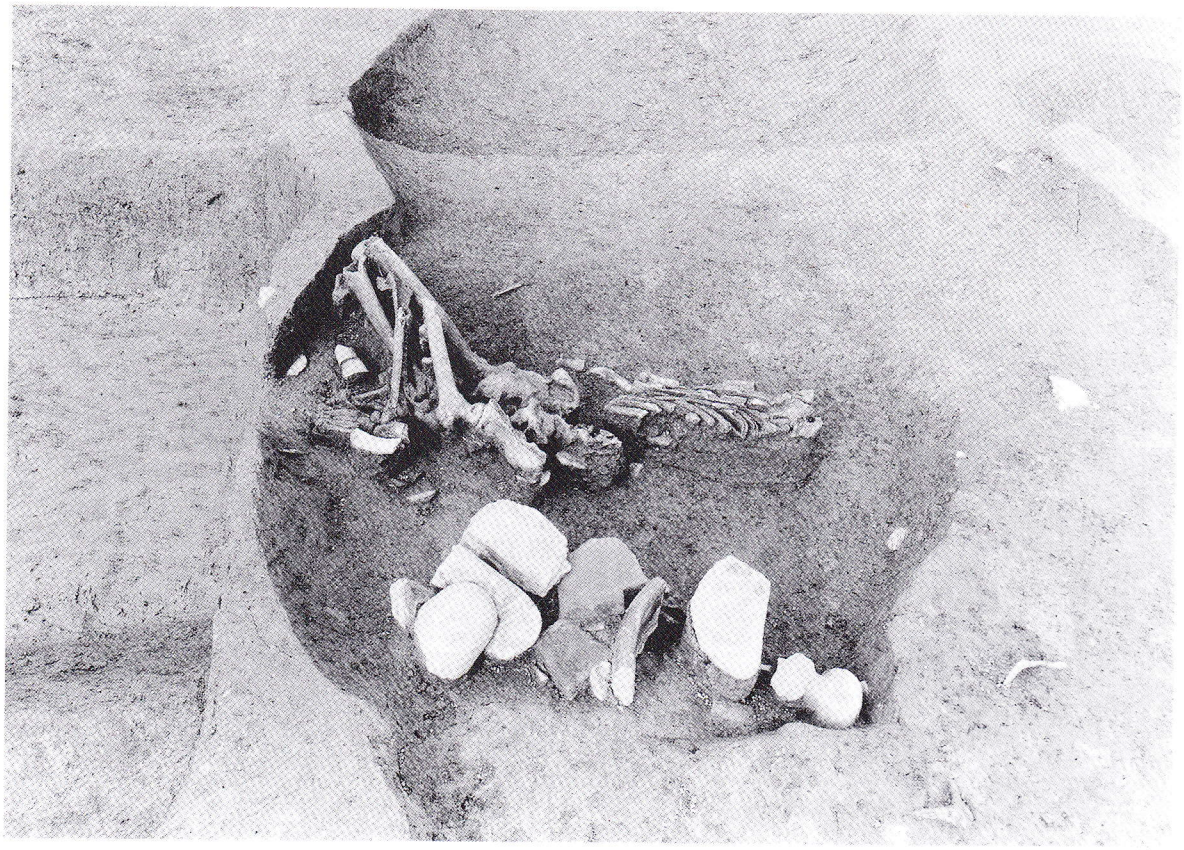
SK－32（東から）

図版12

SE－１（西から）

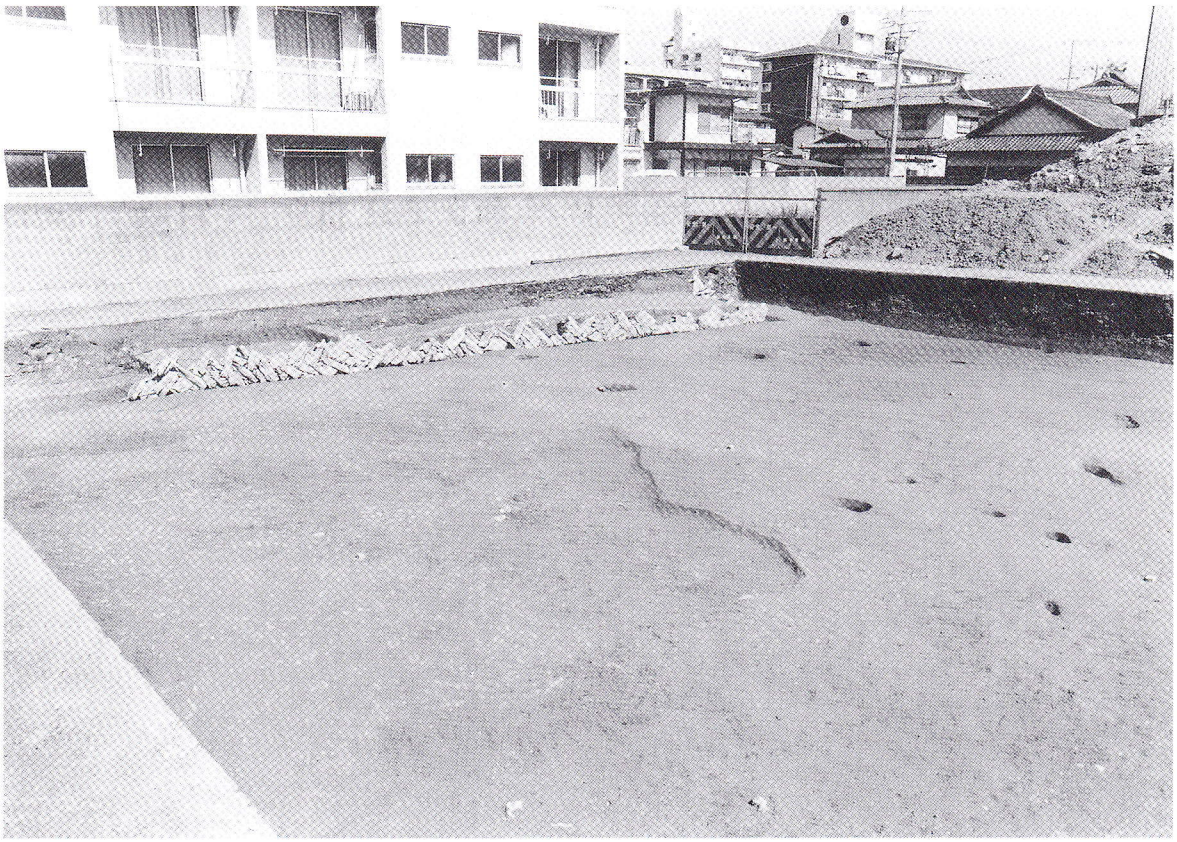
SE－２ 断割状況（北から）

SK－36（南西から）

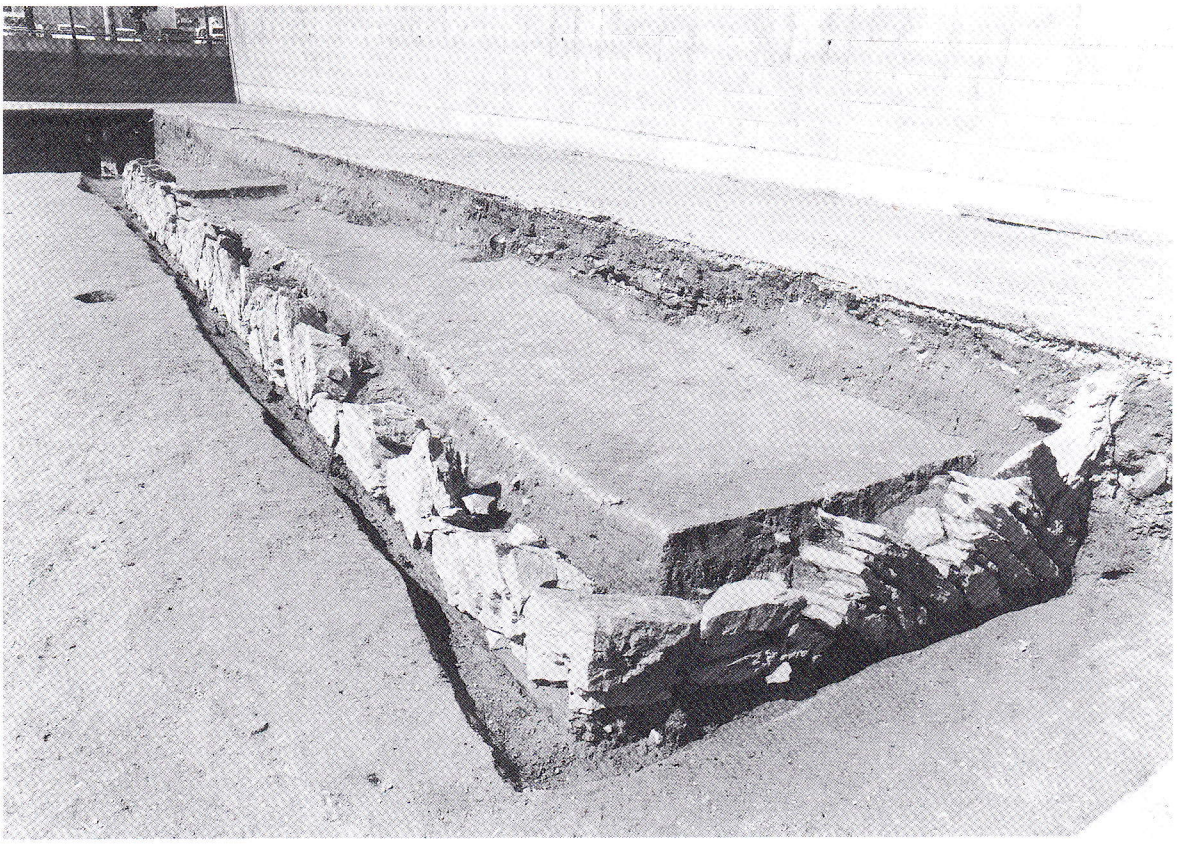


SK－36（東から）

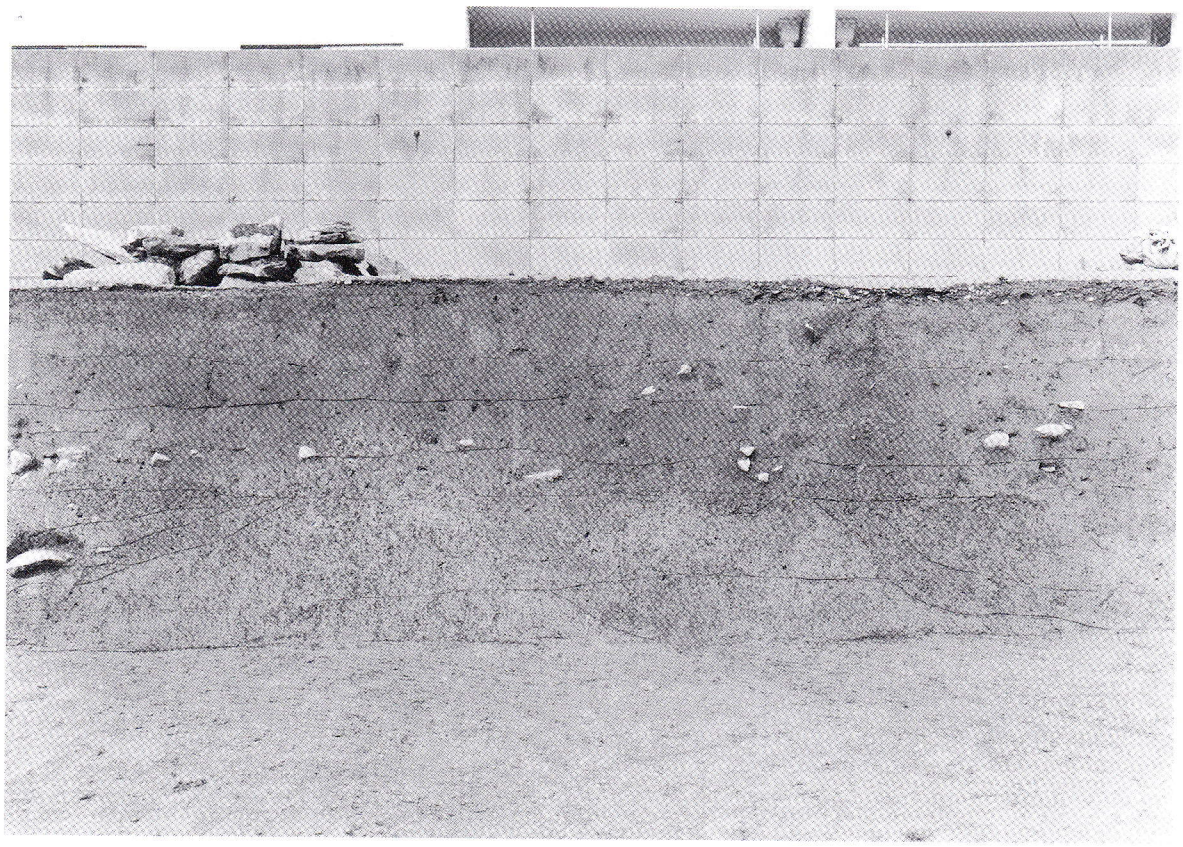
図版14



第１遺構面全景（南西から）



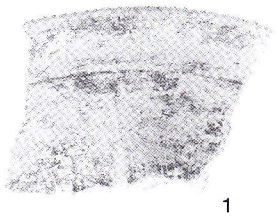
SV－１（東から）



北壁土層堆積状況（南から）

南壁土層堆積状況（北から）

図版16


1

2

SD－11・12 出土遺物　弥生土器１・２ 広口壺

3

SD－11 出土遺物　弥生土器３ 壺底部

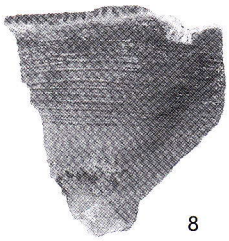
4

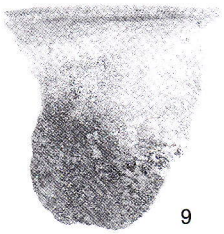
SD－11 出土遺物　弥生土器４ 壺底部

6

7

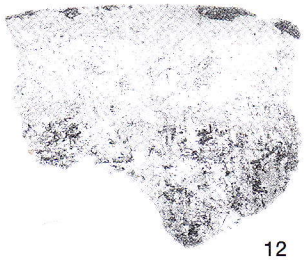
SD－12 出土遺物　弥生土器６ 広口壺、７壺底部


8

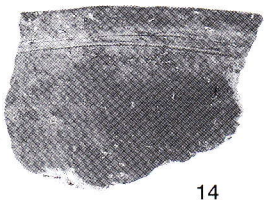

9

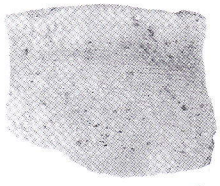
SD－11 出土遺物　弥生土器８・９ 甕

11


12

SD－11 出土遺物　弥生土器11・12 甕

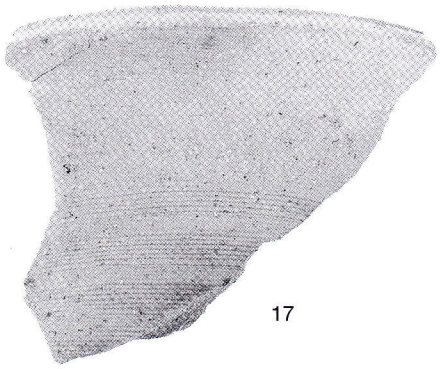

14


16

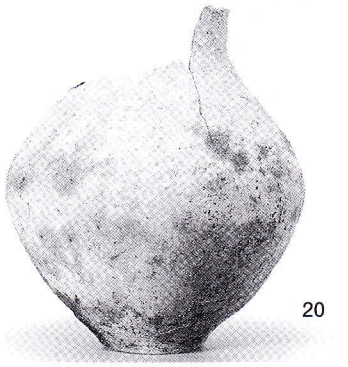
SD－11・12 出土遺物　弥生土器14・16 鉢

15

SD－12 出土遺物　弥生土器15 鉢

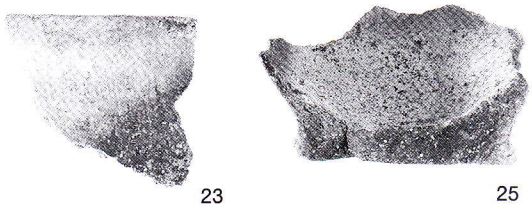


SD－11 出土遺物　弥生土器17 広口壺

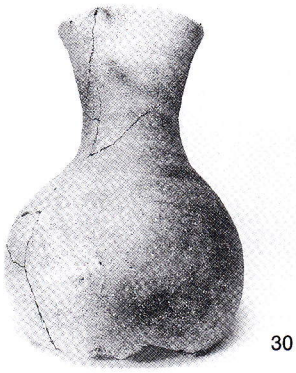


SD－12 出土遺物　弥生土器20 壺

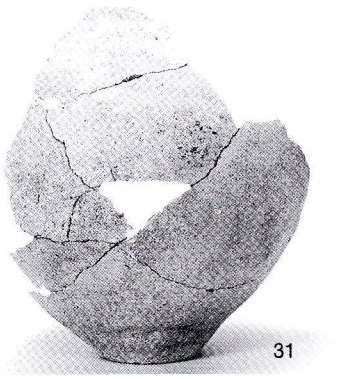
SD－12 出土遺物　弥生土器21 広口壺



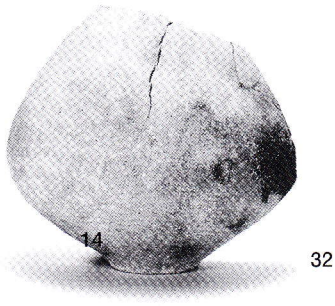
SD－11・12 出土遺物　弥生土器23・25 甕



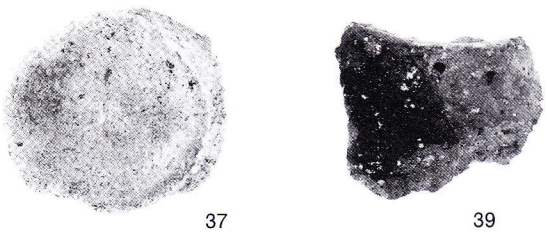
SD－10 出土遺物　弥生土器30 直口壺



SD－10 出土遺物　弥生土器31 壺



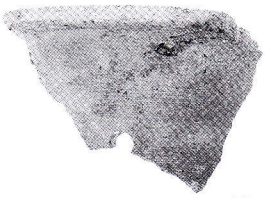
SD－10 出土遺物　弥生土器32 壺

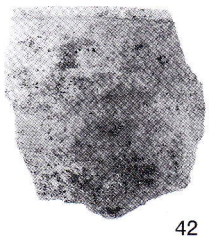


SD－10 出土遺物　弥生土器37 甕底部、39 蓋

図版18

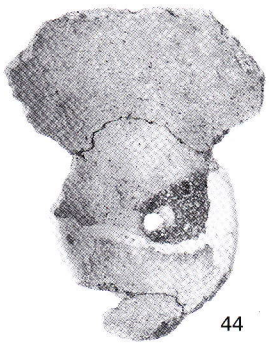
SD－10 出土遺物　弥生土器38 高杯

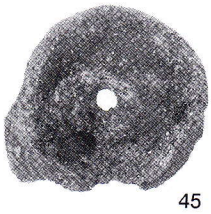




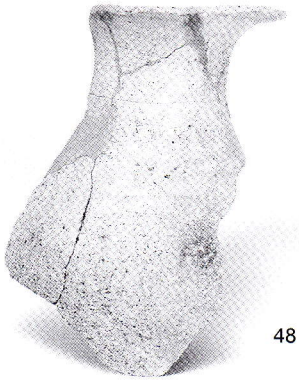
SD－2 出土遺物　弥生土器40 広口壺、42 甕

SD－2 出土遺物　弥生土器41 壺底部

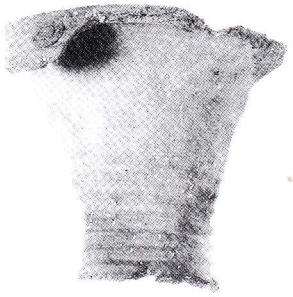




SD－2 出土遺物　弥生土器44・45 甕底部

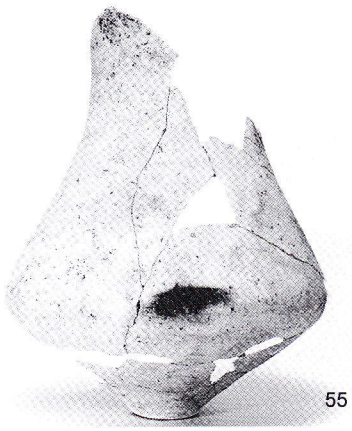


SD－5 出土遺物　弥生土器48 広口壺



SD－5 出土遺物　弥生土器53・56 広口壺

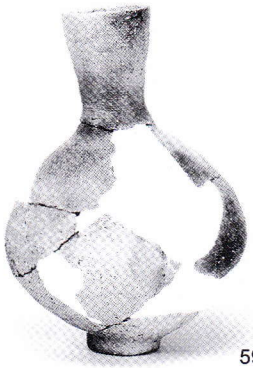
SD－5 出土遺物　弥生土器54 壺底部



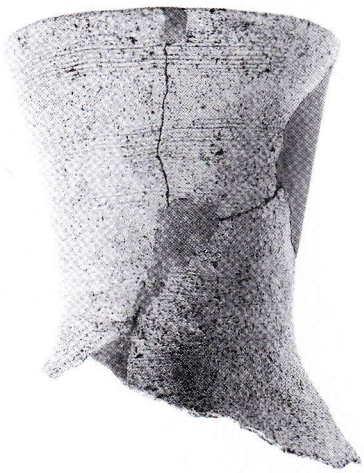
SD－5 出土遺物　弥生土器55 広口壺

57

58


59

SD－5 出土遺物　弥生土器57 広口壺、58 壺、59 細頸壺


61

SD－5 出土遺物　弥生土器61 直口壺

64

SD－5 出土遺物　弥生土器64 段状口縁壺

67

SD－5 出土遺物　弥生土器67 壺底部

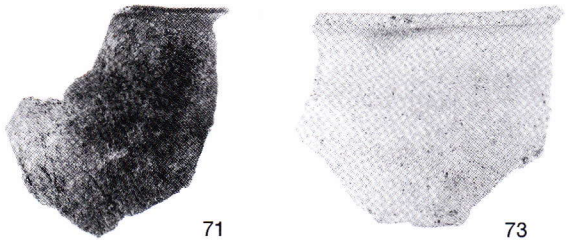
69

SD－5 出土遺物　弥生土器69 甕

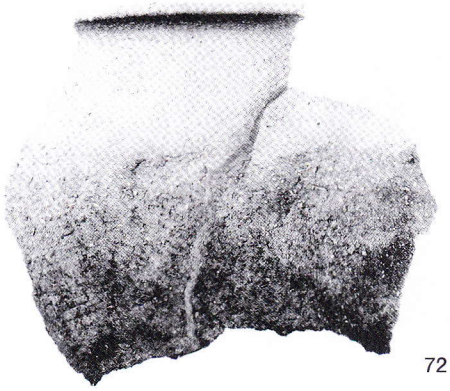
70

SD－5 出土遺物　弥生土器70 甕

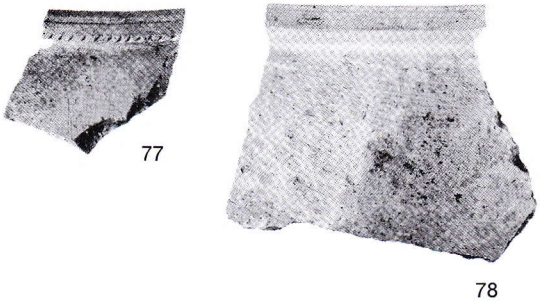
図版20



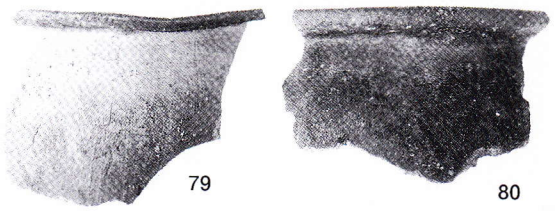
SD－5 出土遺物　弥生土器71・73 甕



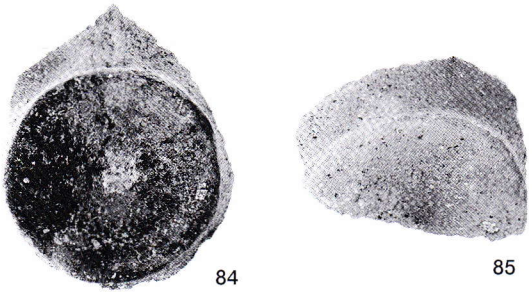
SD－5 出土遺物　弥生土器72 甕



SD－5 出土遺物　弥生土器77・78 甕

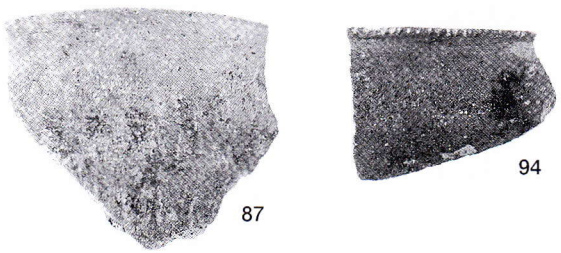


SD－5 出土遺物　弥生土器79・80 甕



SD－5 出土遺物　弥生土器84・85 甕底部

SD－5 出土遺物　弥生土器86 高杯



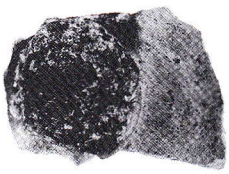
SD－5 出土遺物　弥生土器87 高杯、94 鉢

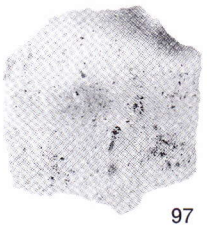
SD－5 出土遺物　弥生土器90 高杯

91

92

SD－5 出土遺物　弥生土器91・92 脚部

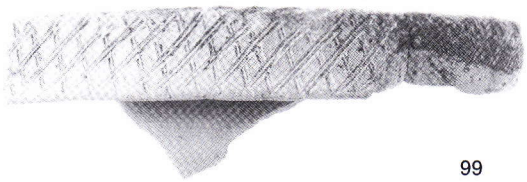

96


97

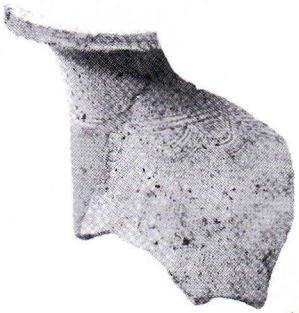
SD－5 出土遺物　弥生土器96・97 蓋

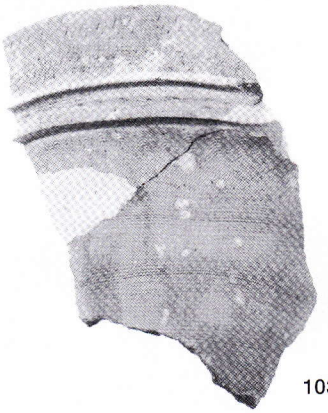
98

SK－42 出土遺物　弥生土器98 広口壺

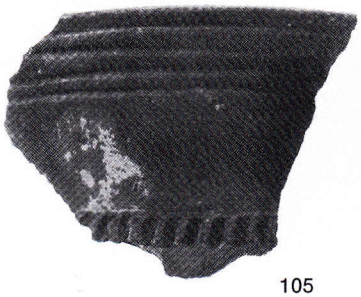

99

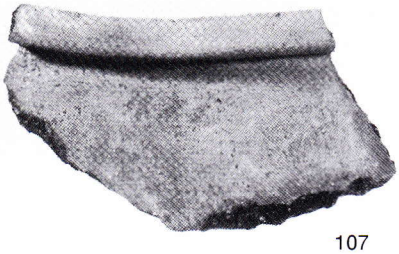
SK－42 出土遺物　弥生土器99 広口壺


102


103

104


105

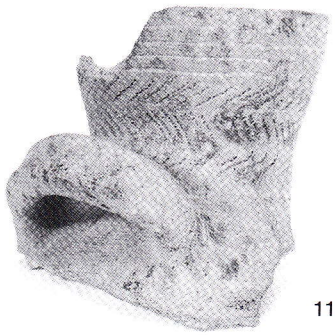

107

108

109

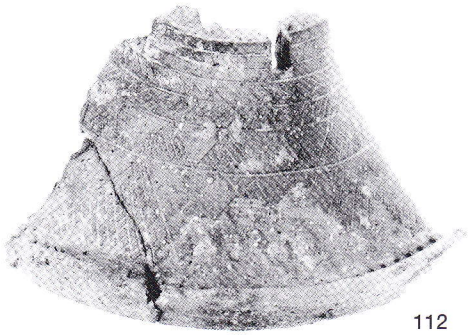
SK－42 出土遺物　弥生土器102 広口壺、103～105 直口壺、107 甕、108 鉢、109 高杯

図版22



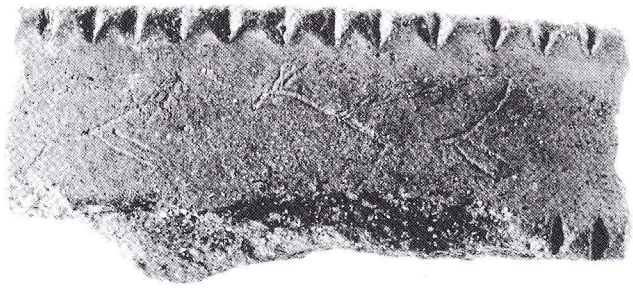
110

SK－35 出土遺物　弥生土器110 水差形土器



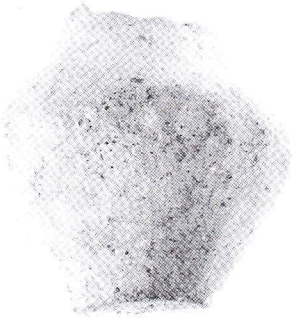
112

第３層 出土遺物　弥生土器112 高杯

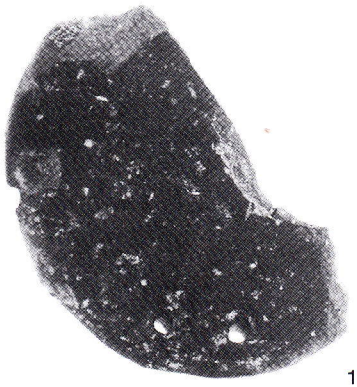


116

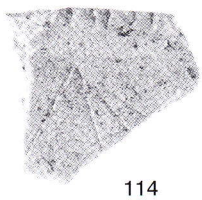
SD－７ 出土遺物　弥生土器116 段状口縁壺（絵画土器）



111



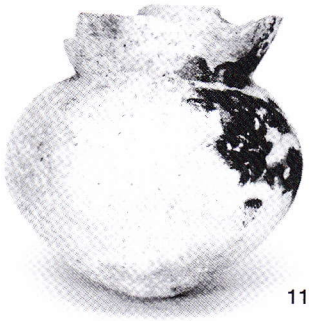
113



114

115

SV－１ 裏込め他 出土遺物　弥生土器111 壺、113 壺蓋、114・115 段状口縁壺

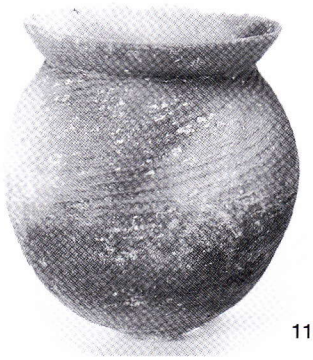


117

SK－35 出土遺物　土師器117 壺

118

SK－35 出土遺物　土師器118 甕



119

SK－35 出土遺物　土師器119 甕

121

SK－21 出土遺物　土師器121 複合口縁壺

122

SK－21 出土遺物　土師器122 壺

123

SK－21 出土遺物　土師器123 壺

124

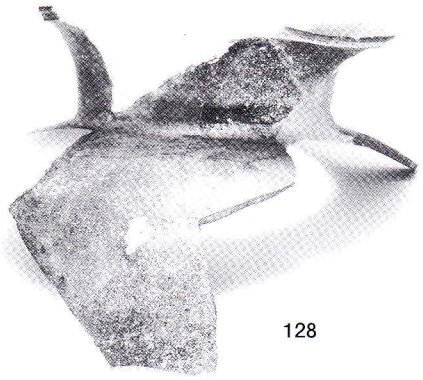
SK－21 出土遺物　土師器124 甕

125

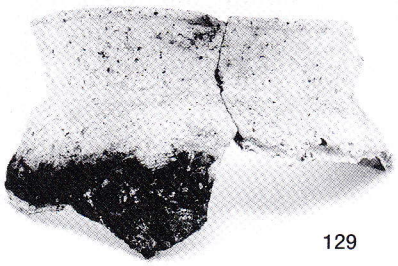
126

SK－21 出土遺物　土師器125 甕、126 甑

図版24



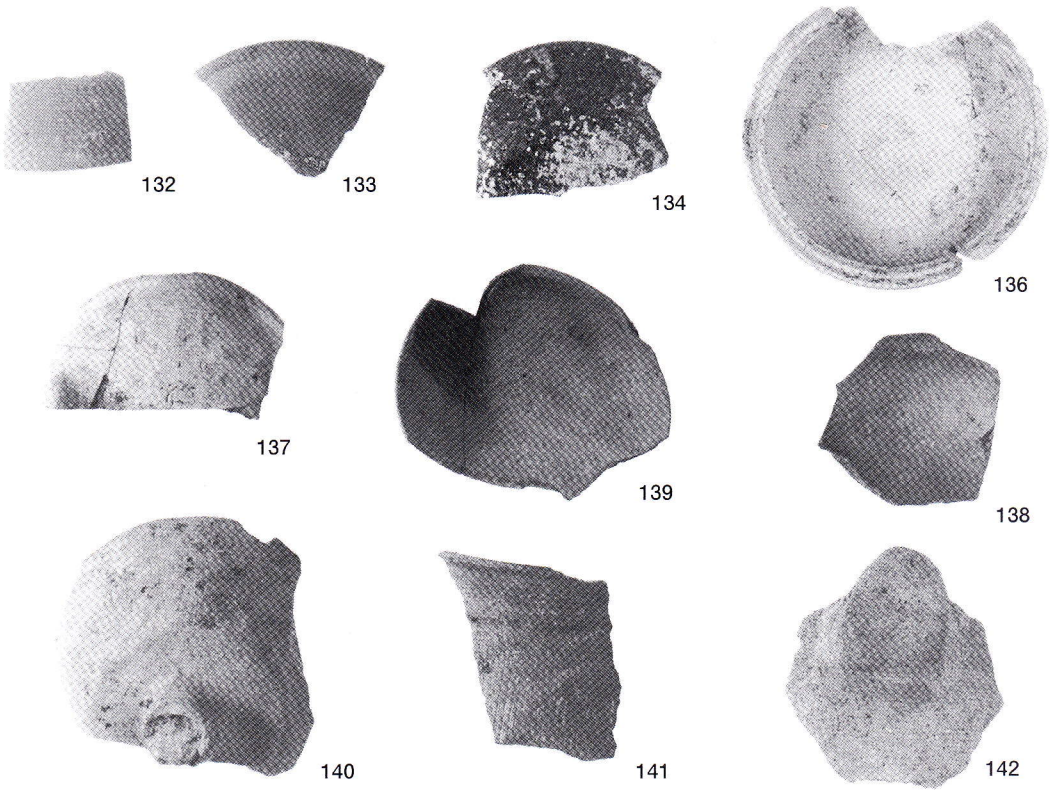
SK－39 出土遺物　須恵器128 甕



SK－39 出土遺物　土師器129 甕

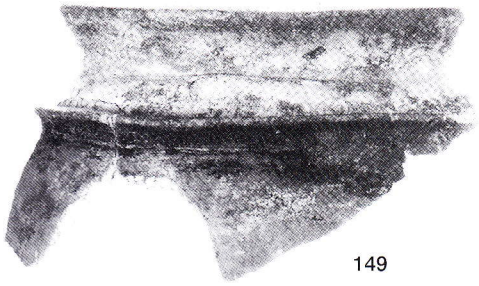
SD－5 出土遺物　須恵器130 壺

SK－17 出土遺物　須恵器131 壺



SD－6 出土遺物　須恵器 132 杯蓋、133・134・136 杯身
土師器 137～139 杯、140 高杯、141 甕、142 堝 把手

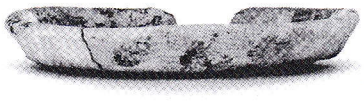
SK－32 出土遺物　土師器146～148 皿



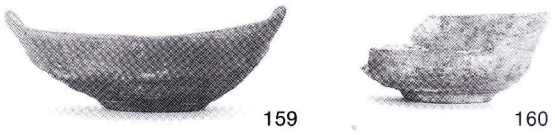
SK－32 出土遺物　土師器149 釜

SK－32 出土遺物　土師器150 釜

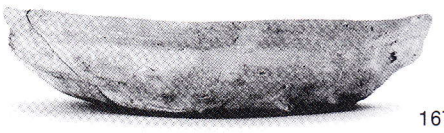
SK－32 出土遺物　瓦器151 椀



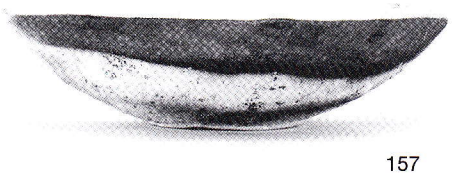
SK－41 出土遺物　土師器155 皿



SK－41 出土遺物　瓦器159・160 小椀



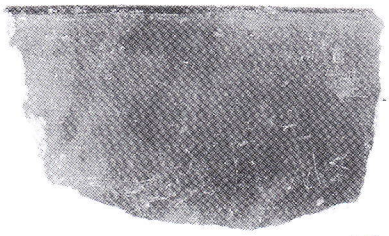
SK－31 出土遺物　土師器167 皿



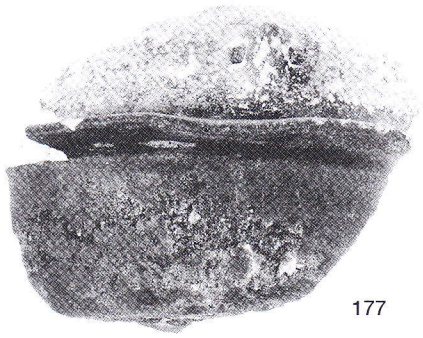
SK－41 出土遺物　瓦器156・157 椀

SK－28 他出土遺物　土師器173・175 釜

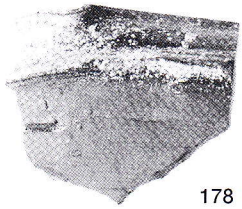
図版26

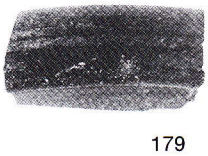


SE－1 出土遺物　土師質土器176 火鉢

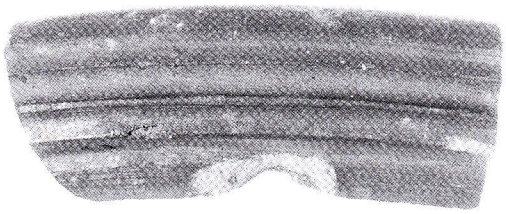


SE－1 出土遺物　瓦質土器177 釜

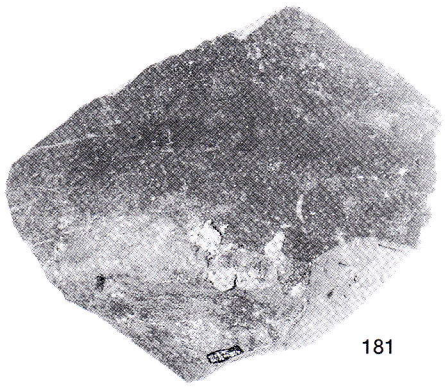




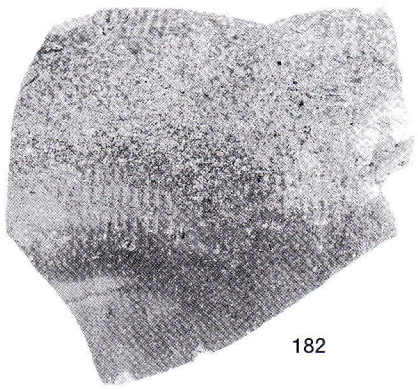
SE－1 他出土遺物　備前焼178・179 擂鉢



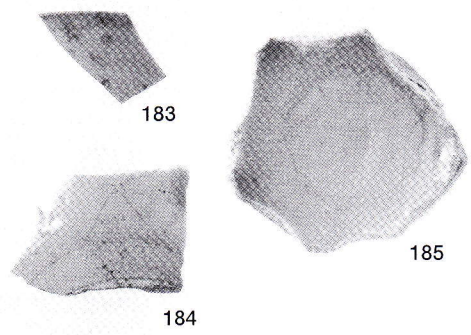
SK－36 出土遺物　備前焼180 甕口縁部

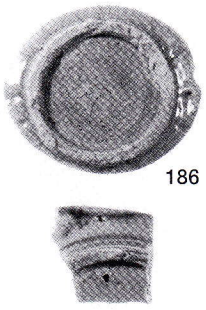


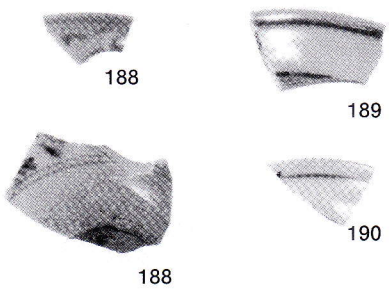
SK－36 出土遺物　備前焼181 甕底部



整地土 3層 出土遺物　常滑焼182 甕





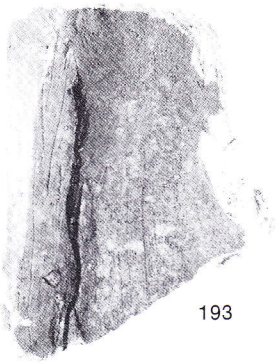


輸入陶磁器　中国製白磁183・184 碗、186 菊皿、中国製青磁185 碗、中国製染付187 碗、188～190 皿

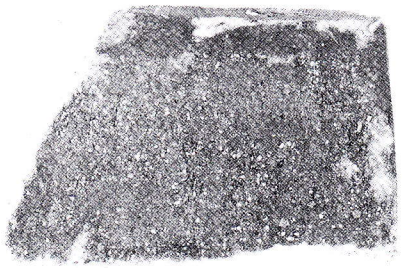
191

192

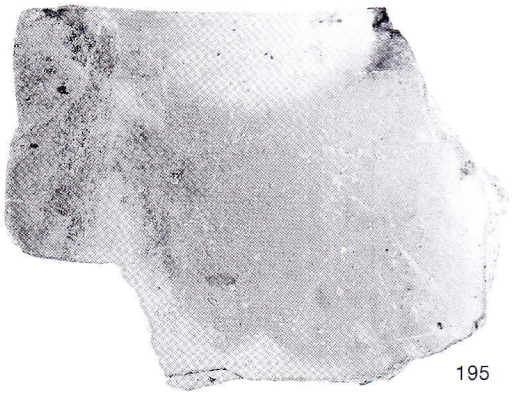
瓦　191・192 軒平瓦


193

瓦　193 丸瓦

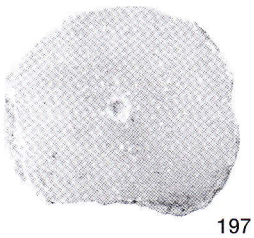

194

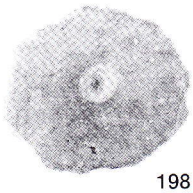
瓦　194 平瓦


195

瓦　195 平瓦

196


197


198

199

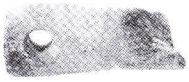
200

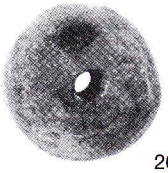
201

202

203

204

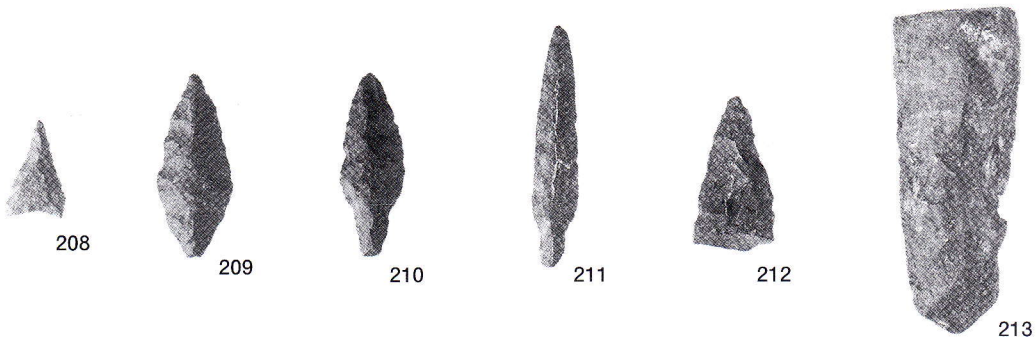

205


206

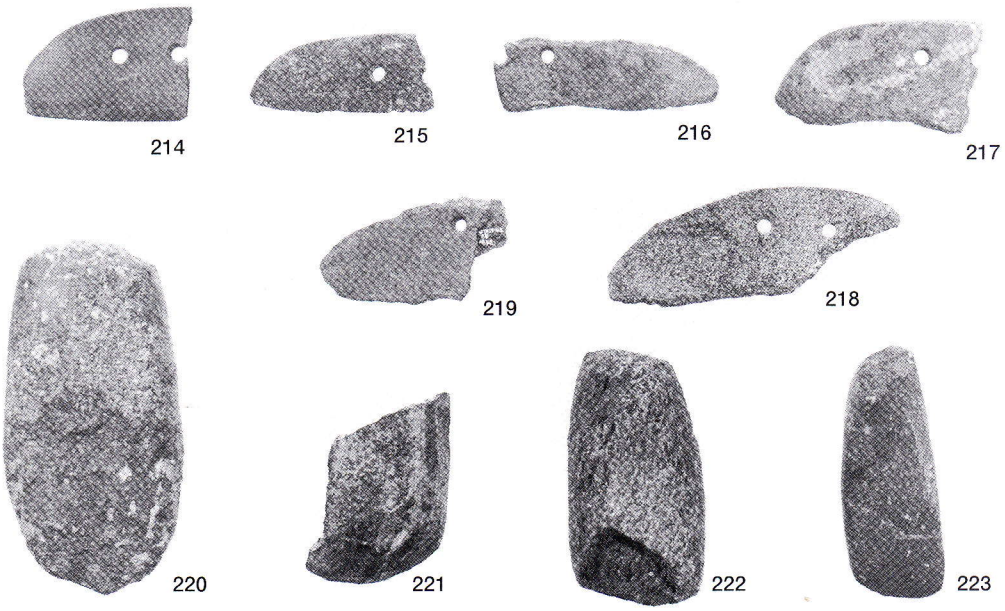
207

土製品　196～199 円板状転用品、200～203 有孔土錘、204・205 棒状土錘、206 紡錘車、207 手づくね土器

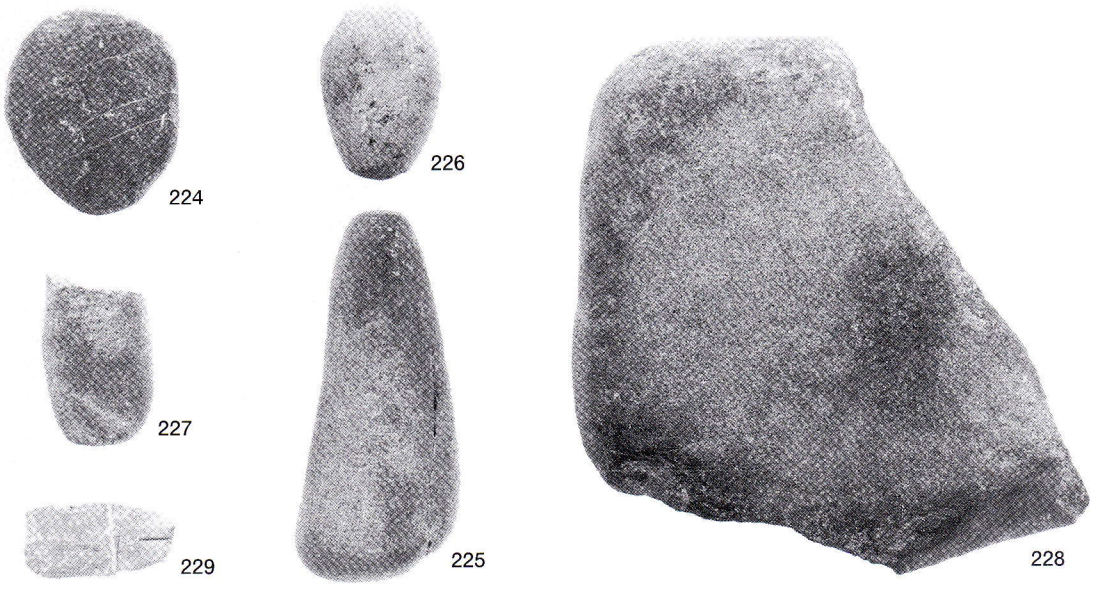
図版28



打製石器　208 平基式石鏃、209 凸基式石鏃、210・211 有茎式石鏃、212・213 石槍状石器



磨製石器　214～219 石庖丁、220～222 太型蛤刃石斧、223 柱状片刃石斧



礫石器　224～227 叩石、228 台石、229 砥石

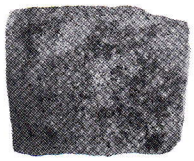
230

石製品　230 有孔円板

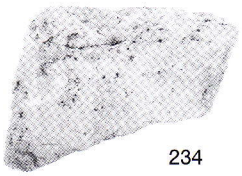
231

232

石製品　231・232 火打石



233



234

石製品　233・234 砥石

235

235

金属製品　235 銅鏃

236

木製品　236 膝柄横斧

237

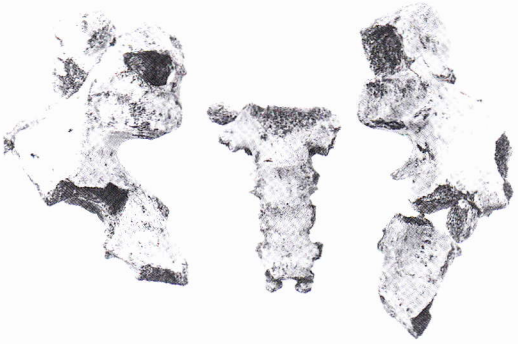
木製品　237 杭

238

木製品　238 杭

図版30

SK－36 出土人骨　右上肢

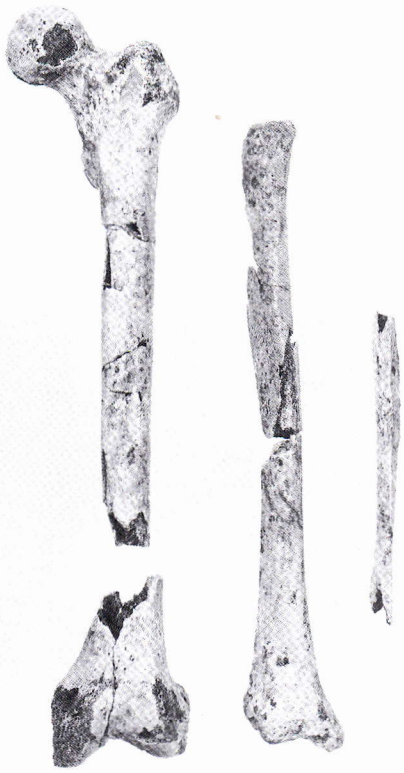


SK－36 出土人骨　骨盤前面

SK－36 出土人骨　右足

SK－36 出土人骨　骨盤後面

SK－36 出土人骨　右下肢



SK－36 出土人骨　左下肢

文化財室

平成13年3月31日 発行

太田・黒田遺跡　第45次発掘調査概報

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　西岡総合印刷株式会社

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 2001